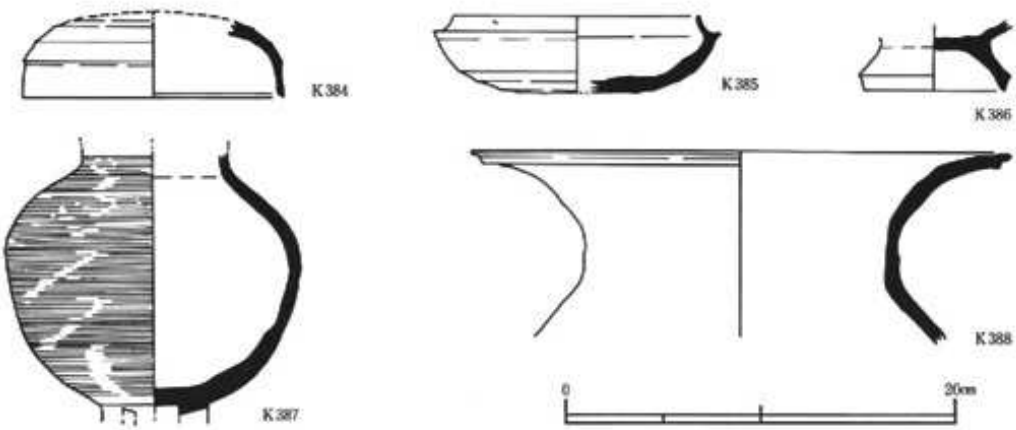
頸壺、甕、甑、器台、提瓶で9器種がある。須恵器 杯蓋K348～K357は口径が15cm前後あり、稜も認められない。杯身K358～K368は口径が大きく、器高が浅いものが多い。底部にはヘラ記号を記したものがある。土師器は細片で器種は特定できない。

942－ＯＳはK18ＶＫで検出し、やや屈曲しながら東西方向をとる溝である。検出長は約4.5mで、丘陵の端にあたる東方では遺構が失われていた。最大幅約2.5m、深さは約0.1m分が残っていた。断面形は台形で、底面のレベルは東の方が約5cm低い。埋土は375－ＯＳと同一で、念のため別遺構の扱いとしたが、おそらく375－ＯＳと一連の遺構であろう。ただ、375－ＯＳの東西方向の部分と同時存在したかどうかは明らかでない。

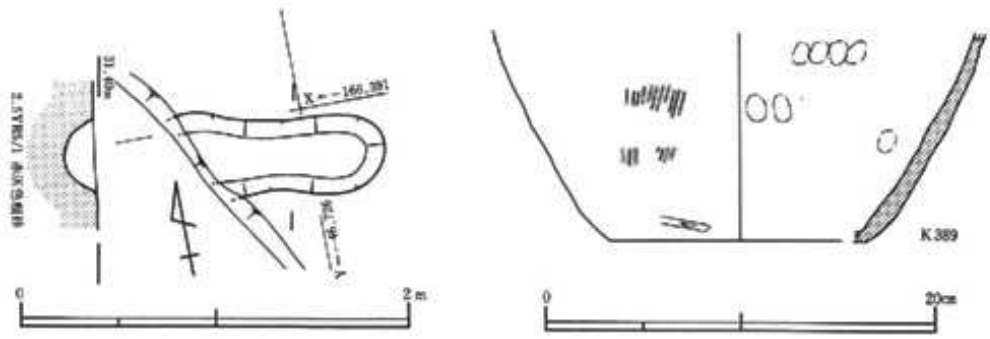
この遺構の時期はやや時間幅があるがII型式3～4段階頃と考えられる。

57－ＯＳ（第90・131・132図、図版47下・99D参照）

K18WDからK23ＢＥにかけて北～南に位置する。この溝は延長すれば309－ＯＳや114－ＯＳとは直交する方向にある。検出長は9.2m、幅0.3～0.7m、深さ0.1mで断面は浅い



第132図　57－ＯＳ出土遺物（1/4）



第133図　408－ＯＳ平面・断面図（1/40），出土遺物（1/4）

U字形である。溝底は南側が約30cm高い。埋土は3層からなり、順に5YR4/2灰褐色シルト、7.5YR3/1黒褐色シルト、7.5YR7/8黄橙色シルトである。古墳時代I期の溝111－OSは重複する。遺物は16点の須恵器の破片が出土している。器種は杯蓋、低脚高杯、台付長頸壺、甕等がある。出土した遺物は時期幅がかなりある。最も新しい遺物は台付長頸壺 K387で、須恵器から見てII型式3～4段階と考えられる。

408－OS（第90・133図参照）

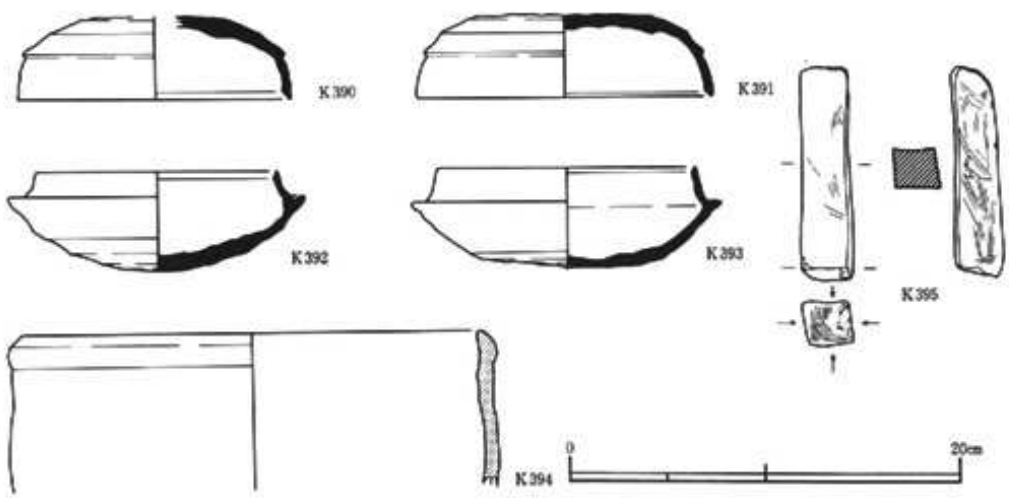
K18WTに位置する。溝の方向は東～西である。検出長は1m、幅0.4m、深さ0.15mで断面はU字形である。溝は平安時代の掘立柱建物395－OBと重複し、西側は攪乱で切られている。遺物は韓式系土器の甑の破片K389が1点出土している。この遺構の時期については、I型式の範疇で捉えられよう。

斜面部の溝群概略

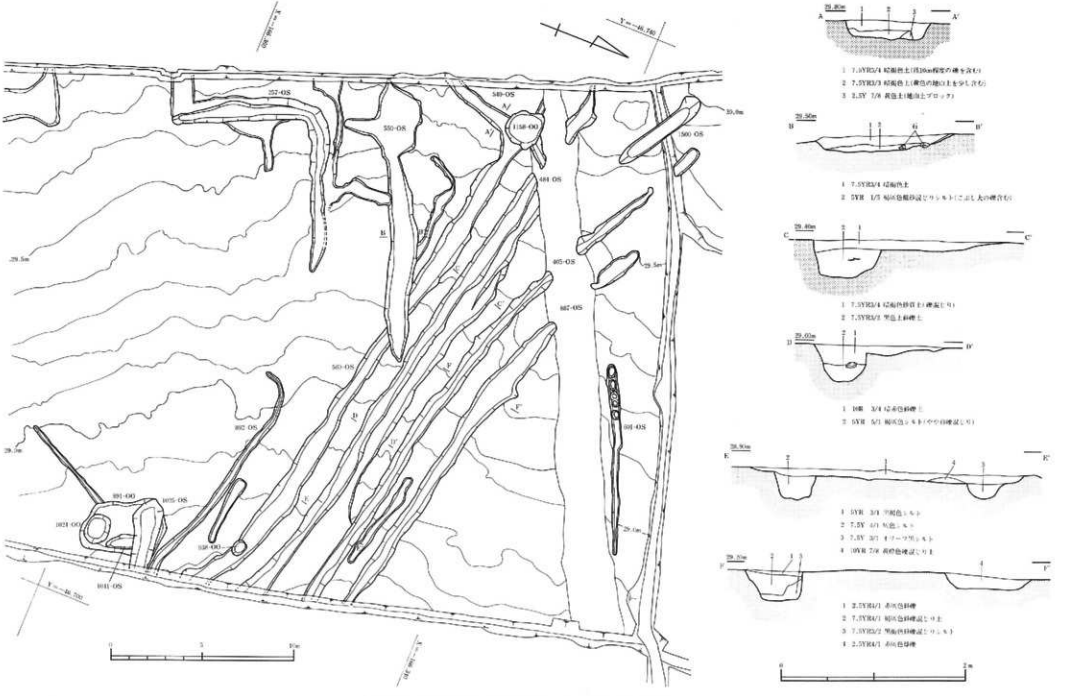
丘陵の斜面部には、斜面を斜めに、数条の平行に走る溝の一群が存在する。これらの溝は、斜面部の調査地の中央付近を長さ約34m、幅8～10mにわたって横断する形になり両端とも調査区外に延びている。各溝は長さ、幅、深さともまちまちであるが、遺物出土量の多い484－OSを中心に同様の性格を持った一連のものであると考えられる。

1500－OS（第90・134図、図版99B参照）

K18JP～K18JQにかけて北西～南東に位置する。この溝は484－OS等の一連の溝のうちで最も高い位置にある。検出長は5.5m、幅0.8m、深さ0.4mで、断面は、U字形である。溝底は、北西側が0.35m高い。埋土は7.5YR4/1褐灰色砂礫混り土である。奈良



第134図　1500－OS出土遺物（1/4）



第135図　Ⅱ区古墳時代溝群平面（1/200）・断面（1/40）図

時代の掘立柱建物393－ＯＢの柱穴（761－ＯＰ）に切られている。中央部は現代の溝により削られている。

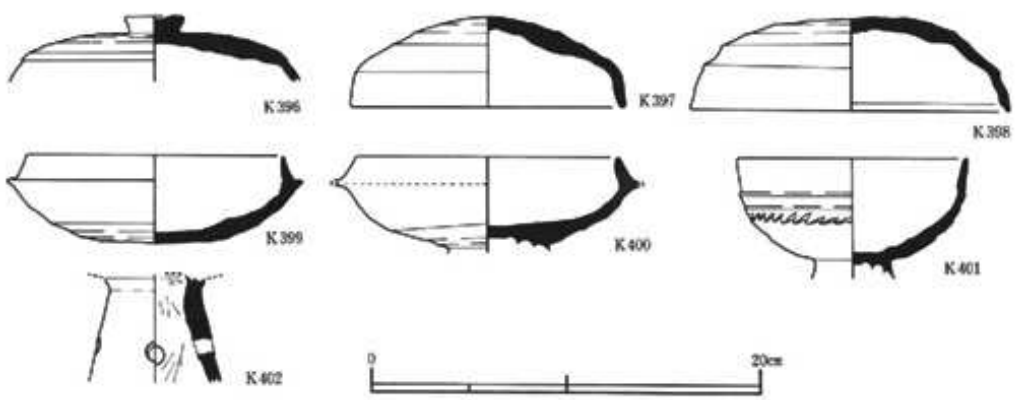
出土遺物は、須恵器の蓋Ｋ390・Ｋ391、杯身Ｋ392・Ｋ393、鉢Ｋ394、土師器は破片が若干出土している。鉢は明青灰色で焼成は瓦質である。また、泥岩製の砥石が出土している。この砥石は、長辺が10.8㎝、断面はほぼ正方形で各辺は2.2～2.4㎝である。又片端は使用のため、若干細くなっている。重量は114.6ｇである。使用痕跡は全ての面に認められる。この遺構の時期は、杯類の型式からⅡ型式２段階の頃と考えている。

405－ＯＳ（第90・135・136図、図版99Ｃ参照）

Ｋ18ＩＱ～Ｋ18ＬＸにかけて北西～南東に位置する。方向は、484－ＯＳ等とほぼ同じであるが北西側はやや北に振る。検出長は約32m、ただし、南東側は調査区外に延びている。幅0.4～１m、深さ0.3mで、断面は逆台形である。溝底は北西側が1.4m高い。埋土は３層に分けられ、上から赤灰色砂礫土、褐灰色砂礫混り土、黒褐色砂礫混りシルトである。埋土の状況から流水状況も考えられる。北西部分は現代の溝で、またＫ18ＫＳ付近で中世の溝（400－ＯＳ）により分断されている。

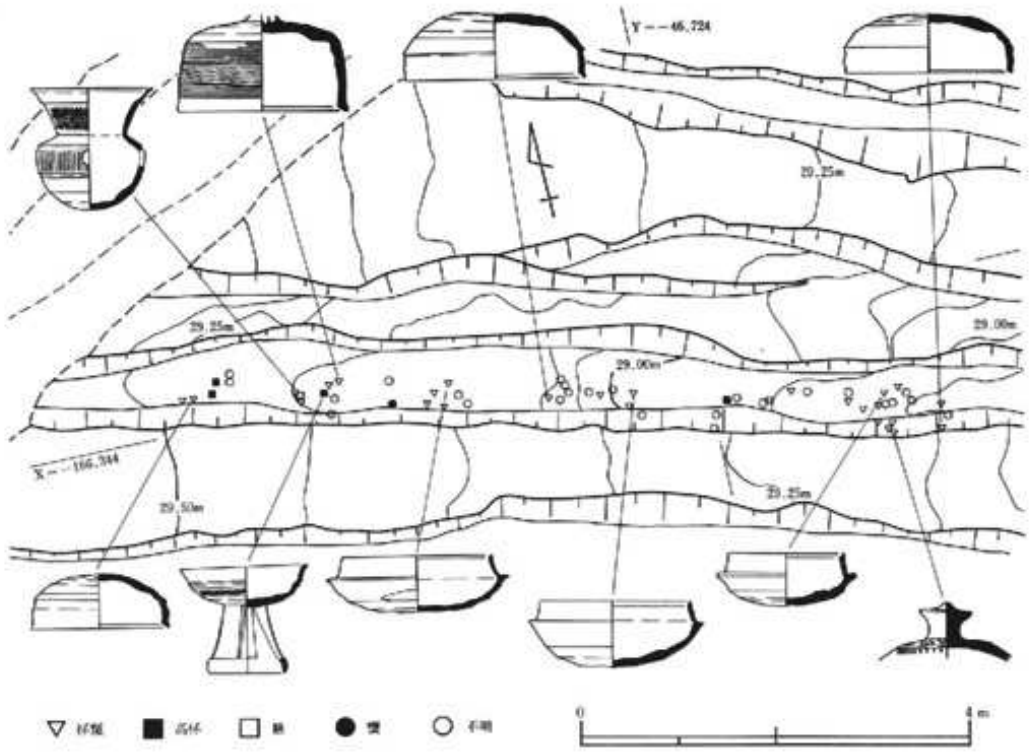
出土遺物は、須恵器の杯蓋Ｋ397・Ｋ398、杯身Ｋ399、有蓋高杯Ｋ400、無蓋高杯Ｋ401、高杯脚部Ｋ402、土師器は高杯、甕の破片がある。この遺構の時期は、杯類の型式からⅡ型式２段階の頃と考えている。

484－ＯＳ（第90・135・137～141図、図版49・99Ｅ・100～103Ａ参照）



第136図　405－ＯＳ出土遺物（1/4）

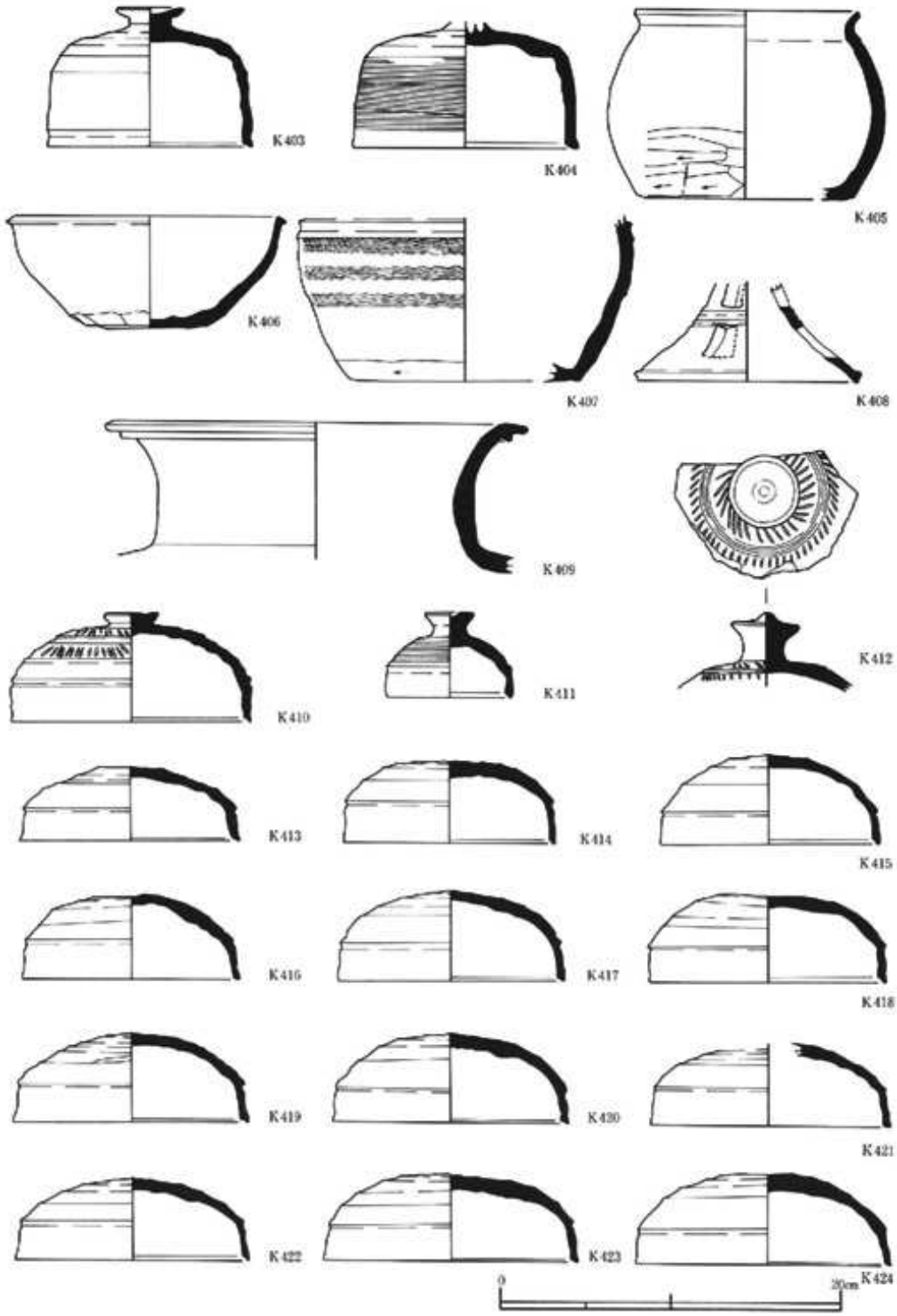
Ｋ18ＫＱ～Ｋ18ＭＸにかけて北西～南東に位置する。丘陵斜面部において、斜面を斜めに横切る形になる一群の溝の中で、遺物の出土量や規模で他に抜きんでており、中心的な溝と言える。検出長は約34m、幅1.0～2.2m、深さ0.4mである。断面は南側が急角度で



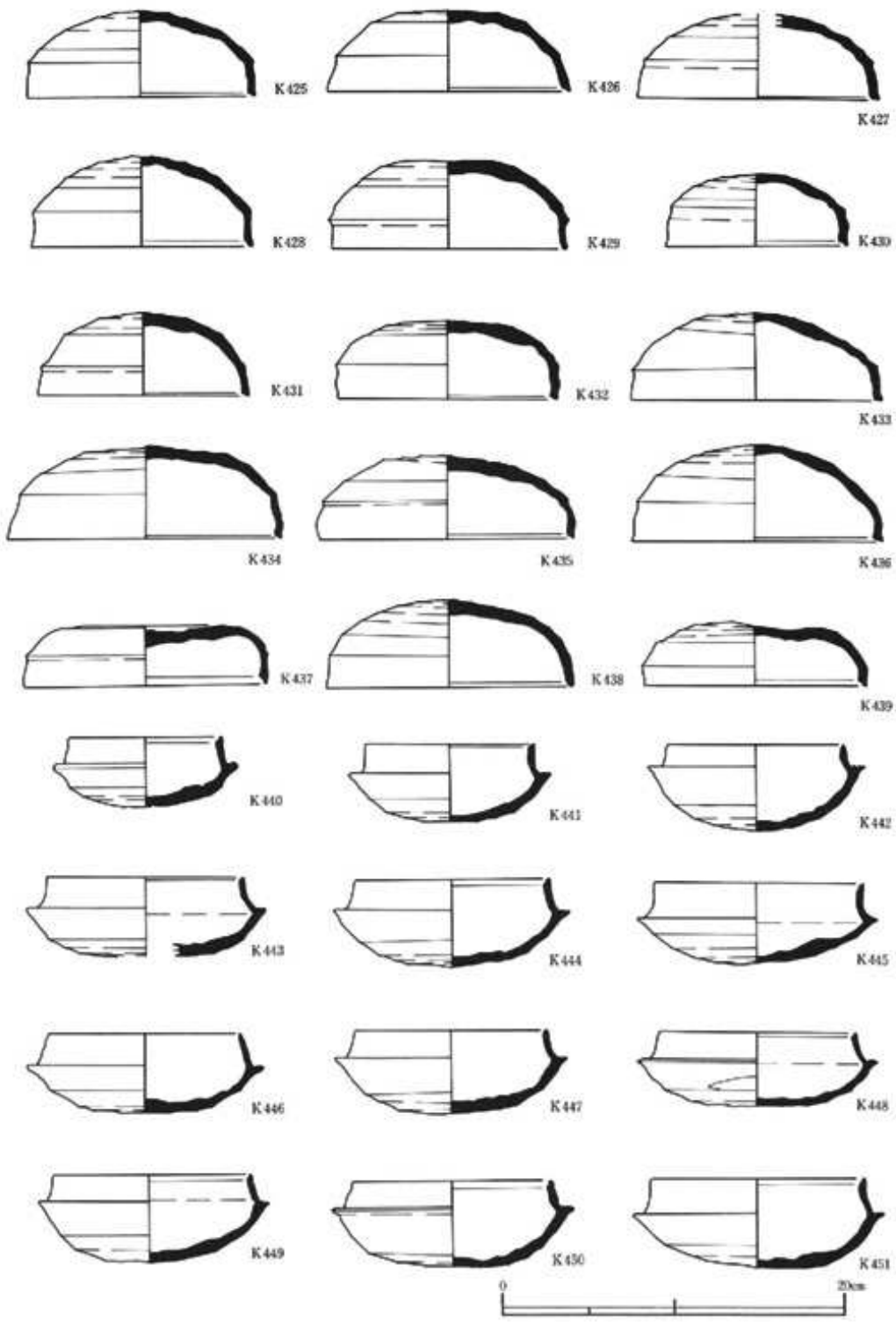
第137図　484－ＯＳ遺物出土状態（1/80）

溝底まで落ち、北側はなだらかに落ち込んだ後、途中から南側と同様に急角度で落ち込み、２段に掘られた状況を呈する。北西端と南東端は調査区外に延びており、全長はさらに延びる。溝底は、北西側が1.3m高い。埋土は２層に分けられ、上から暗褐色～暗赤色砂質土礫混り土、黒色～褐灰色砂礫土である。遺物は、下層の上部から上層との境付近に多く含まれる傾向がある。埋土に砂礫分が多く、遺構掘削中に水の湧出量が多かったことなどから、水が流れていた可能性が大きい。K18KQ付近で中世の溝（400－ＯＳ）に切られている。特にK18KR～K18LU付近には、杯の完形品などの遺物が集中する。出土遺物は、須恵器が圧倒的に多く、初期須恵器も多少あるが、多くはそれよりも時期が下る。土師器は出土したが図化にたえるものはなかった。他に土錘K484・K485などがある。遺物は、無秩序に投げ込まれた状況と推察できる。また、須恵器の中に焼け歪んだものと、灰白色、橙色などの生焼けのものが目立つのも特徴的である。この溝からは、1100－ＯＳ出土の器台K93と同一個体と考えられる器台片も出土している。

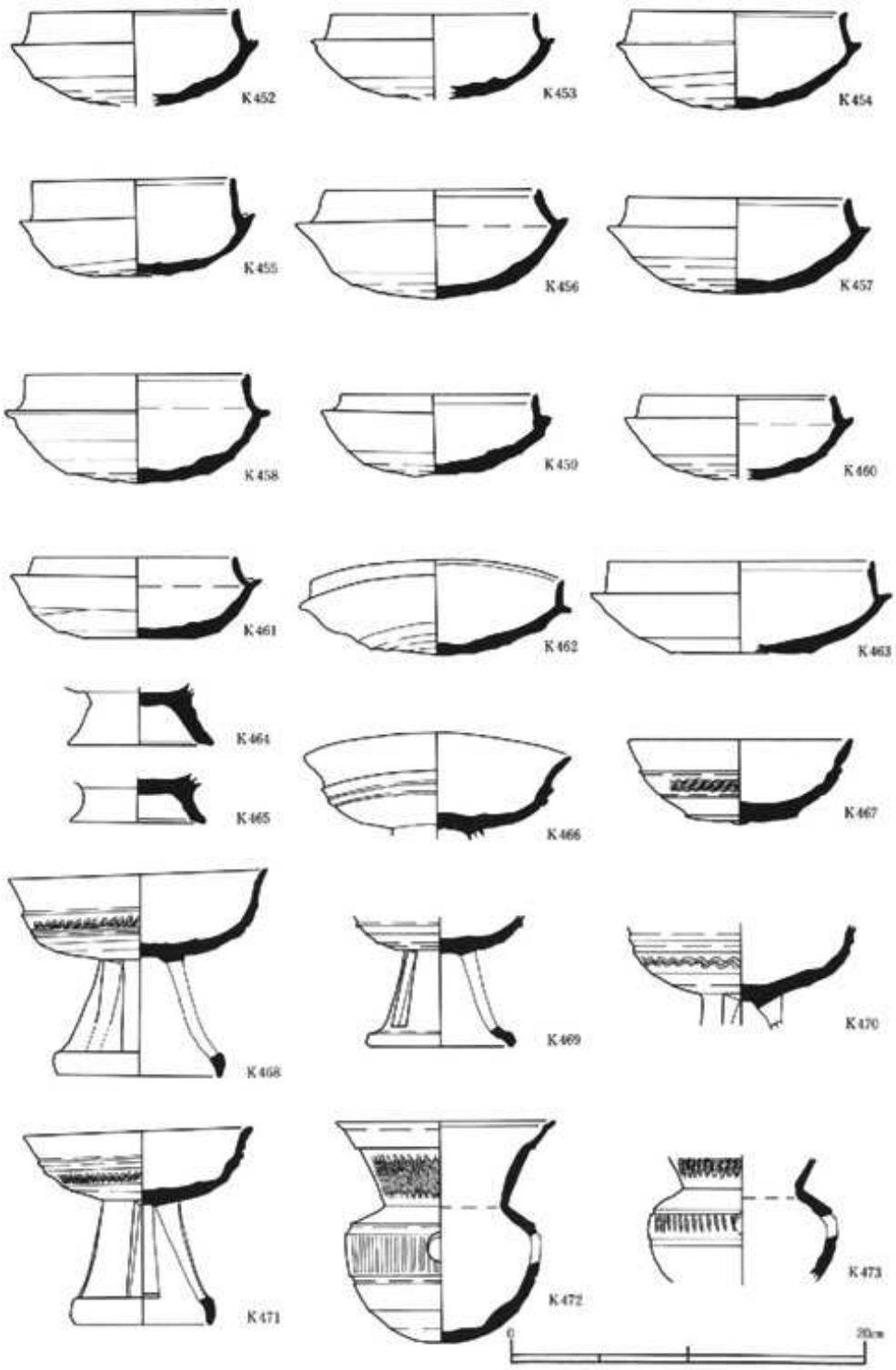
初期須恵器としては、壺蓋、把手付鉢、鉢、短頸壺、高杯脚部K408、甕口縁部K409等がある。壺蓋K403は、立ち上がり部分が高く、天井部外面を回転ヘラケズリし、内面に



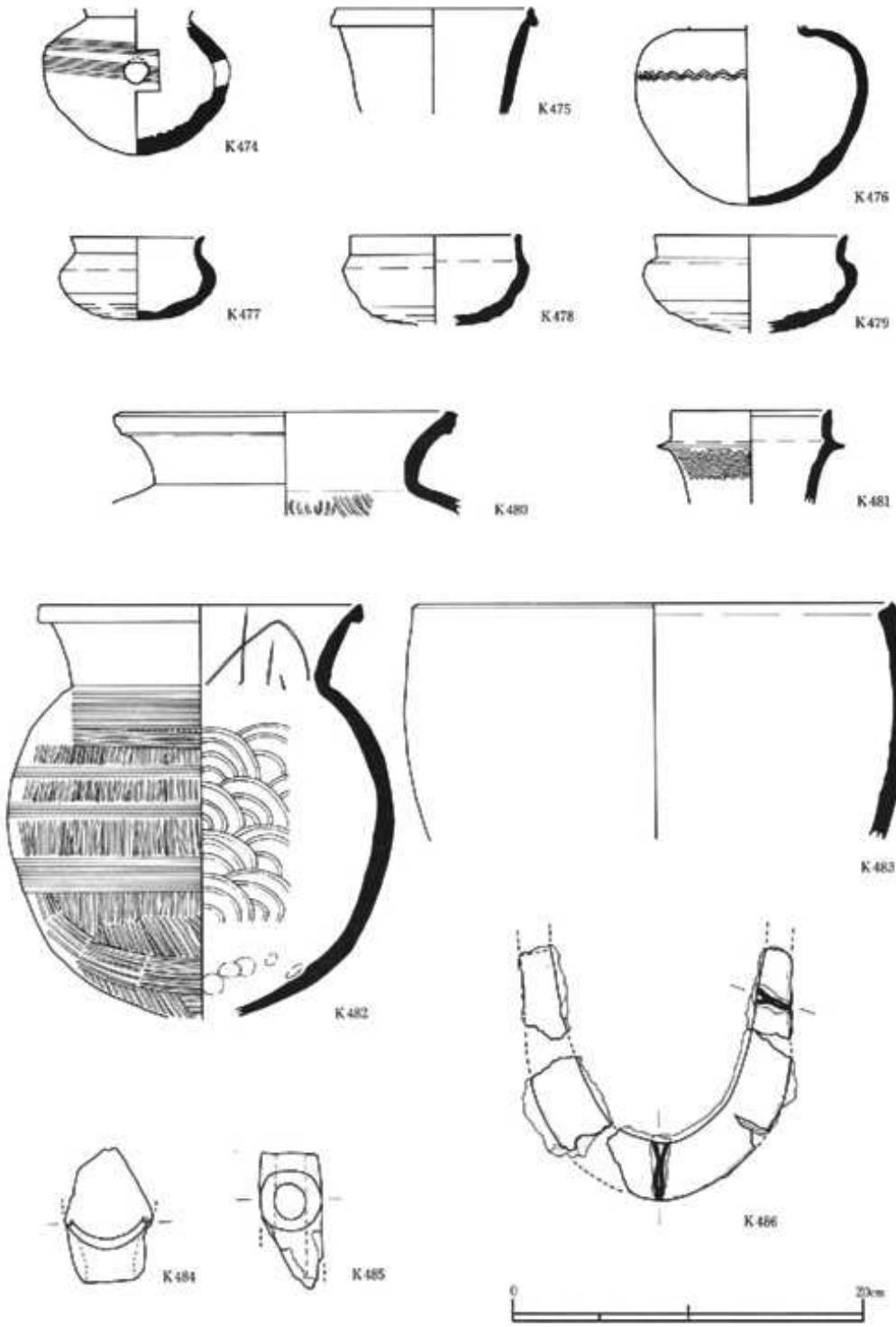
第138図　484－ＯＳ出土遺物１（1/4）



第139図　484－ＯＳ出土遺物２（1/4）



第140図　484－ＯＳ出土遺物３（1/4）



第141図　484－ＯＳ出土遺物４（1/4）

は不定方向のナデが見られる。同じくK404は灰白色をした生焼けのものである。短頸壺K405は、器面調整は回転ナデと静止ヘラケズリである。鉢K406は、外面底部が静止ヘラケズリされ、内面底部はナデ調整し、口縁部は面取りが行われ、その端部はシャープである。全体の色調は明青灰色で、胎土、焼成とも良好である。把手付鉢K407は、破片のため把手部分は確認できないが、形状から器種を判断した。

その他の時期の須恵器では、杯類が最も多く、壺蓋、低脚高杯、無蓋高杯、甕、小型の甕、甑などが出土している。壺蓋K411は小型のもので、全体の色調は暗赤灰色、外面天井部にはカキメがある。同じくK412はしっかりとしたつまみ部分に特徴があり、頂部中央が突出し縁片部に沈線が廻る。外面天井部には2段に刺突文が施され、その間を2本の沈線が廻る。また外面は自然釉がかかり、濃緑色になっている。杯類の内K420・K421・K423・K426・K428・K431・K435・K436・K451・K455は生焼けであり、K416・K417・K432・K437・K439・K445・K457・K462は歪みが著しい。高杯K467は脚柱部が欠落したまま焼かれたものと考えられ、K471は歪みが著しい。小型甕K482は生焼けのもので、口縁部にヘラ記号がある。

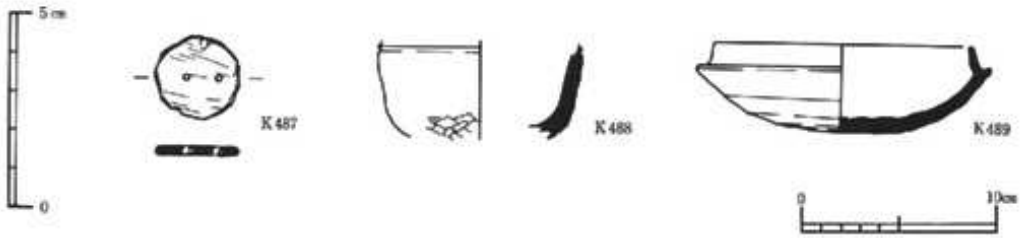
金属製品としては、鉄製の鋤鍬K486が出土している。全体の形はU字形で、外側の先が細くなっており、内側は木を挟むために端から端までV字の溝状に開いている。鉄の厚みは0.2～0.5cm、幅は3.2cmである。残存重量は186.7gで、残存率は約65%である。

この溝は杯類の形状から、II型式2段階の頃に埋まったと考える。

また、この一群の溝から北では古墳時代の遺構が減少する傾向が顕著であることから、集落など、生活空間のなんらかの境界を意味する溝と考えられる。

887－ＯＳ（第90・135・142図、図版103Ｃ参照）

K18ＪＲ～K18ＬＸにかけて北西～南東に位置する。この溝が484－ＯＳと同方向の溝群のうち最も北側にあたる。検出長は24.5m、幅0.5～1.0m、深さ0.15mで、断面は逆台形で北西に上がるほど浅くなる。溝底は、北西側が約1m高い。埋土は赤灰色砂礫土であ



第142図　892・887－ＯＳ出土遺物（1/4）

る。埋土の状況から、流水状況も考えられる。K18ＪＳ付近で中世の溝（400－ＯＳ）に切られている。

出土遺物は、須恵器の杯K489、他に須恵器の細片、土師器の甕が少量出土している。

この遺構の時期は、杯の型式からII型式２段階の頃と考えている。

892－ＯＳ（第90・135・142図、図版103Ｂ参照）

K18ＮＶ～K18ＮＹにかけて北西～南東に位置する。北西端は南に曲がっており、南東端は調査区外に延びている。検出長は約13m、幅0.3～0.5m、深さ0.25mで、断面は、Ｖ字形である。溝底は、北西側が0.4m高い。埋土は５ＹR3/1黒褐色シルトである。埋土の状況から、自然埋没と考えられる。

出土遺物は、須恵器 把手付椀K488、滑石製有孔円盤K487、他に器種不明片がある。有孔円盤の重量は、23ｇで、孔は２箇所とも片側から開けられている。

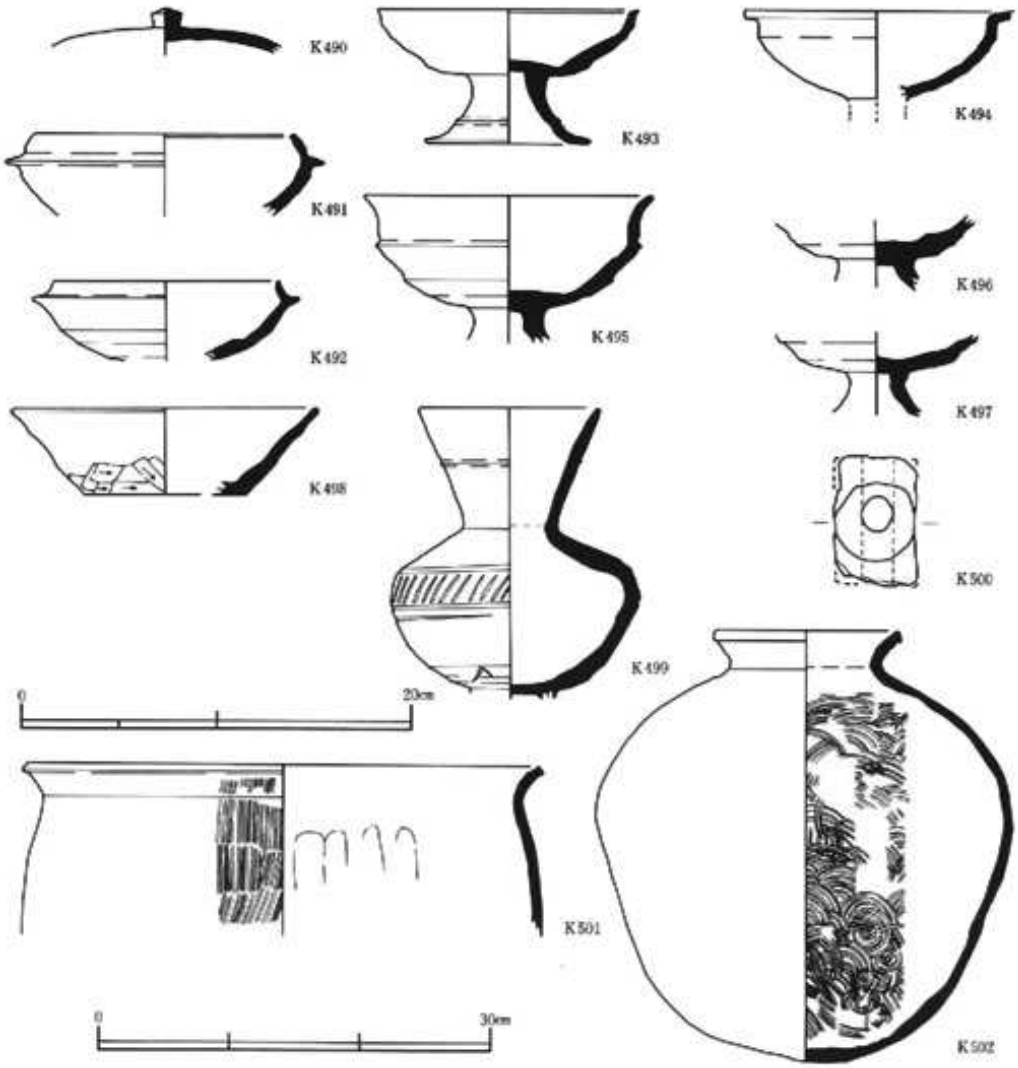
この遺構の時期は、484－ＯＳと同時期であると考えている。

540・560－ＯＳ（第90・135図参照）

K18ＭＱ～K18ＫＲ・K18ＬＱ～ＮＹにかけて位置する。K18ＬＱ付近で十文字に交差し、1158－ＯＯと重複するが共に前後関係は明瞭でない。検出長は東西（560－ＯＳ）32m、南北（540－ＯＳ）6.5mである。南端と東端は調査区外に延び、西端と北端は400－ＯＳに切られている。幅0.9～1.4m、深さ0.2mで、断面は逆台形である。溝底は、北西側が約１m高い。埋土は２層に分けられ、上から暗褐色土、地山土を含む暗褐色土である。埋土の状況から自然埋没と考えられる。938－ＯＯと重複する。出土遺物は、須恵器の細片が多く、図化できなかった。この遺構の時期は、遺物の内容などから1158－ＯＯと同じ時期と考えている。

550－ＯＳ（第90・135・143図、図版49下・103Ｄ参照）

K18ＮＱ～K18ＬＵにかけて南西～北東に位置する。検出長は15.5mで南西側の端は調査区外にのびているが、細く浅くなってきており、さほど長くはならないと考えられる。この溝はK18ＭＲ付近で幅1.2mほどの、不定形で遺構の肩が明瞭でない単なる窪みの様な状態である。しかし、K18ＭＳ付近から東の斜面下方にかけては、幅0.8～1.5m、深さ0.18m前後の浅いけれども明瞭な溝になる。断面は、皿の断面に似たなだらかな凹んだ形である。溝底は、南西側が約0.5m高く凹凸はさほどない。埋土は２層に分けられ、上から暗褐色土、褐灰色粗混りシルトである。下層の土には粗砂と共に若干の拳大の礫が混っており、流水堆積の可能性がある。切り合い関係では、560－ＯＳを切っており、484－Ｏ



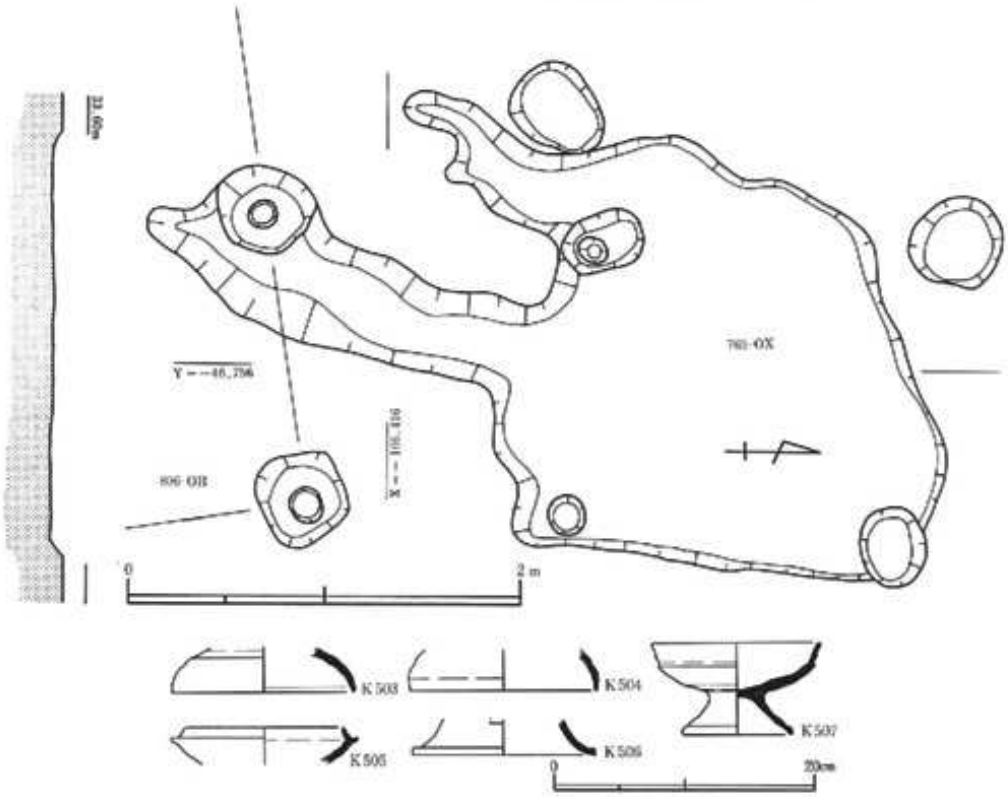
第143図　550－ＯＳ出土遺物（1/4，1/6）

Ｓ等の一連の溝よりも新しい。

出土遺物は、須恵器が多く、中でも初期須恵器と呼ばれる時期のものが多く、土師器は甕の破片が若干ある。ただし、比較的新しい須恵器も含まれており、初期須恵器などはこの遺構の時期を決定するものではなく、この溝が埋まった時点で比較的新しい須恵器と共に埋土に混入したと思われる。他に土錘Ｋ500も出土している。初期須恵器では、高杯、蓋、無蓋高杯、有蓋高杯、杯、浅鉢等がある。高杯蓋　Ｋ490はつまみ部分が特に小さい。杯身Ｋ491の口縁部はなめらかに内湾し、受部は薄い仕上がりで、受部上面は下方に傾斜している。無蓋高杯　Ｋ493は内面底部を不定方向ナデ、他の部分は回転ナデ調整され、脚

部の中程に凸帯が巡る。同じく、K494は器面調整は回転ナデで、口縁部がほぼ直角に外反し平らな部分がある。浅鉢K498は、外面底部に静止ヘラケズリ、内面底部に一定方向のナデがある他は回転ナデ調整である。韓式系土器の甕の口縁部K501も出土している。

この甕は全体の色調が橙色で、胎土も良好で比較的硬く焼けている。外面は平行タタキが施され、内面は指頭圧痕が顕著である。比較的新しい須恵器では、台付長頸壺、甕が出土している。台付長頸壺K499は、脚台部分が欠損している。脚台部分との接合部のやや上には回転ヘラケズリの後でヘラ記号を施してある。甕K502は550－ＯＳの東端、560－ＯＳとの切り合い部分付近で１個体分が破片となって重なり集中して出土している。この遺構の時期は、台付長頸壺と甕の形態からII型式３段階と判断している。

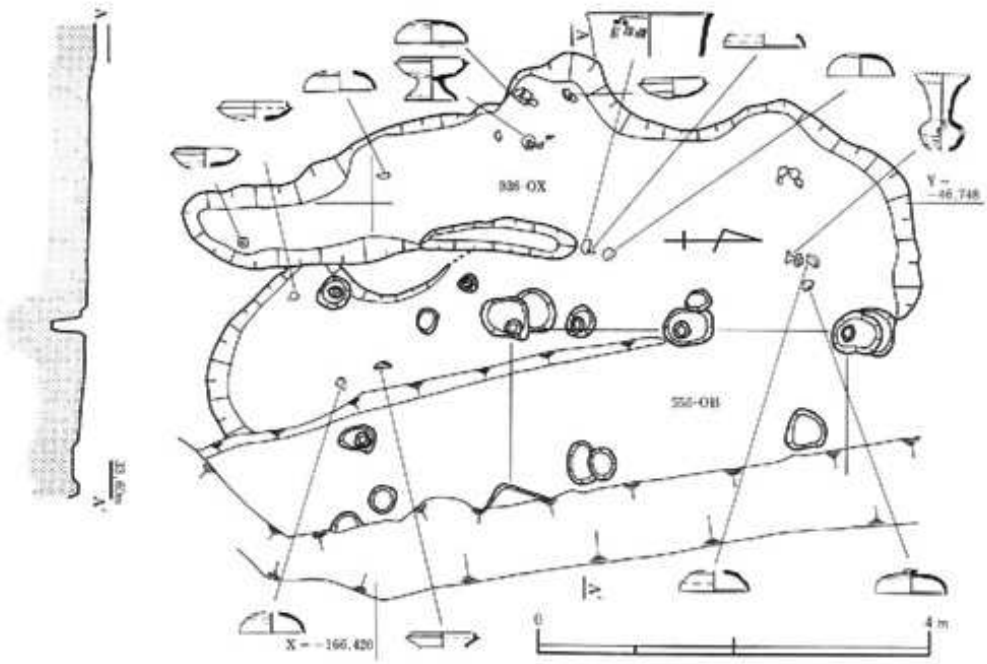


第144図　765－ＯＸ平面・断面図（1/40），出土遺物（1/6）

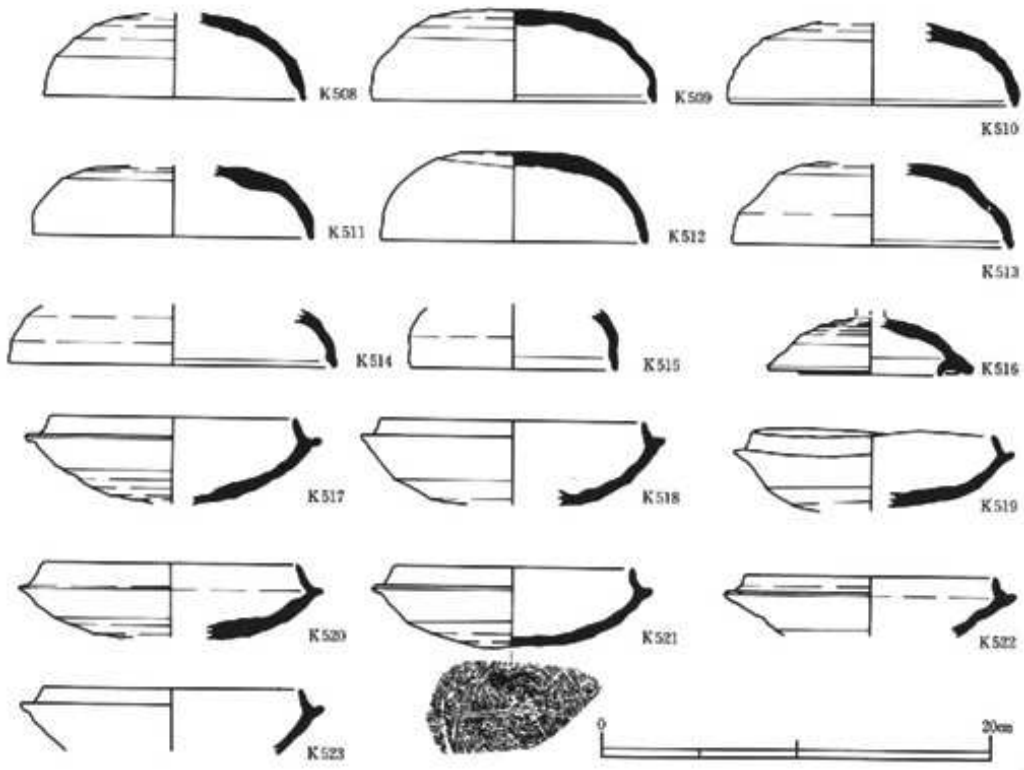
765－ＯＸ（第90・144図、図版103Ｅ参照）

K23ＡＫに位置するごく浅い落ち込みである。古墳時代II期の806－ＯＢの914－ＯＰに切られている。形状は不定形で、南北約４ｍ、東西約2.4ｍの範囲に及び、深さは0.1ｍ以下である。埋土は褐色系のシルトである。

出土遺物は土師器・須恵器である。土師器は残りが悪く、須恵器は初期須恵器を若干含



第145図　936－ＯＸ平面・断面図（1/80）



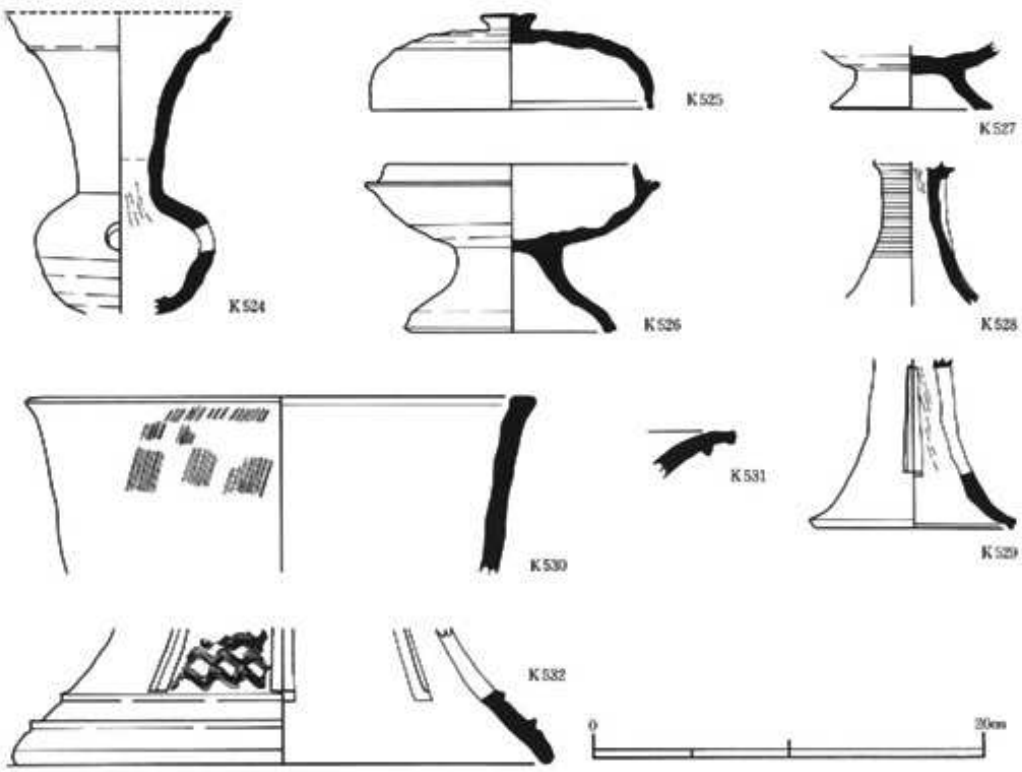
第146図　936－ＯＸ出土遺物１（1/4）

み、また6世紀代の各器種のものがある。図化できたもののうち、蓋は天井部と口縁部の間の稜が失われ、端部内面の段もほぼ丸く仕上げている。杯身はたちあがりが小さく、K506の高杯は長脚二段と考えられる。II型式4段階頃であろう。

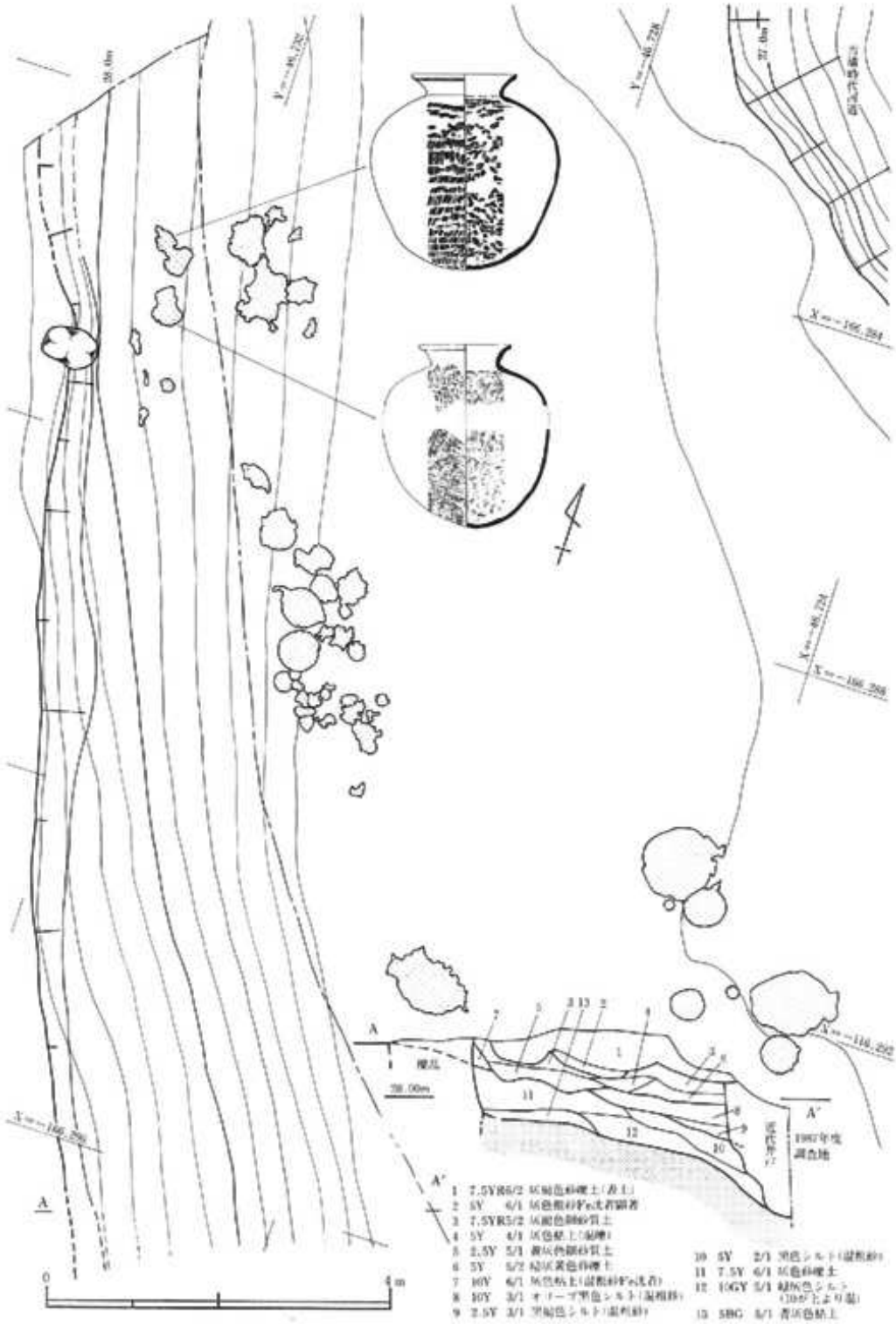
936－ＯＸ（第90・145～147図、図版50上・104参照）

K23DMとその南に位置する。556－ＯＢに切られていた。南北約7.5m、東西約4.5mの範囲に及ぶ。底面は丘陵縁片部から東の斜面へむかって緩やかに傾斜しており、往時の旧地形と関係がある落ち込みであろう。ただ、南端部はやや形状が不自然で、また落ち込みの中央付近には南北に溝状の深い部分（深さ0.1m弱）や地山の高まりが残っており、認識できなかった遺構が切り合っていた可能性もある。埋土は褐色系のシルトで、西端中央の突出した部分では焼土も認められた。

出土遺物は須恵器と若干の土師器で、須恵器は杯身・杯蓋・高杯（長脚・低脚）・甕・甑・器台などの各種がそろっているが、初期須恵器も混っている。出土位置は第145図に示したとおりであるが、念のため落ち込み中央付近の溝状部分から出土した土器を記すと、K511・516・518・523・527・528・529・532とK524の破片に接合する破片である。いずれ



第147図　936－ＯＸ出土遺物2（1/4）

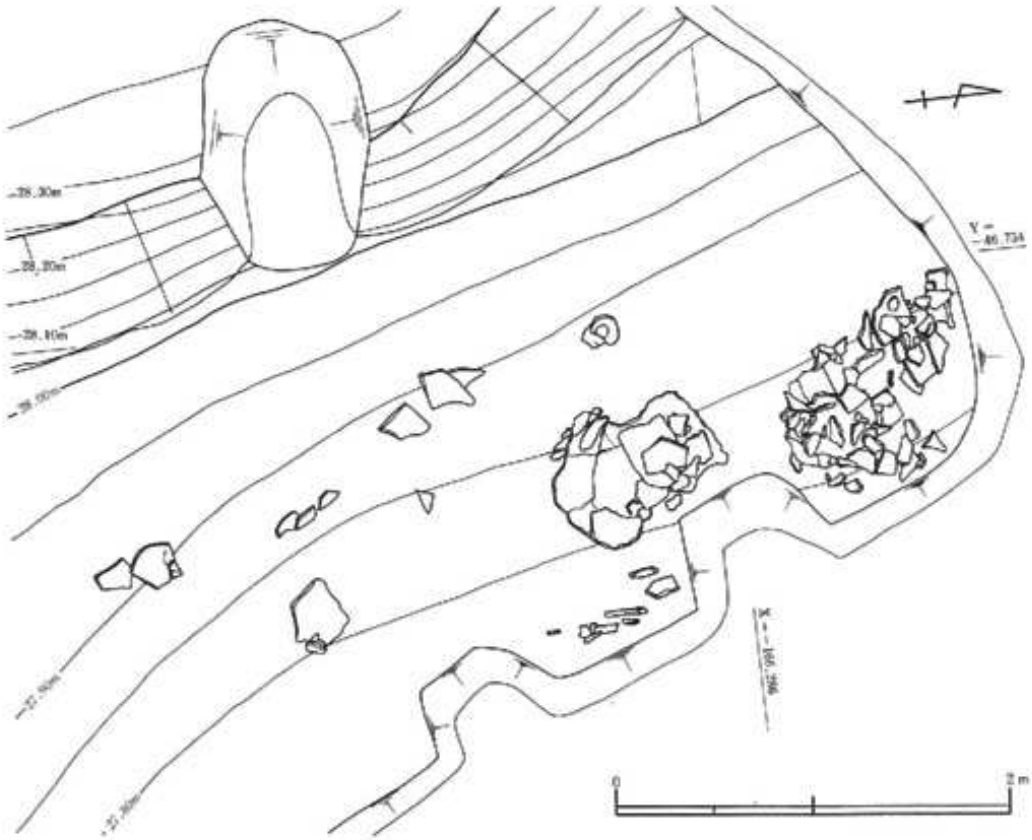


第148図　1125－ＯＸ全体図（1/80）

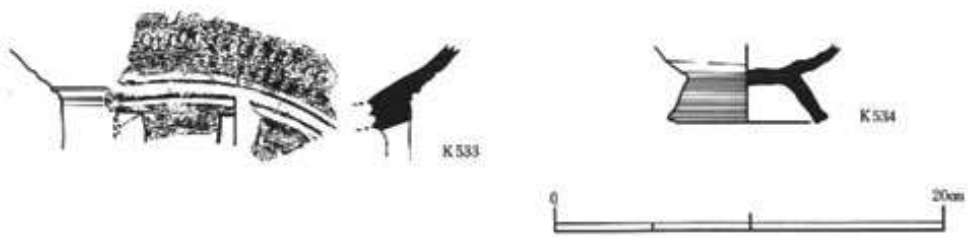
も投棄されたような状態であり、出土位置になんらかの意図がうかがえるような形跡は認められなかった。この落ち込みの時期は、杯蓋や高杯の形態、無文化した底、有蓋短頸壺の蓋（K516)の存在などから、II型式4～5段階と考えている。

1125－ＯＸ（第90・148～151図、図版50下・105Ａ参照）

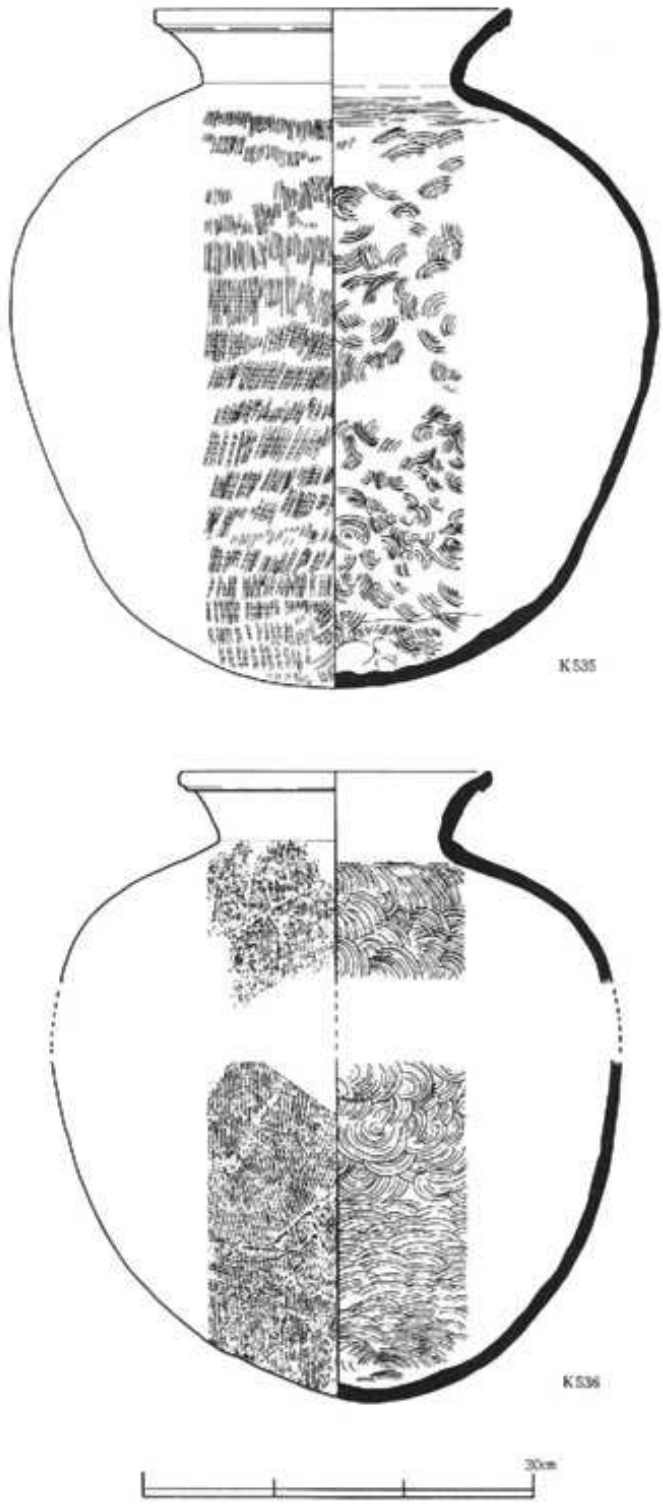
K13VQ付近に位置する。遺構の大部分は、1987年度調査によって検出されている。この遺構は土器が集中して出土する範囲を遺構と考えているが、その規模は明確な掘方を持たないため不明である。そのため遺構の範囲を土器の集中して出土する地区として集成す



第149図　1125－ＯＸ遺物出土状態（1/40）



第150図　1125－ＯＸ出土遺物１（1/4）



第151図　1125－ＯＸ出土遺物２（1/6）

ると第148図のような部分になる。具体的には、南側は1987年度と1988年度の調査により広がりは限定できたが、北側は更に丘陵の裾に沿って調査区外に延びて行く可能性がある。また西側は、今回の調査により、丘陵の裾の部分で終わることが判った。東側は丘陵の裾付近から離れずに、当時の石津川の河道の肩付近までに限定される。出土した遺物は底のレベルでT.P.＋27.4～27.9mの間に分布する。

1987年度調査では、出土した土器群を4群に分けて説明している。即ち、第1群はK13WS・WT付近の須恵器大型甕2個体を中心とするもので東側の大型甕はほぼ横向きに、もう一方は正立して胴部より上を削平された状態で出土した。付近からは中型の甕や杯類も出土している。第2群はK13XSに位置する須恵器大型甕で正立し、口縁部から胴部までが甕の内側に潰れた状態で検出した。第3群はK13WR付近の須恵器杯、壺、高杯、鉢、甕等豊富な器種が折り重なった状態で出土した。第4群はK13VQ付近に位置する中型の甕、杯類を中心に出土している。また窯体片も出土している。遺物の時期はI型式2段階～II型式2段階までのものが混在して出土した。今回検出した部分は全体の中で、北西の端にあたり、第4群のすぐ西側に存在するためこの群の一部と考えている。検出状態は前回と同様に明確な掘り方は確認できなかった。2個体の甕は底部を下にして埋まる前に潰れた状態である。出土地点はちょうど丘陵裾部の末端で傾斜変換点にあたり、沖積地の始まる所である。土器の出土した層位は、オリーブ黒色シルトで粗砂が混っている。

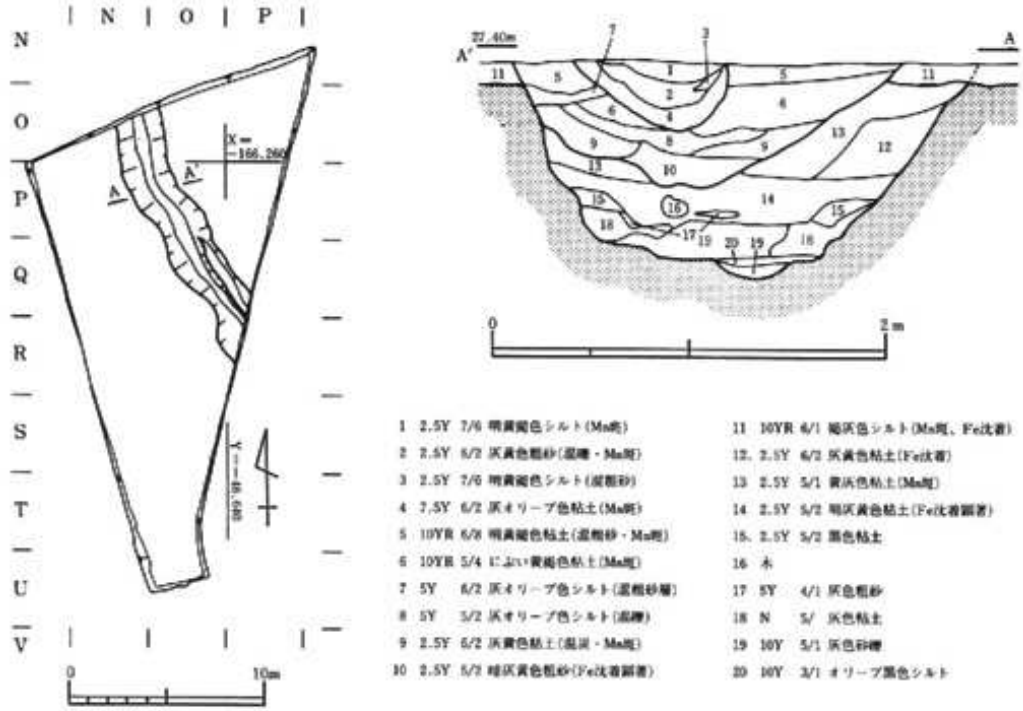
今回の調査の出土遺物は、須恵器の器台、高杯、甕などがある。器台K533は、杯部～脚部の上部が残存している。杯部の外面は観察できる範囲で上から太い波状文、クシ4本を1単位とする刺突文を3列左回りに施している。脚部には、波状文を施した後に長方形のスカシが切られている。杯部内面は、不定方向のナデである。外面の色調はN2/ 黒色で、内面はN8/ 灰白色である。胎土は密で、焼成は堅緻である。この器台片と同一個体と考えられる破片K628がK18XR地点の包含層から出土している。高杯K534は、おそらく有蓋のもので、短い脚部の外面はカキメが施されている。甕は、中型のものがK535・K536の2個体復元できた。共に外面は平行タタキ、内面は同心円の当て具の痕跡が残る。これらの土器の時期はI型式1段階～II型式2段階で混在して出土している。

この遺構の性格については、1987年度調査の報告でも甕棺、墓の供献土器、須恵器の集積場、選別場、水際の祭祉、窯の灰原の土器、投棄場所等が併記され、結論は持ち越されている。今回の調査成果でも、前回の調査成果の新知見は、遺構の西側の端を限定できたことぐらいである。しかし、土器の周囲に掘方が確認できないこと、土器を含む層が調査

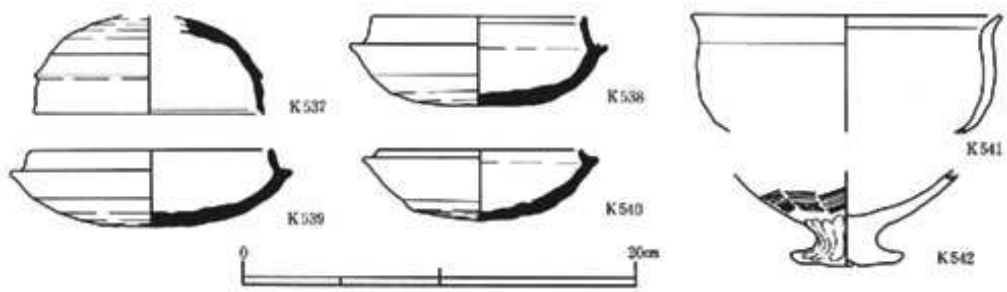
時点でも軟らかく当時はより軟らかい土であったと考えられること、数時期の土器が混在して出土したこと、傾斜変換点に集中して出土していること、窯体片や焼け歪みなどの不良品があること等から河川脇の軟弱地に土器を投棄した場所と考えたい。

84－ＯＳ（第152・153図、図版51・105Ｂ参照）

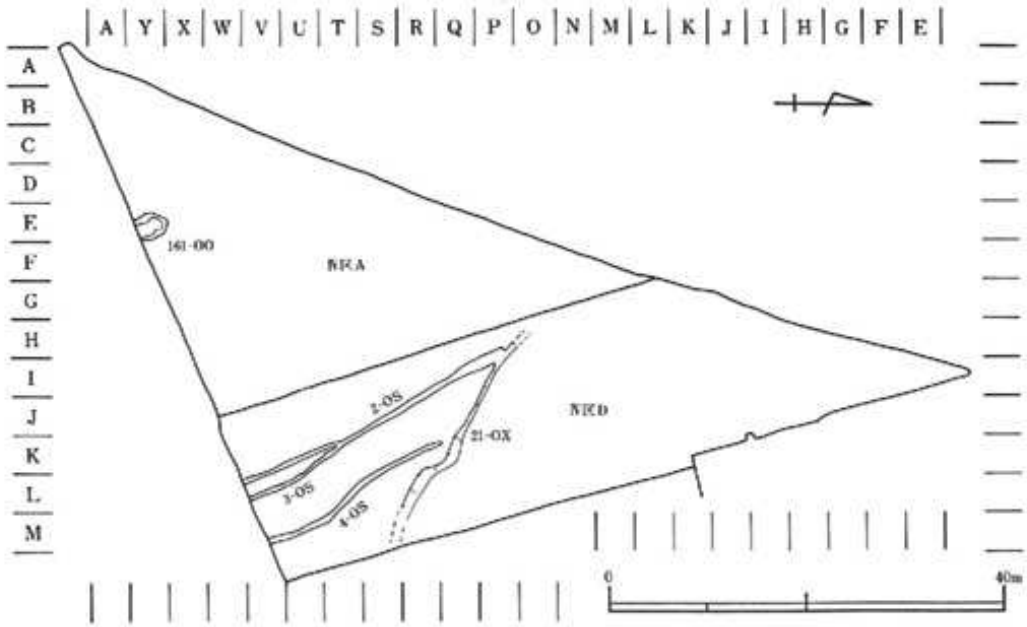
K14ＲＰからK14ＯＮにかけて南東～北西に位置し、ほぼ真直である。南北両端はそれぞれ調査区外へ延びている。検出長は約14m、幅2.0～2.4m、深さ1.1mで、断面はほぼ半円形である。溝底は、26.2m前後で南北の高低差は少ない。断面の観察から上中下に3時期に渡って堆積大きく3分割できる。埋土の状況から、水成堆積により徐々に埋まって



第152図　84－ＯＳ平面（1/400）・断面（1/40）図



第153図　84－ＯＳ出土遺物（1/4）

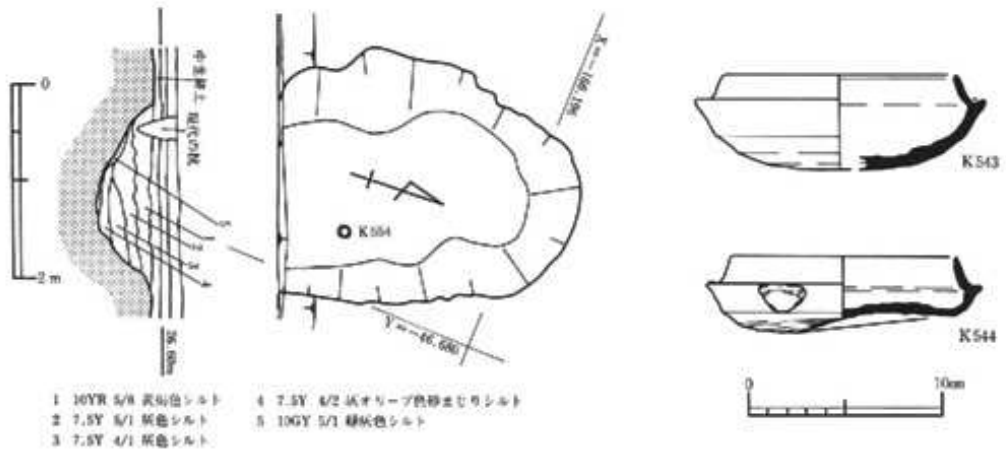


第154図　古墳時代Ⅱ期Ⅳ区遺構配置図（1/800）

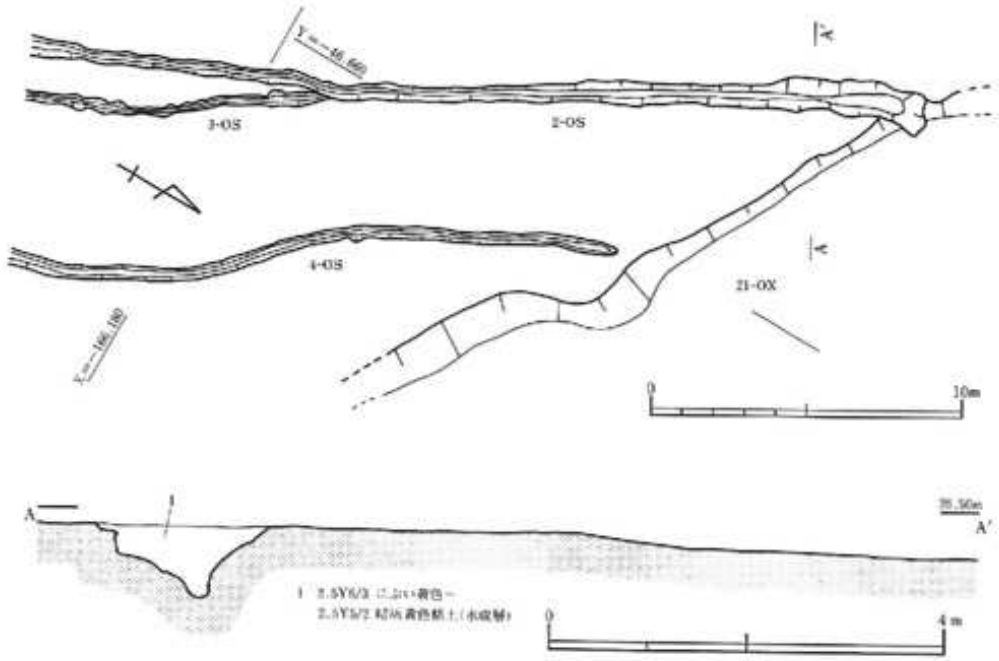
いく状況が観察できた。出土遺物は、下層の粗砂層から須恵器 杯蓋K537、杯K538・K539、土師器 鉢K541、K542、上層の砂層から須恵器 杯K540などがある。また、先端が炭化した全長約30cmの木片も出土した。この溝の時期は、Ⅰ型式5段階～Ⅱ型式6段階にわたると考える。

161－OO（第154・155図、図版105C参照）

K09YE付近に位置する。平面はやや不定形な楕円形で、南側が調査区外に延びているため正確な形状と規模は不明である。検出した規模は長径3.0m、短径2.6m、断面は半円



第155図　161－OO平面・断面図（1/80），出土遺物（1/4）



第156図　2・3・4－ＯＳ，21－ＯＸ平面（1/250）・断面（1/40）図

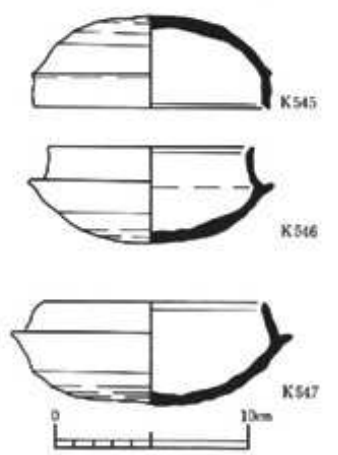
形で深さは0.5mである。埋土は５層に分かれ、上から黄褐色シルト、２・３・４層が灰色シルト、第５層が緑灰色シルトである。埋土の状況から水成堆積と考えられる。

遺物には須恵器の杯身K543・K544、土師器の器種不明片がある。杯身K544は遺構の底の部分より完形で出土した。遺構の時期は須恵器の杯の型式からII型式２～３段階頃と考えている。

２－ＯＳ・３－ＯＳ（第154・156・157図・基本層序断面図、図版52下・105Ｄ参照）

Ⅳ区Ｄの第５層上面で検出した。K09ＶＬからK09ＰＩに至る南北方向の溝で、検出長は28.5m、幅0.25～0.9mである。

深さは２－ＯＳが0.2～0.4mで、３－ＯＳは0.15m程度であった。底面のレベルは北へ向かうとともに0.1～0.2m低くなっており、南から北へ流れていたと考えられる。断面形はU字形ないしＶ字形である。埋土はいずれも第４層の水成層（本章第１節参照）で、２－ＯＳの埋土は第４ａ層・第４ｂ層であり、第４ａ層は北部では失われており、南端ではこの溝のさらに上に堆積してい



第157図　２－ＯＳ・21－ＯＸ出土遺物（1/4）

た。3－OSは第4b層で埋まっていた。従って、2－OSが第4b層によって一度埋まった後、3－OSが掘削され、南部を除いてその大部分が2－OSの流路を踏襲したと考えられる。

遺物はK545：2－OS（第4b層下位）、K546：2－OS（第4b層上位）が出土した。いずれも完形品で、I型式5段階～II型式1段階と思われる。ほかに図化できない細片にII型式後半の杯身があり、これらの土器は第4b層の堆積期間を示唆している。

4－OS（第154・156図、図版52下参照）

2－OS・3－OSと同様の溝で、K23RK～K23UMに存在する。第5層上面で、南北約15mにわたって検出した。幅0.35～0.40m、深さは0.15～0.20m程度である。底面のレベルは北の方が約0.1m低い。埋土は第4b層で、2－OS・21－OXと同時存在したものと思われる。

遺物は出土していない。

21－OX（第154・156・157図・基本層序断面図、図版105E参照）

2－OS・4－OSなどの北東に広がる落ち込みで、第5層上面で検出した。深さは0.1～0.15m程度であるが規模は大きい。第4b層で埋まっており、2－OS・4－OSと同時存在したと考えられる。ただ、調査地（IV区D）北部には第4b層は部分的にしか残存していないため、その様相を平面的に明らかにすることは困難であった。

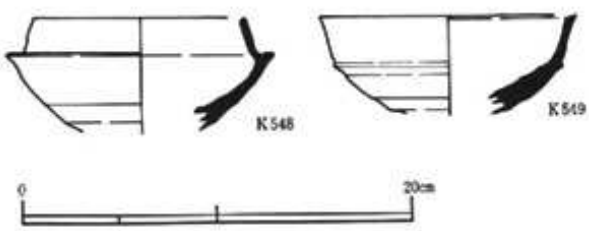
遺物がK547が出土している。II型式1段階頃であろう。

I区包含層出土遺物（第158図参照）

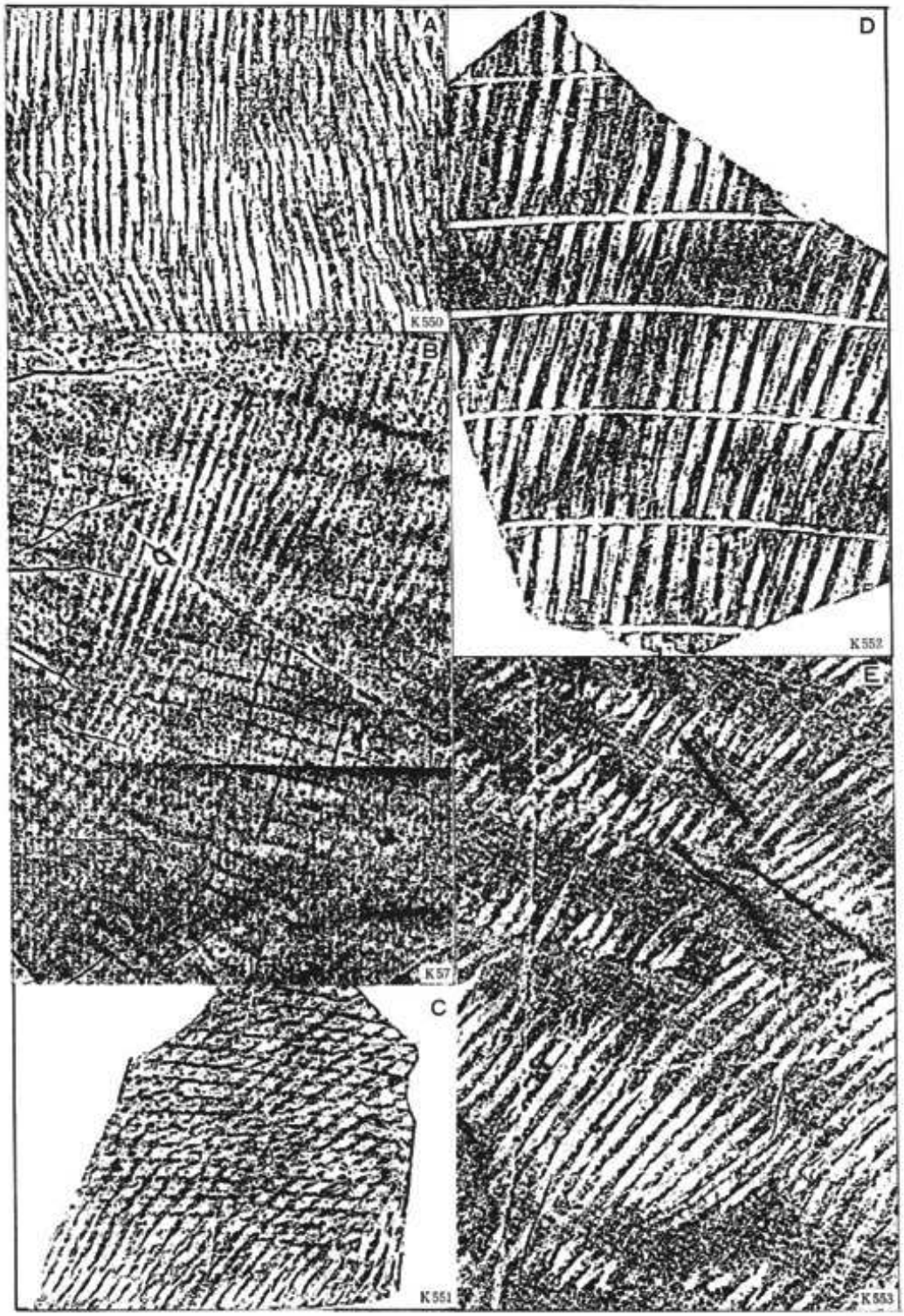
I区は削平が激しく包含層遺物は皆無に近い。遺構の上層は鉄分が沈着し、すでに水田の床土化している。そのため出土する遺物は遺構に伴うものが多い反面、近現代の陶磁器をも含んでいる。図に示したのは遺構に伴わない床土出土の古墳時代遺物である。

II区包含層出土遺物（第159～172図、図版106～112C参照）

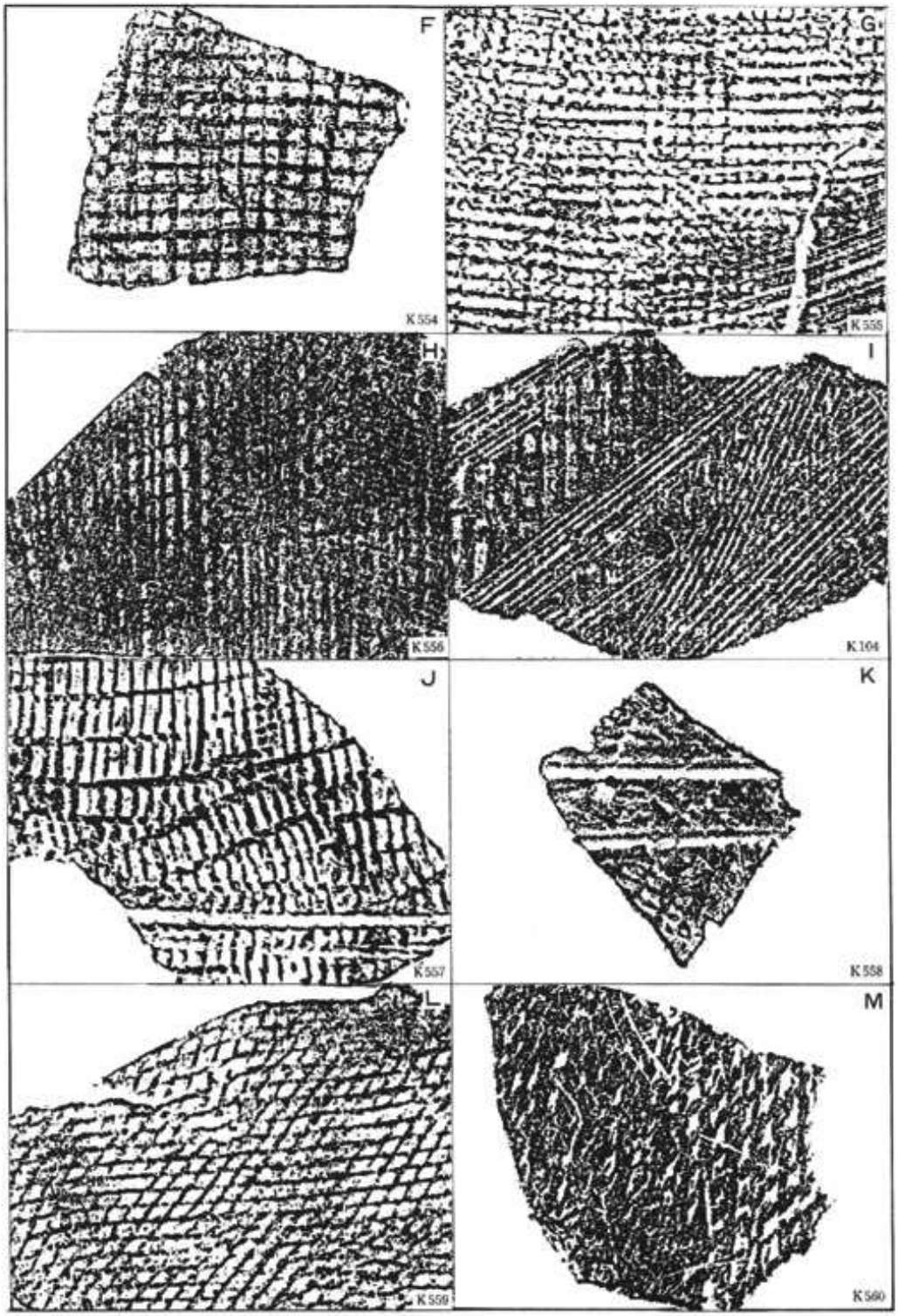
II区は古墳時代の包含層がほとんど存在しない。部分的に平安時代の包含層が存在するが、大部分が奈良中世と近世の包含層である。この包含層は整地土として形成されたものであり、従って出土する遺物は多岐の時期にわたる。特にII区では削平の際、丘陵上から掻き落としたと見られる



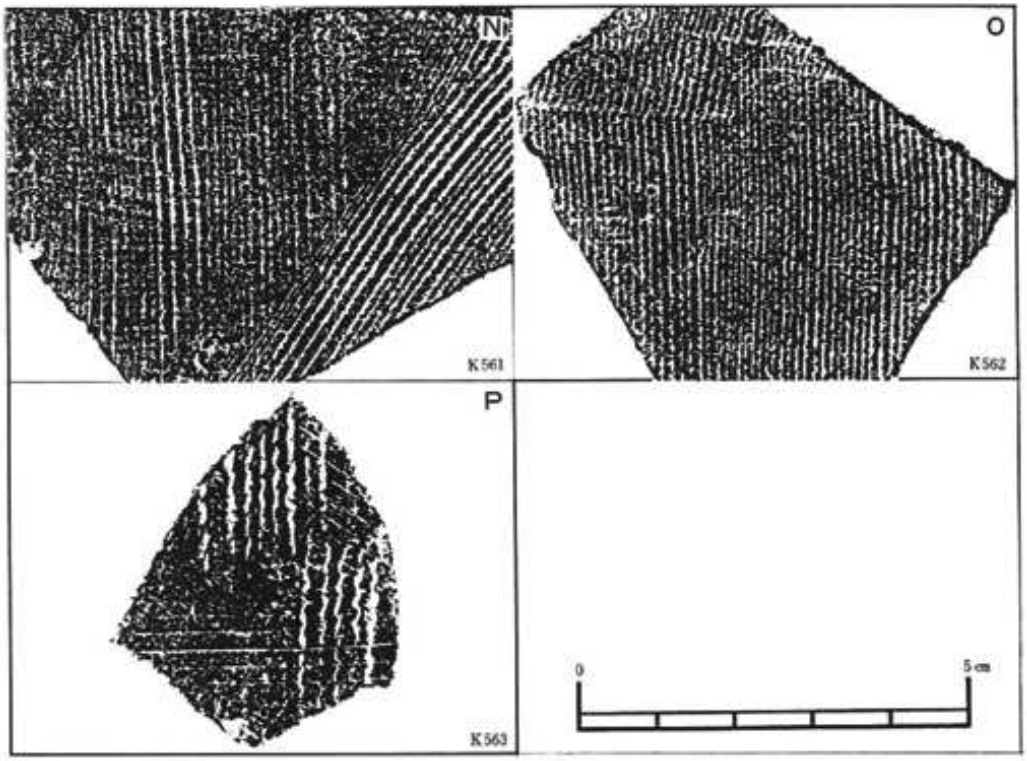
第158図　古墳時代I区包含層出土遺物（1/4）



第159図　初期須恵器拓影１（1/1）



第160図　初期須恵器拓影２（1/1）

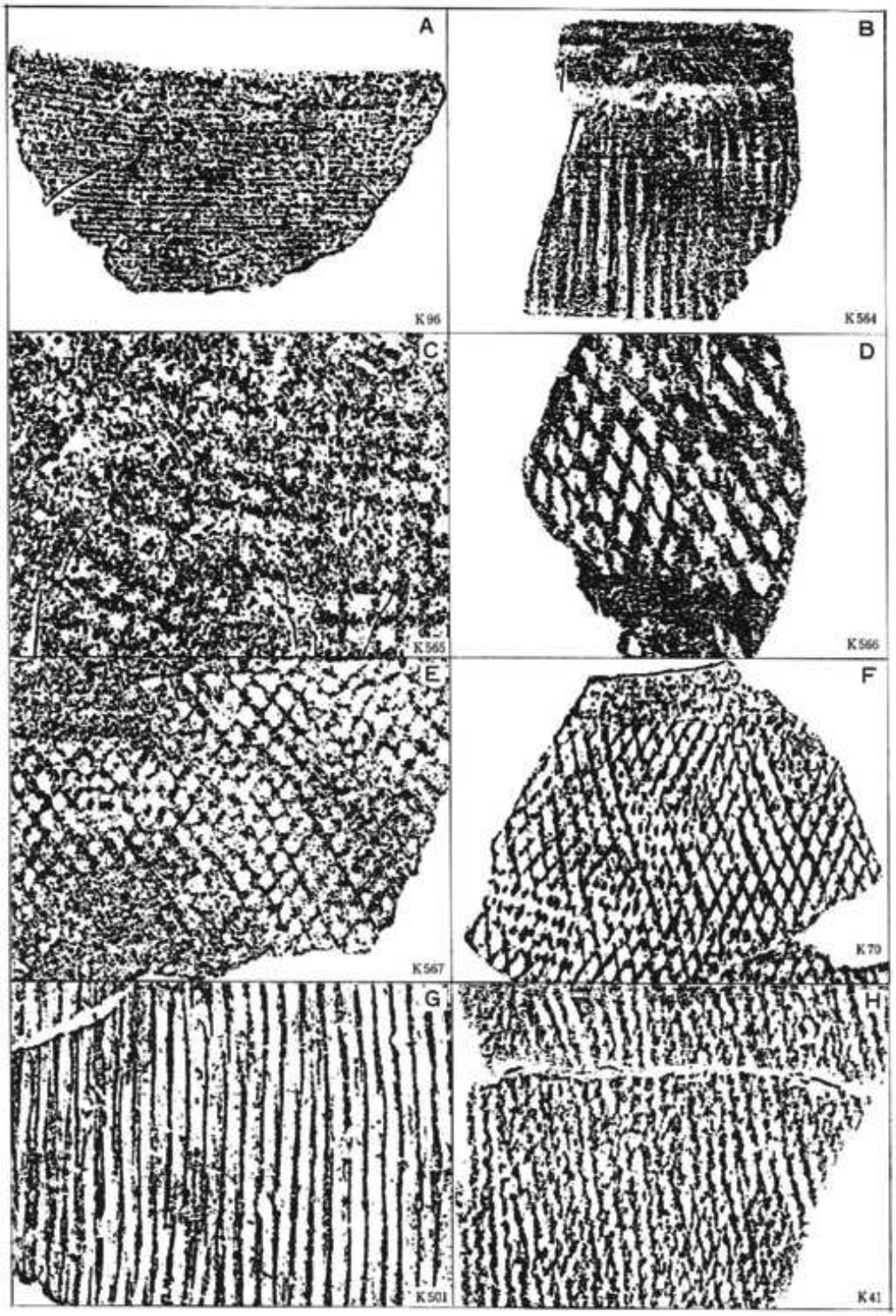


第161図　初期須恵器拓影３（1/1）

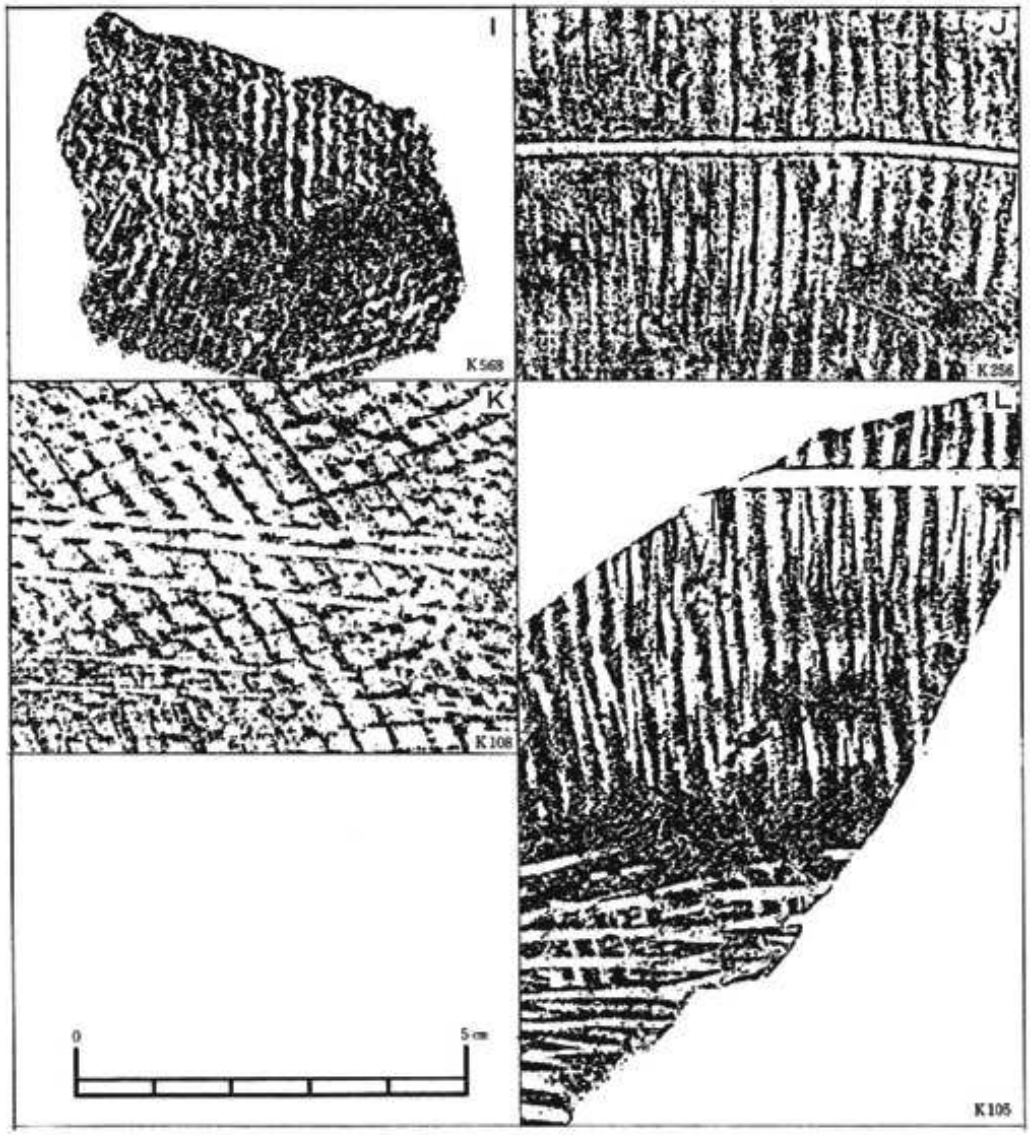
初期須恵器が多く出土したので、初期須恵器を中心として記述することにしたい。

始めに量的に最も多い甕をとりあげることにする。甕は包含層中から多量の破片が出土している。甕の器面調整はその技法から分類するとＡ～Ｐ類までの16種類に及ぶことが判明した。調整技法を分類すると以下のようになる。

Ａ類　外面平行タタキ、内面スリケシ
Ｂ類　外面平行タタキ＋格子タタキ
　　内面スリケシ
Ｃ類　外面斜格子タタキ＋平行タタキ
　　内面スリケシ
Ｄ類　外面平行タタキ＋沈線
　　内面スリケシ＋ナデ
Ｅ類　外面平行タタキ＋スリケシ
　　内面半スリケシ
Ｆ類　外面格子タタキ、内面スリケシ
Ｇ類　外面格子タタキ、内面スリケシ＋ナデ
Ｈ類　外面格子(長方形)タタキ、内面スリケシ
Ｉ類　外面格子タタキ（長方形）＋ハケメ
　　内面スリケシ
Ｊ類　外面格子タタキ＋沈線
　　内面スリケシ
Ｋ類　外面格子タタキ＋２条の沈線
　　内面スリケシ
Ｌ類　外面斜格子タタキ、内面スリケシ
Ｍ類　外面斜格子タタキ、内面スリケシ
Ｎ類　外面ハケメ、内面スリケシ
Ｏ類　外面ハケメ、内面スリケシ＋ハケメ
Ｐ類　外面縄席文タタキ、内面スリケシ＋
　　ハケメ



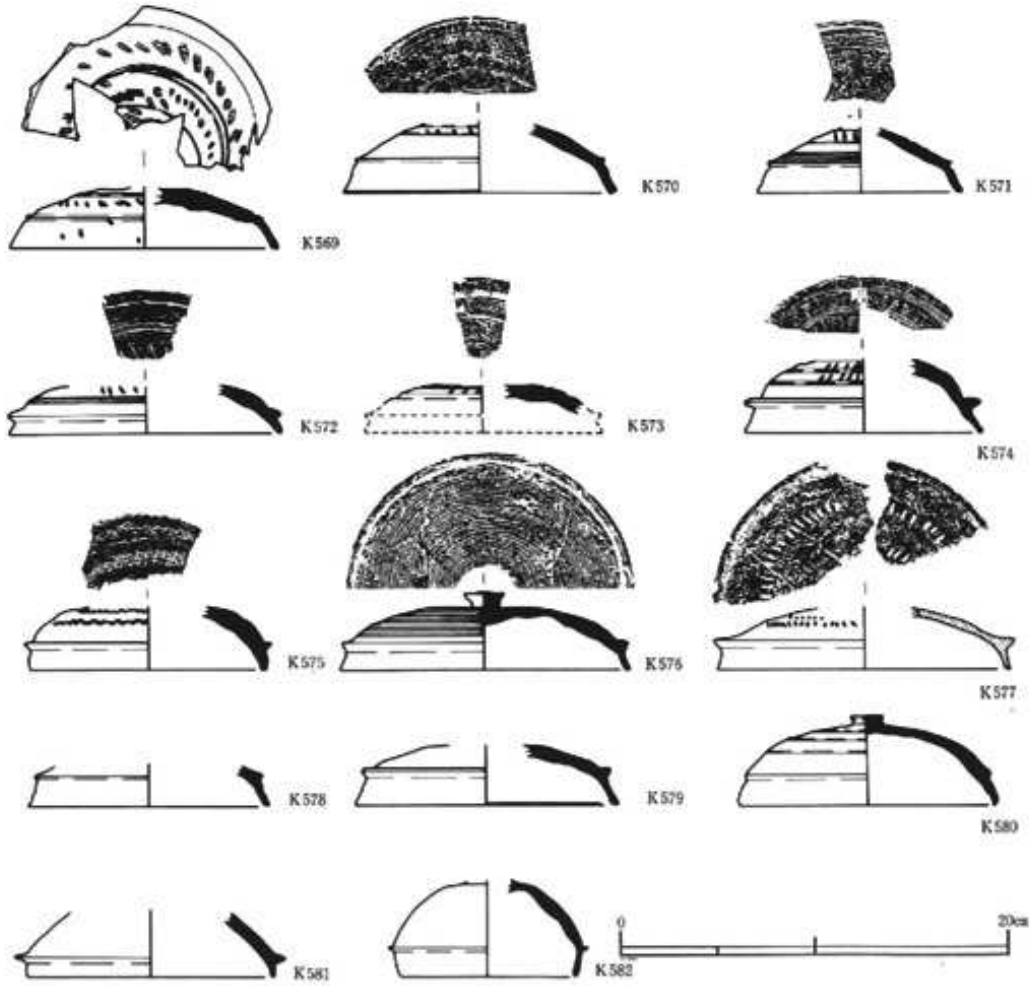
第162図　韓式系土器拓影１（1/1）



第163図　韓式系土器拓影２（1/1）

（但し、甕のなかには何種類かのタタキを併用しているのもあり、上記の分類はあくまで破片観察による分類である。）

平行タタキのタタキメは平均して細く、タタキメ間の幅も狭い。平行タタキと格子タタキを併用するものもあるが、類例として堺市日明山遺跡出土の陶質土器があげられる[註1]。平行タタキ調整のあと等間隔の沈線を巡らす例はこれまで陶邑内では発見されておらず、新出の資料といえる。格子タタキは粗いタタキと細かいタタキ、長方形のタタキがある。斜格子タタキも粗いタタキと細かいタタキがある。ハケメは粗いものと細かいものがあるが、

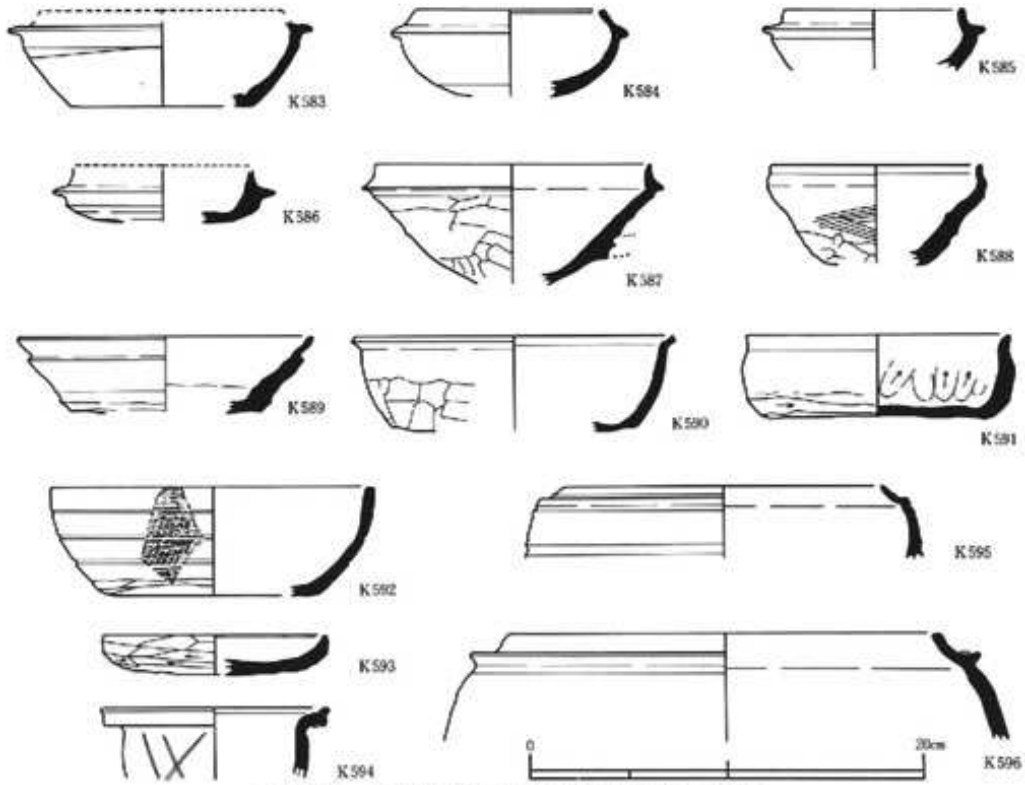


第164図　古墳時代II区包含層出土遺物1（1/4）

内外面ともハケメ調整のものも存在している。縄席文は量的に僅かである。

蓋は器高が低く平に近い形状のものと器高が高く天井部が丸いものに大別できる。天井部に施文を施した例が多く、刺突文と沈線を組み合わせたものが多い。他には波状文、カキメ、複数の沈線等の施文がある。胎土は緻密で、焼成も硬質なものが多いがK577のように土師質のものもある。K577は天井部には刺突文が2段に巡り、これまでの概念でいえば陶質土器の範疇に位置付けられる遺物である。

杯身は破片が多く、全体の形がわかるものが少ない。K583は口縁部が欠落しているが形状からするとTK73、TK85号窯に見られる「釜形」とみられる。器壁は薄くシャープである。胎土も緻密で焼成も硬質である。K584・K585は体部は丸く、K586は扁平な体部をもつ。



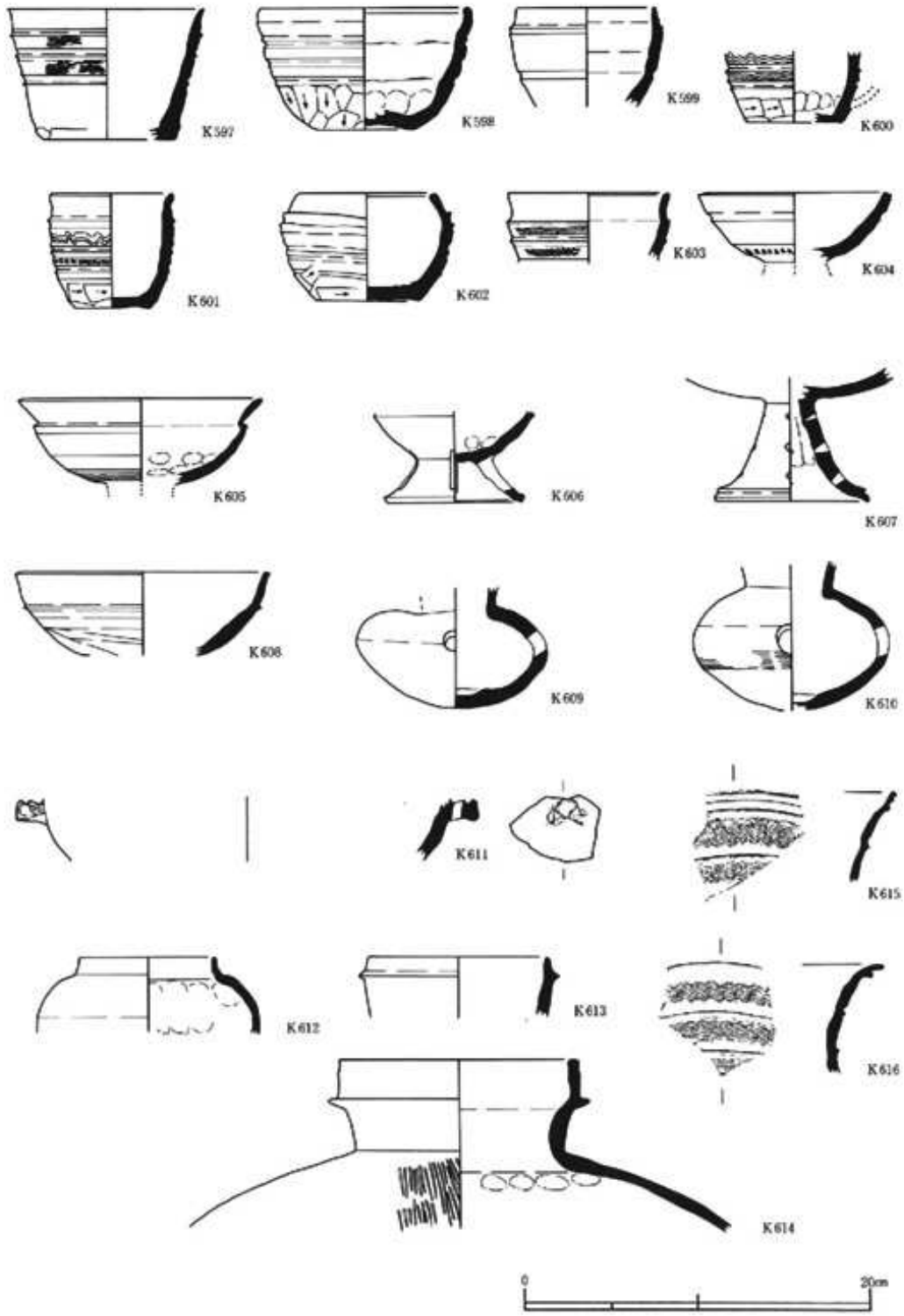
第165図　古墳時代Ⅱ区包含層出土遺物２（1/4）

鉢は個体差が大きい。K587のように体部の深い把手付鉢や、あるいは体部の浅い鉢K589～K592や、皿状のK593がある。K594は韓式系土器の平底鉢と形態は同じである。体部にはヘラ記号がある。大型の鉢K596は一見羽釜風で明瞭な鍔が付く。鉢の胎土は緻密で焼成も硬質なものが多いが、K587・K596のように軟質に近いのもある。

把手付椀は比較的大きいものが多く、小さくて丸みを持つものはない。シャープなものと稚拙なものがあり、整作技術面でのその差は大きい。

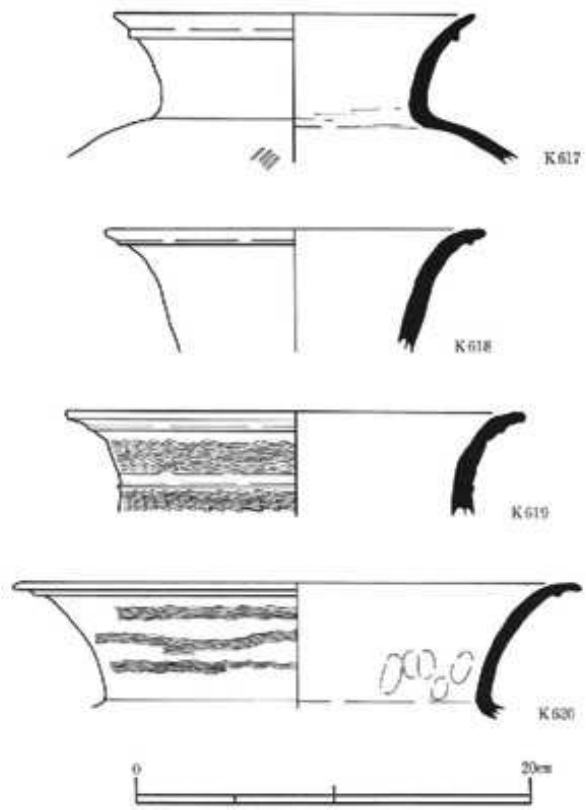
高杯は蓋を伴わない無蓋高杯 K608他蓋を逆にして杯部とした形状のものが多く出土している。杯部は回転ナデ調整である。脚部は円孔を伴うものが多く、また裾部に凸帯を持つものも多い。K607のように菱形の孔を穿つ例も稀にある。K605は洛東江下流域で多く見られる高杯である。胎土は緻密で焼成も硬質であるが色調は他の須恵器と異なり暗灰色を呈する。出自を考える上で重要な高杯である。

甕は２点小型のものが出土しているが時期はやや新しい。把手の付く鍋が１点出土している。小型の壺はK615・K616とあるがいずれも器壁は薄く、頸部に見られる凸帯もシャープで波状文も太い施文である。中型の甕は施文するものとそうでないものがあるが、



第166図　古墳時代II区包含層出土遺物3 (1/4)

K616・K620のようにゆるやかで線の太い波状文が多い。壷は有り、蓋と見られるK613・K614があり、薄くシャープな短頸壷である。器台は装飾文様が豊かなものが多く、これまで陶邑内では発見されていない文様構成のものである。組紐文をもつものはK621～K624でK621・K622は更に鋸歯文を持つ。K621の組紐文はK622に比べ、稚拙である。K624は組紐文の他に竹管文を施文している。組紐文と竹管文を組み合わせた施文は陶邑周辺では出土していない[註3]。K625～K627は鋸歯文を持つ破片でK625・K626は同一個体と見られる。K628は組紐文か波状文を施文し下方に刺突文を施文する。この刺突文はやや大きな原体を用いた櫛歯文といわれるもので野中古墳出土の器台に類例がある[註4]。K629・K630は斜格子の施文でK629は下段に櫛歯文が施文されている。K631～K633は樽形瓲の破片で、ハケメによる装飾文様がある。

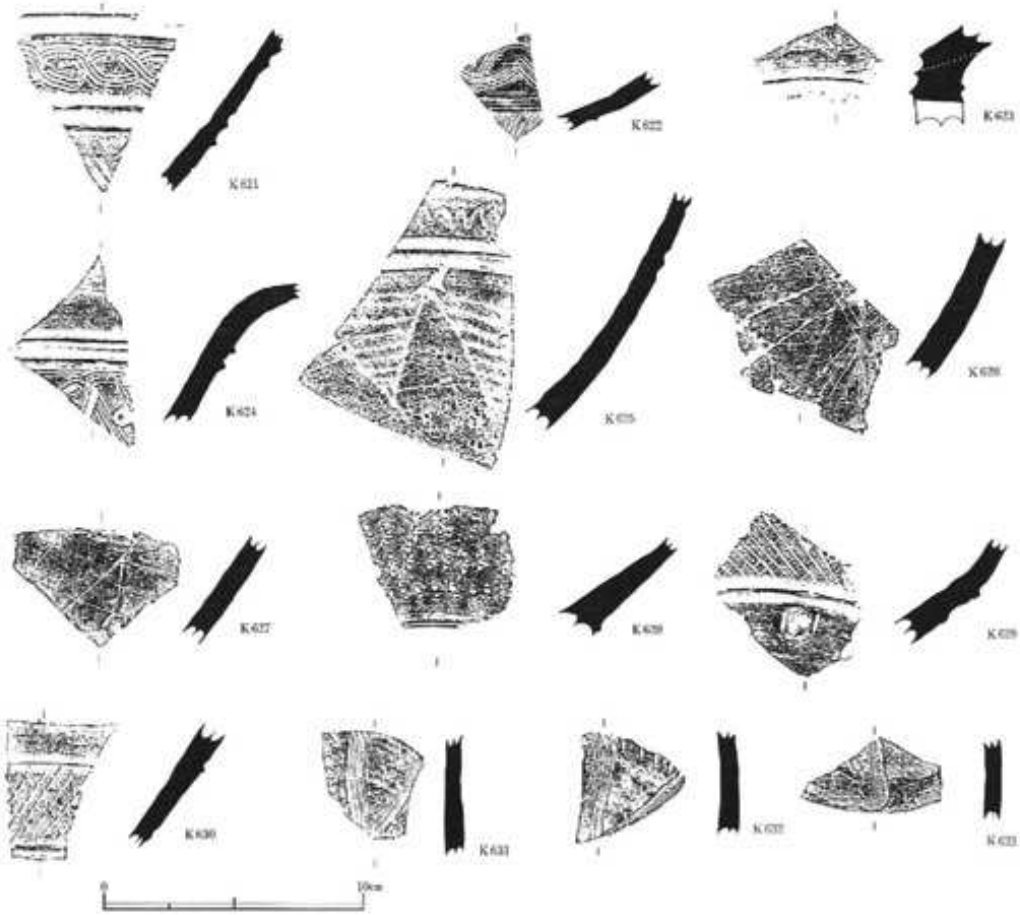


第167図　古墳時代Ⅱ区包含層出土遺物4（1/4）

韓式系土器は破片の場合、土師器との分類が困難であるが韓式系土器と認定したものがほとんどである。そのなかで主な土器を提示したのが第169図である。K567・K568は出土例の多い長胴甕であるが、K565は口頸部が体部に比べて細く、体部も下脹れで底部は平底の特異な土器である。体部の調整は粗い格子タタキである。胎土は砂粒を含み、焼成は軟質で色調は黄橙色を呈する。短頸壷K636は体部を格子タタキののち内外面とも回転ナデで調整している。胎土は緻密で、焼成は軟質である。K635は平底鉢でK637・K638は多孔の甑である。

第162・163図に示したものは平底鉢、甕、甑に見られる体部調整技法である。A～L類まで12種類確認できた。分類すると以下のようになる。

A・B類は平底鉢でカキメ、平行タタキの調整、C類は5㎜角の粗い格子タタキ、D～

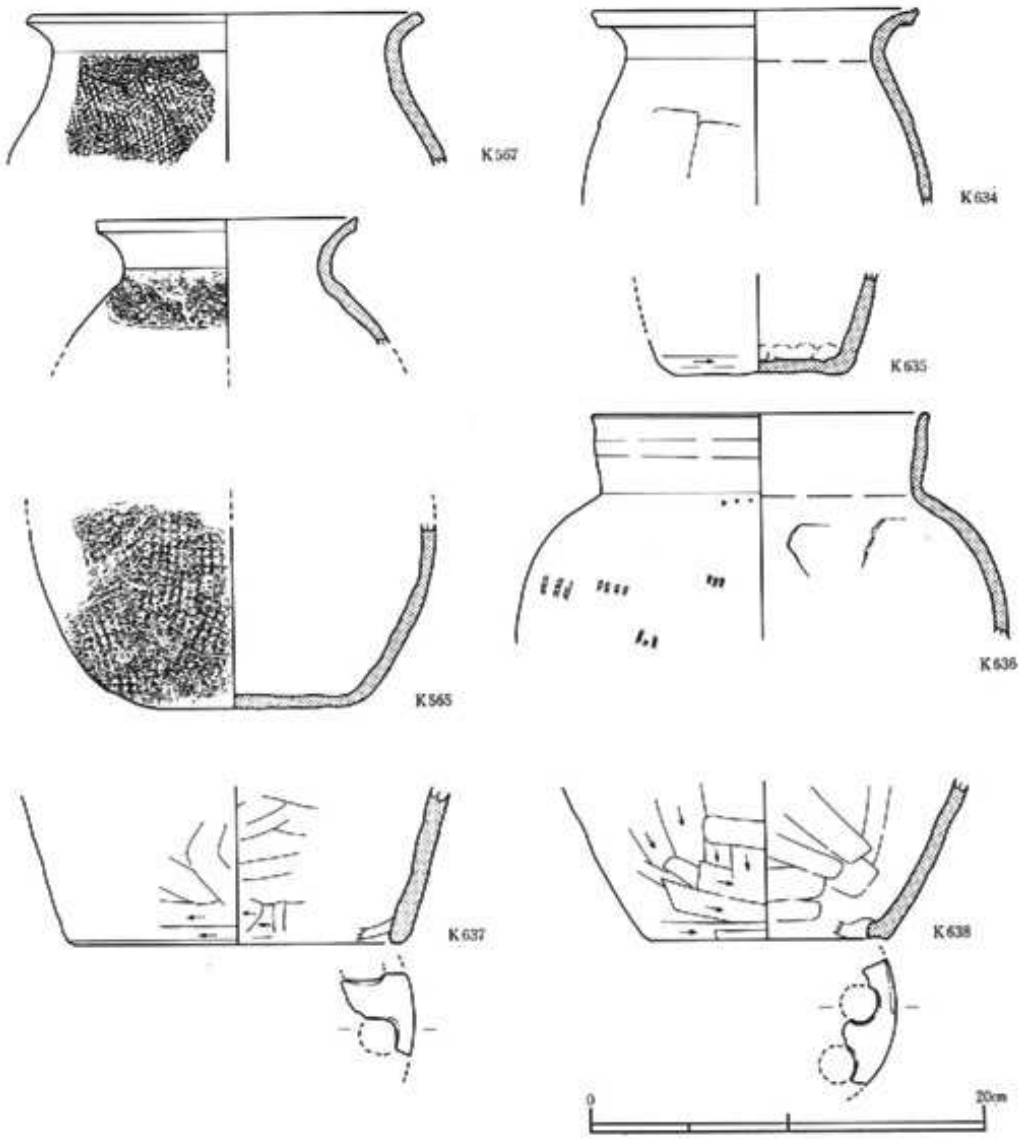


第168図　古墳時代Ⅱ区包含層出土遺物5（1/3）

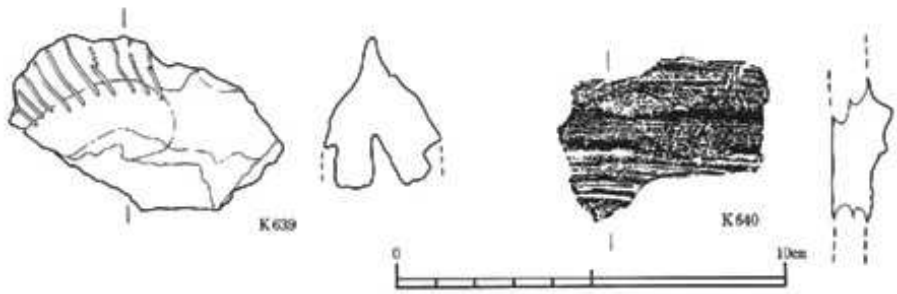
Ⅰ類は長胴甕で調整技法も多岐にわたる。D類は粗い斜格子タタキ、E類は中間の斜格子タタキ、F類は細かい斜格子タタキ、G類は平行タタキ、H・Ⅰ類は縄蓆文であるが原体の違いによって分類した。J～Lは甑で平行タタキと格子タタキがある。

その他の遺物としては初期須恵器が熔着した窯体片・形象埴輪K639・円筒埴輪K640や漁労具の飯蛸壺K651～K653、土錘K654・K655が出土している。Ⅲ区・Ⅳ区の遺物は第173・174図に掲載したとおりである。Ⅳ区ではK660の蓋や朝顔型埴輪が注目される遺物である。埴輪の出土はかつて古墳が存在した可能性を示唆しているといえる。

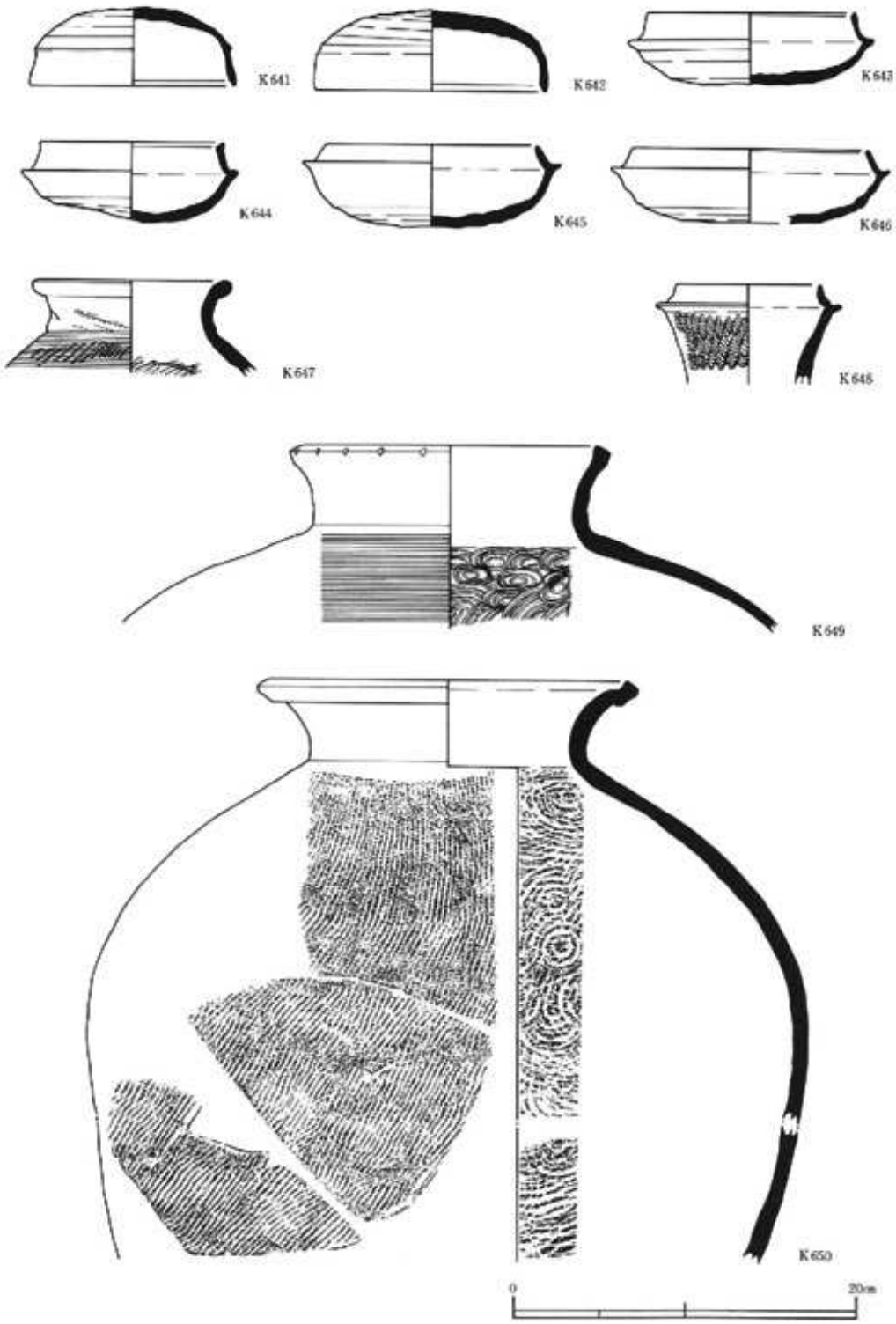
註釈及び参考文献
註1　堅田直　「韓半島伝来の叩目文土器（韓式系土器）について」『日・韓古代文化の流れ』1982、帝塚山大学考古学研究所で実見した。
註2　定森秀夫　「韓国慶尚南道釜山・金海地域出土の陶質土器の検討」『平安博物館研究紀要』第7輯　1982
註3　鋸歯紋と竹管文の組み合わせは光明池付近で表採されている。竹谷俊夫　「初期須恵器の新例」『古文化談叢』第16集　1986
註4　北野耕平　『河内野中古墳の研究』　大阪大学文学部国史研究室第2冊　1976



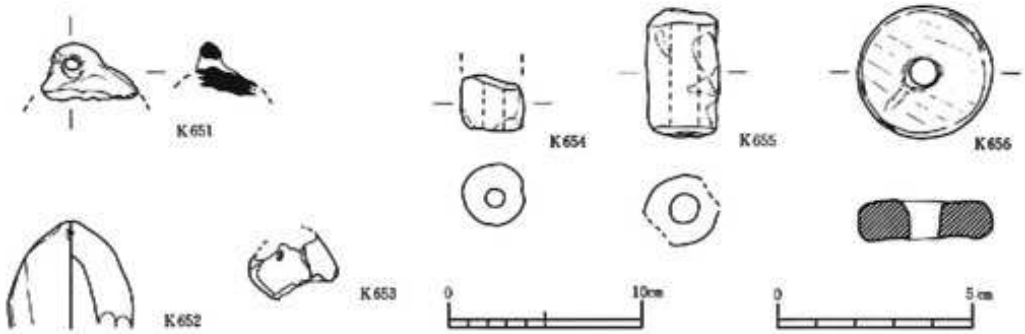
第169図　古墳時代Ⅱ区包含層出土遺物6 (1/4)



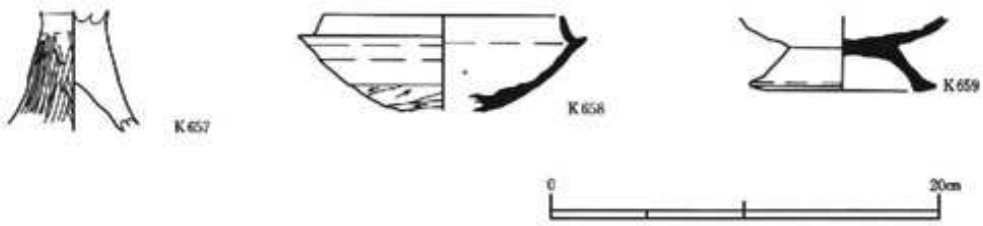
第170図　古墳時代Ⅱ区包含層出土遺物7 (1/2)



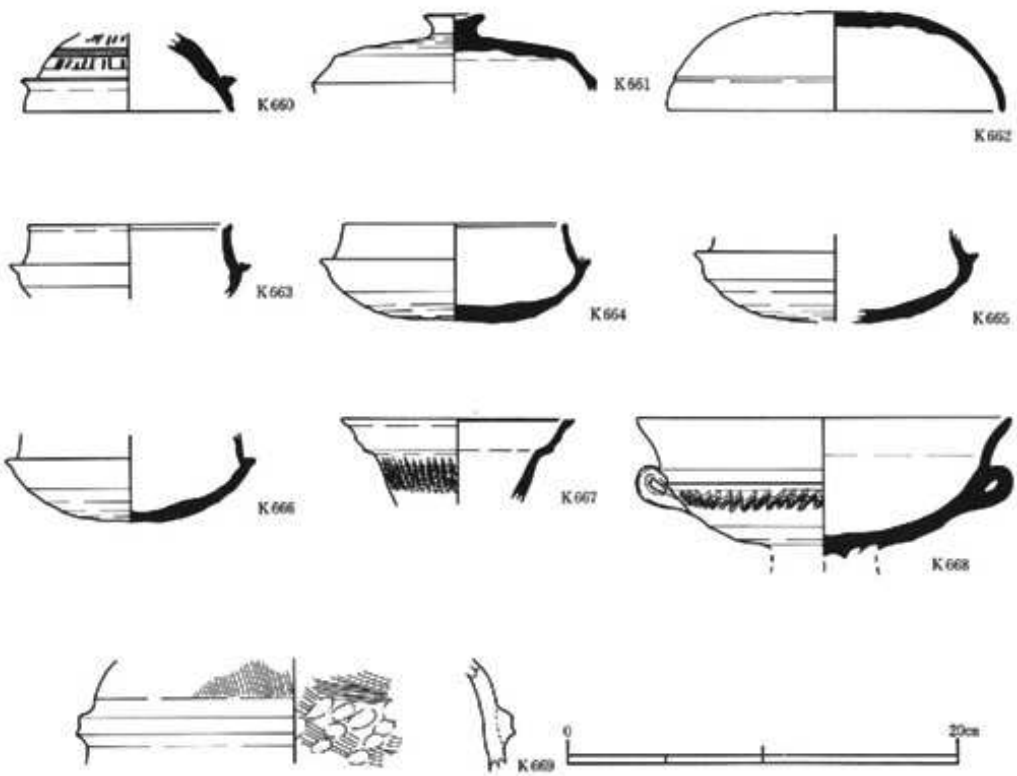
第171図　古墳時代II区包含層出土遺物8 (1/4)



第172図　古墳時代Ⅱ区包含層出土遺物９（1/4，1/2）



第173図　古墳時代Ⅲ区包含層出土遺物（1/4）



第174図　古墳時代Ⅳ区包含層出土遺物（1/4）

295－００

第1表　初期須恵器観察表（295－００）

種類 掲図番号	法量（単位㎝） （　）は復元径	手法	胎土 焼成	色調
須恵器 有蓋高杯 第34図K 1	口径　12.5 残存高　6.5	外面　回転ナデ 内面　回転ナデ	1㎜以下の白色・黒色砂粒含む 硬質	外　N8.0灰白色 内　N6/0灰色
須恵器 把手付き椀 第34図K 2	口径　7.8 器高　8.4	外面　回転ナデ・静止ヘラケズリ 内面　回転ナデ・ナデ	緻密　1㎜以下の白色・黒色砂粒含む 硬質	外　10BG5/1青灰色 内　5 G6/1緑灰色
須恵器 把手 第34図K 3			緻密　1㎜以下の白色砂粒僅かに含む 硬質	外　5 B7/1明青灰色 断　〃 内　〃
須恵器 高杯（脚） 第34図K 4	底径　10.7 残存高　5.6	外面　回転ナデ	緻密　1㎜以下の白色砂粒僅かに含む 硬質	外　5 B7/1明青灰色 断　2.5YRにぶい赤褐色 内　5 B7/1明青灰色
須恵器 甕 第34図K 5	口径　(21.6) 残存高　5.4	外面　回転ナデ・指頭による調整後ナデ 内面　回転ナデ・指頭による調整後ナデ	緻密　1㎜以下の白色砂粒僅かに含む 硬質	外　5 B3/1暗青灰色 断　〃 内　〃
須恵器 甕 第34図K 6	口径　(24.6) 残存高　6.7	内面　回転ナデ	緻密　1㎜以下の白色砂粒含む 硬質	外　5 B7/1明青灰色 断　〃 内　〃
須恵器 甕 第34図K 7		外面　平行タタキ後、スリケシ 内面　ハケメ	緻密　1㎜以下の白色砂粒多く含む 軟質	外　5 B7/1明青灰色 断　〃 内　〃
陶式系土器 長胴甕 第34図K 8	口径　(17.8) 残存高　9.4	外面　平行タタキ 内面　ナデ	緻密　2㎜以下の砂粒多く含む 軟質	外　10YR5/1褐灰色 断　〃 内　〃
須恵器 甕 第34図K 9	口径　(30.4) 残存高　10.6	外面　平行タタキ後、回転ナデ 内面　回転ナデ	2㎜以下の白色・黒色砂粒含む 軟質	外　5 B7/1明青灰色 断　〃 内　〃
陶式系土器 甕 第34図K10	口径　(23.0) 器高　(26.5)	外面　破損のハケメ 内面　ナデ	軟質　砂粒わずかに含む	外　2.5Y8/1灰白色 内　〃

296－００

第２表　初期須恵器観察表（296－００）

種類 挿図番号	法量（単位cm） （　）は復元径	手法	胎土 焼成	色調
須恵器 蓋 第37図K11	口径　(11.8) 残存高　2.7	外面　回転ナデ 内面　回転ナデ	緻密　1㎜以下の白色・黒色砂粒含む 軟質	外　2.5Y8/2灰白色 断　〃 内　〃
須恵器 杯身 第37図K12	口径　(15.9) 残存高　3.2	外面　回転ナデ 内面　回転ナデ	緻密　1㎜以下の白色砂粒僅かに含む 硬質	外　5 B3/1暗青灰色 断　2.5YR5/1にぶい赤褐色 内　5 B3/1暗青灰色
須恵器 無蓋高杯 第37図K13	口径　(15.5) 残存高　3.5	外面　回転ナデ 内面　回転ナデ	緻密　1㎜以下の白色砂粒僅かに含む 軟質	外　5 B7/1明青灰色 断　〃 内　〃
須恵器 杯身 第37図K14	口径　(11.7) 残存高　3.2	外面　回転ナデ 内面　回転ナデ	緻密　1㎜以下の白色・黒色砂粒含む 硬質	外　2.5YR5/3にぶい赤褐色 断　5 B7/1明青灰色 内　〃
須恵器 高杯 第37図K15	口径　(11.6) 底径　8.5 器高　8.8	外面　回転ナデ・静止ヘラケズリ 内面　回転ナデ	緻密　1㎜以下の白色砂粒含む 硬質	外　5 B3/1暗青灰色 断　2.5YR5/3にぶい赤褐色 内　5 B3/1暗青灰色
須恵器 無蓋高杯 第37図K16	口径　(15.9) 残存高　6.0	外面　回転ナデ後、不定方向ナデ 内面　回転ナデ後、不定方向ナデ 指頭圧痕	緻密　1㎜以下の白色・黒色砂粒含む 軟質	外　5 B7/1明青灰色 断　〃 内　〃
須恵器 把手付椀 第37図K17	口径　(10.1) 残存高　6.9	外面　回転ナデ、指頭圧痕 内面　回転ナデ・ナデ	緻密　1㎜前後の白色砂粒僅かに含む 硬質	外　5 B3/1暗青灰色 断2.5YR5/3にぶい赤褐色 内　5 B3/1暗青灰色
須恵器 把手付椀 第37図K18	口径　(8.8) 底径　5.6 残存高　7.6	外面　回転ナデ・静止ヘラケズリ 指頭痕跡 内面　回転ナデ	緻密　1㎜以下の白色・黒色砂粒含む 硬質	外　5 B3/1暗青灰色 断　7.5YR4/3にぶい赤褐色 内　5 B3/1暗青灰色
須恵器 高杯 第37図K19	口径　(5.4) 器高　9.0	外面　回転ナデ 内面　回転ナデ後、不定方向のナデ	緻密　1㎜前後の白色砂粒僅かに含む 硬質	外　5 B7/1明青灰色 断　〃 内　〃
須恵器 無蓋高杯 第37図K20	口径　(13.3) 底径　11.0 残存高　10.0	外面　回転ナデ 内面　回転ナデ・ナデ	緻密　1㎜以下の白色砂粒僅かに含む 硬質	外　5 B7/1明青灰色 断　〃 内　〃
須恵器 甕 第37図K21	口径　(29.5) 残存高　4.8	外面　回転ナデ 内面　回転ナデ・指頭圧痕	緻密　3㎜以下の白色砂粒含む 軟質	外　5 B7/1明青灰色 断　〃 内　〃
須恵器 甕 第37図K22	口径　(29.7) 残存高　6.8	外面　回転ナデ 内面　指頭圧痕後、ヨコナデ	緻密　2㎜以下の白色砂粒僅かに含む 硬質	外　5 B3/1暗青灰色 断　2.5YR5/3にぶい赤褐色 内　5 B3/1暗青灰色

296－００

種別 挿図番号	法量（単位cm） （ ）は復元径	手法	胎土 焼成	色調
須恵器 壺 第37図K23	口径 (38.6) 残存高 3.4	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	緻密 1㎜以下の白色砂粒僅かに含む 硬質	外 5 B3/1暗青灰色 断 2.5YR5/3にぶい赤褐色 内 5 B3/1暗青灰色
須恵器 甕 第37図K24	口径 (48.4) 残存高 14.1	外面 回転ナデ 指頭圧痕による調整後、ナデ 内面 回転ナデ	緻密 1㎜以下の白色砂粒僅かに含む 硬質	外 5 B3/1暗青灰色 断 〃 内 〃
須恵器 壺 第38図K25	口径 (17.1) 残存高 5.1	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	緻密 1㎜以下の白色砂粒僅かに含む 硬質	外 5 B3/1暗青灰色 断 2.5YR5/3にぶい赤褐色 内 5 B3/1暗青灰色
須恵器 器台 第38図K26	口径 (25.3) 残存高 6.3		緻密 1㎜以下の白色・黒色砂粒含む	外 2.5Y8/2灰白色 断 2.5YR5/3にぶい赤褐色 内 2.5Y8/2灰白色
須恵器 壺 第38図K27	口径 (16.0) 残存高 3.6	外面 回転ナデ・ナデ 内面 回転ナデ・ナデ	緻密 1㎜以下の白色砂粒僅かに含む 硬質	外 5 B3/1暗青灰色 断 〃 内 〃
須恵器 甕 第38図K28	口径 (18.1) 残存高 6.2	外面 口縁部－回転ナデ 頸部－平行タタキ後、回転ナデ 内面 指頭圧痕による調整後、ナデ	緻密 1㎜以下の白色砂粒僅かに含む 軟質	外 2.5Y8/2灰白色 断 〃 内 〃
須恵器 器台 第38図K29	残存高 9.9	外面 回転ナデ 内面 ナデ	緻密 1㎜以下の白色砂粒僅かに含む 硬質	外 5 B3/1暗青灰色 断 2.5YR5/3にぶい赤褐色 内 5 B3/1暗青灰色
須恵器 甕 第38図K30	残存高 6.6	外面 平行タタキ 内面 スリケシ	緻密 1㎜以下の白色・黒色砂粒含む 硬質	外 5 B7/1明青灰色 断 〃 内 5 B3/1暗青灰色
韓式系土器 鉢 第38図K31	口径 (25.6) 器高 7.9	外面 体部上半－回転ナデ 体部下半－回転ヘラケズリ 内面 回転ナデ	緻密1.5㎜以下の白色砂粒僅かに含む 軟質	外 5 B7/1明青灰色 断 〃 内 〃
須恵器 鉢 第38図K32	口径 (14.3) 底径 7.9 器高 4.9	外面 回転ナデ 内面 体部下半－静止ヘラケズリ後 ナデ	緻密 1㎜以下の白色砂粒僅かに含む 硬質	外 5 B3/1暗青灰色 断 2.5YR5/3にぶい赤褐色 内 5 B3/1暗青灰色
韓式系土器 甕 第38図K33	口径 (16.8) 残存高 3.4	外面 不詳 内面 ナデ	緻密 3㎜以下の白色砂粒多く含む 軟質	外 2.5Y6/2灰黄色 断 〃 内 〃
須恵器 鉢 第38図K34	口径 (17.3) 底径 (12.0) 器高 4.4	外面 回転ヘラケズリ 内面 回転ナデ	緻密 1㎜以下の白色砂粒僅かに含む 硬質	外 5 B7/1明青灰色 断 5 B3/1暗青灰色 内 〃

296－ＯＯ

種類 挿図番号	法量（単位cm） （　）は復元径	手法	胎土 焼成	色調
韓式系土器 甕 第38図K35	口径　(19.4) 残存高　2.3	外面　不詳 内面　ナデ	緻密　9㎜以下の白・灰・黒・暗赤灰色砂粒多く含む 軟質	外　2.5Y6/2灰黄色 断　〃 内　〃
韓式系土器 平底鉢 第38図K36	口径　(16.4) 残存高　5.3	外面　平行タタキ	緻密　5㎜以下の白色砂粒含む	外　5YR6/6橙色 断　〃 内　〃
韓式系土器 甕 第38図K37	口径　(20.8) 残存高　5.0	外面　平行タタキ 内面　ナデ	緻密　3㎜以下の白・灰・黒色砂粒多く含む 硬質	外　2.5Y6/2灰黄色 断　2.5YR5/3にぶい赤褐色 内　2.5Y6/2灰黄色
韓式系土器 平底鉢 第38図K38	底径　(9.6) 残存高　4.5	外面　不詳 内面　不詳	緻密　1㎜以下の砂粒僅かに含む 軟質	外　2.5Y6/2灰黄色 断　〃 内　〃
韓式系土器 片口鍋 第38図K39	口径　(31.4) 残存高　12.2	外面　上半－回転ナデ 下半－ヘラケズリ後、ナデ 内面　回転ナデ	緻密　1㎜以下の白色砂粒僅かに含む 軟質	外　2.5Y7/ 灰白色 断　〃 内　〃
韓式系土器 長胴壺 第39図K40	口径　(20.8) 残存高　33.1	外面　平行タタキ 内面　ナデ	緻密　3㎜以下の白・灰・黒色砂粒多く含む（クサリレキ含む） 軟質	外　5YR6/6橙色 断　〃 内　〃
韓式系土器 長胴壺 第39図K41	口径　23.8 残存高　31.4	外面　縄蓆文 内面　不定方向ナデ	緻密　3㎜以下の砂粒多く含む	外　2.5Y5/2暗灰黄色 内　7.5YR6/4にぶい橙色
韓式系土器 甕 第39図K42	口径　(25.7) 底径　(14.7)	外面　上半－平行タタキ 下半－静止ヘラケズリ 内面　不詳	緻密　1㎜以下の白色砂粒多く含む 軟質	外　2.5Y6/2灰黄色 断　2.5YR5/3にぶい赤褐色 内　2.5Y6/2灰黄色
須恵器 甕 第39図K43	底径　(13.3) 残存高　4.5	大きな孔を中心として8個の円孔を持つ	緻密　1㎜以下の白色・黒色砂粒含む 軟質	外　2.5Y8/2灰白色 断　〃 内　〃

601－ＯＳ

第３表　初期須恵器観察表（601－ＯＳ）

種類 挿図番号	法量（単位cm） （　）は復元径	手法	胎土 焼成	色調
須恵器 直口壺 第44図K49	口径　(11.0) 残存高　11.5	回転ナデ	緻密　3㎜以下の白色・黒色砂粒含む 軟質	外　5 B7/1明青灰色 断　2.5YR5/3にぶい赤褐色 内　5 B7/1明青灰色

種類 挿図番号	法量（単位cm） （ ）は復元径	手法	胎土 焼成	色調
須恵器 直口壺 第44図K50	口径 10.6 器高 18.9	回転ナデ 内面－不定方向ナデ	緻密 5㎜以下の砂粒多く含む	外 2.5Y8/2灰白色 内 2.5Y8/1灰白色
須恵器 瓶 第44図K51	口径 8.9 器高 11.6	回転ナデ 内面－底に当て具痕	緻密 硬質	外 5 B7/1明青灰 内 〃
須恵器 瓶 第44図K52	口径 10.1 器高 11.7	回転ナデ 内面 一 底に当て具痕	硬質	外 5 B7/1明青灰 内 〃
須恵器 器台 第44図K54	底径 17.0 器高 12.6	回転ナデ	緻密 2㎜以下の白色砂粒含む （クサリレキ僅かに含む） 硬質	外 5 B3/1暗青灰色 断 2.5Y5/2にぶい赤褐色 内 5 B3/1暗青灰色
須恵器 壺 第45図K55	口径 (19.7) 器高 31.15	外面－平行タタキ 内面－ナデ	緻密 4㎜以下の砂粒含む 軟質	外 7.5YR5/8明褐色 断 〃 内 〃
須恵器 壺 第45図K56	口径 16.2 器高 31.9	外面－細かい平行タタキ 内面－指頭圧痕による調整後、ナデ	緻密 3㎜以下の砂粒含む 硬質	外 10Y5/1灰色 断 2.5YR4/2灰赤色 内 10Y5/1灰色
須恵器 中型壺 第46図K57	口径 (24.8) 残存高 51.4	外面－平行タタキ 内面－スリケシ	緻密 2㎜以下の白色砂粒多く含む 硬質	外 5 B3/1暗青灰色 断 〃 内 〃
須恵器 壺 第46図K58	口径 32.8 残存高 53.5	外面－平行タタキ 内面－半スリケシ	緻密 5㎜以下の砂粒僅かに含む	外 N7/1灰白色 断 N6/ 灰色 内 〃

257－ＯＳ

第４表　初期須恵器観察表（257－ＯＳ）

種類 挿図番号	法量（単位cm） （ ）は復元径	手法	胎土 焼成	色調
韓式系土器 甕 第49図K62	口径 (13.8) 残存高 3.2	回転ナデ	緻密 2㎜以下の白色砂粒含む 硬質	外 7.5YR2/3極暗褐色 断 〃 内 〃
韓式系土器 甑 第49図K63	口径 (13.4) 器高 36.6	多孔式で18個の円形の孔を持つ 外面－ナデ 内面－ナデ	緻密 硬質	外 5 Y6/1灰色 断 〃 内 〃

種類 挿図番号	法量（単位cm） （　）は復元径	手　法	胎　土 焼　成	色　調
須恵器 高杯 第48図K64	口径　(15.2) 残存高　4.3	回転ナデ 杯部下半ーヘラケズリ後、ナデ	緻密 硬質	外　5 B7/1明青灰色 断　2.5YR5/3にぶい赤褐色 内　5 B7/1明青灰色
須恵器 高杯 第49図K69	口径　(13.8) 残存高　6.5	回転ナデ	緻密　2 ㎜以下の砂粒僅かに含む 硬質	外　5 B3/1暗青灰色 断　〃 内　〃
鉢式系土器 長胴甕 第49図K70	口径　20.6	斜格子タタキ 内面ーナデ	緻密　1 ㎜以下の白色砂粒含む	外　7.5YR7/6黄橙色 断　〃 内　〃

1100－ＯＳ

第５表　初期須恵器観察表（1100－ＯＳ）

種類 挿図番号	法量（単位cm） （　）は復元径	手　法	胎　土 焼　成	色　調
須恵器 蓋 第53図K74	口径　(10.7) 器高　4.2	回転ナデ 天井部に３段の剥突文	緻密　1 ㎜以下の砂粒僅かに含む 硬質	外　5 B3/1暗青灰色 断　5 B7/1明青灰色 内　〃
須恵器 無蓋高杯 第53図K76	口径　14.8 器高　9.9	回転ナデ（一部不定方向のナデ） ４方スカシ	緻密　3 ㎜以下の砂粒僅かに含む 硬質	外　N4/　灰色 断　〃 内　〃
須恵器 無蓋高杯 第53図K77	口径　15.0 残存高　4.6	回転ナデ	緻密 硬質	外　5 B3/1暗青灰色 断　2.5YR5/3にぶい赤褐色 内　5 B7/1明青灰色
須恵器 壺 第53図K81	口径　(19.4) 器高　5.4	回転ナデ 頸部に二条の凸帯	緻密 硬質	外　5 B3/1暗青灰色 断　2.5YR5/3にぶい赤褐色 内　5 B7/1明青灰色
須恵器 壺 第53図K83	口径　10.2 器高　11.8	回転ナデ 体部ーカキメ 底部ー不定方向ナデ	軟質	外　5 B6/1青灰色 断　10YR5/1赤灰色 内　5 B6/1青灰色
須恵器 短頸壺 第53図K85	口径　(6.4) 器高　7.2	回転ナデ 底部ー静止ヘラケズリ	硬質	外　5 B3/1暗青灰色 断　2.5YR5/3にぶい赤褐色 内　5 B7/1明青灰色
須恵器 杯身 第53図K88	口径　(18.0) 器高　4.1	回転ナデ 底部ー不定方向ナデ	緻密　1 ㎜以下の白色・黒色砂粒含む	外　5 B7/1明青灰色 断　2.5YR5/3にぶい赤褐色 内　5 B7/1明青灰色

種類 挿図番号	法量（単位cm） （ ）は復原径	手　　法	胎　　土 焼　　成	色　　調
須恵器 高杯 第53図K89	口径　(17.4) 残存高　4.4	回転ナデ	硬質	外　5 B7/1明青灰色 断　〃 内　〃
須恵器 ヨコ型土器 第53図K90	口径　(7.8) 残存高　4.4	回転ヘラケズリ 3段の波状文あり	緻密　2㎜以下の砂粒僅かに含む 硬質	外　5 B3/1暗青灰色 断　2.5YR5/3にぶい赤褐色 内　5 B3/1暗青灰色
須恵器 器台 第53図K92	底径　(16.8) 残存高　10.0	回転ナデ 長方形の交互スカシを持ち、6段の波状文を持つ	緻密　1㎜以下の白色砂粒僅かに含む 硬質	外　5 B7/1明青灰色 断　2.5YR8/2灰白色 内　2.5YR8/2灰白色
須恵器 器台 第54図K93	口径　(21.4) 残存高　13.8	回転ナデ 6段の波状文を持ち、下方に鋸歯文を持つ	緻密 硬質	外　N3/ 暗灰色 断　2.5YR5/2灰赤色 内　5 B5/1青灰色
須恵器 壺 第54図K94	口径　19.8 器高　29.1	外面一平行タタキ 内面一ナデ	緻密　5㎜以下の砂粒多く含む 軟質	外　7.5YR7/4にぶい橙色 断　2.5Y8/1灰白色 内　2.5YR6/6橙色
韓式系土器 甕 第55図K95	口径　(19.6) 残存高　3.8	不詳	緻密　黒色鉱物粒僅かに含む 硬質	外　5 B7/1明青灰色 断　〃 内　〃
韓式系土器 平底鉢 第55図K96	口径　(10.0) 残存高　4.6	外面一カキメ 内面一ナデ	緻密　3㎜以下の白・灰・黒色砂粒多く含む 硬質	外　2.5Y8/2灰白色 断　〃 内　〃
韓式系土器 平底鉢 第55図K97	口径　(18.6) 残存高　6.2	外面一平行タタキ 内面一ナデ	緻密　2㎜以下の白・灰・黒色砂粒多く含む 硬質	外　2.5YR8/2灰白色 断　5 B7/1明青灰色 内　〃
韓式系土器 甕 第55図K98	口径　(20.4) 残存高　6.1	外面一平行タタキ 内面一ナデ	緻密　2㎜以下の白・灰・黒色砂粒僅かに含む	外　5 YR6/6橙色 断　〃 内　〃
韓式系土器 甕 第55図K99	口径　(19.8) 残存高　10.7	外面一格子タタキ 内面一ナデ	緻密　砂粒僅かに含む	外　2.5Y7/1灰白 断　〃 内　〃
韓式系土器 長胴瓶 第55図K100	口径　18.6 器高　43.5	外面一ヘラケズリ 内面一ナデ	緻密　5㎜以下の砂粒多く含む 硬質	外　7.5Y5/1灰色 断　10Y4/1灰色 内　〃
韓式系土器 甕 第55図K101	口径　(20.0) 残存高　7.6	外面一平行タタキ 内面一ナデ	緻密　4㎜以下の白色砂粒多く含む 硬質	外　7.5YR3/4暗褐色 断　〃 内　〃

種類 挿図番号	法量（単位cm） （　）は復元径	手　法	胎　土 焼　成	色　調
韓式系土器 甕 第56図K108	口径　(23.0) 器高　23.3	外面－平行タタキ 内面－ヘラケズリ・ナデ	緻密　3㎜以下の白色砂粒含む 軟質	外　10YR7/2にぶい黄橙色 断　10YR8/1灰白色 内　10YR5/4にぶい褐色

8－OS

第6表　初期須恵器観察表（8－OS）

種類 挿図番号	法量（単位cm） （　）は復元径	手　法	胎　土 焼　成	色　調
韓式系土器 平底鉢 第59図K114	口径　(21.6) 残存高　2.7	外面－平行タタキ 内面ナデ	軟質	外　2.5Y7/1灰白 断　〃 内　〃
韓式系土器 平底鉢 第59図K115	口径　(12.2) 残存高　4.7	回転ナデ	緻密　2㎜以下の白色砂粒多く含む 軟質	外　10YR5/1褐灰色 断　5YR6/6橙色 内　10YR5/1褐灰色
須恵器 甕 第59図K116	口径　(19.4) 残存高　4.7	外面－平行タタキ 内面－ナデ	緻密　3㎜以下の白色砂粒含む 軟質	外　10YR7/1灰白色 断　2.5Y6/1黄灰色 内　2.5YR5/3にぶい赤褐色
土師器 高坏 第59図K117	口径　(14.6) 底径　(10.4) 残存高　10.9	回転ナデ	軟質	外　5YR6/6橙色 断　〃 内　〃
韓式系土器 甕 第59図K118	口径　(22.4) 残存高　12.0	外面－平行タタキ 内面－ナデ	緻密　3㎜以下の白・黒色砂粒多く含む 軟質	外　5YR6/6橙色 断　5G7/1明緑灰色 内5YR6/3にぶい橙色
須恵器 壺 第59図K120	口径　(13.0) 残存高　3.8	回転ナデ 波状文を持つ	緻密 硬質	外　5B7/1明青灰色 断　〃 内　〃
須恵器 壺 第59図K121	口径　(18.0) 残存高　23.8	外面－平行タタキ 内面－指頭圧痕による調整後、ナデ	緻密　1㎜以下の白色砂粒含む 軟質	外　7.5Y7/1灰白色 断　〃 内　〃
須恵器 甕 第59図K122	底径　(14.0) 残存高　16.3	外面－平行タタキ 内面－ナデ	緻密　1㎜以下の白色砂粒僅かに含む 硬質	外　5B3/1明青灰色 断　〃 内　〃

3．大庭寺遺跡（その2）56－ＯＲ出土の遺物について（第175～180図参照）

「大庭寺遺跡」の報告書の大きな調査成果であったが、編集の都合により掲載できなかった56－ＯＲについて報告する。それによって担当者としての責務を果たしたい。尚、遺物実測図、遺物写真については既刊の報告書を参照されたい[註1]。

大庭寺遺跡で発見された石津川旧河川は56－ＯＲと命名された。この56－ＯＲは川幅約60mに達する流れで深さは約4～5mである。川は丘陵の縁辺部に沿って南から北へ流れている。昭和17年撮影の写真に鮮明に写し出されている2条の河川の痕跡のうち西側の河川と一致するとみられる。

この川の初源は川底から生駒西麓産の台付き無頸壺等の遺物が出土していることから弥生時代中期に遡る可能性がある。更に後期の遺物や古墳時代前期の布留式土器や須恵器生産に深く関わりを持つ韓式系土器も出土している。しかしながら、量的に他を圧倒的に凌駕するのが須恵器である。陶邑という特殊性を考えてもその量は圧倒的である。ところで、河川という状況の中では平面的に川の流れを捉えることが困難であったが、土層断面による観察や出土した須恵器から大きく分けて5回程度の時期の異なる流れがかつて存在したことが判明した。以下の通りである。

第1期　I型式3段階までの初期須恵器を下限とする時期

第2期　I型式5段階を前後する時期

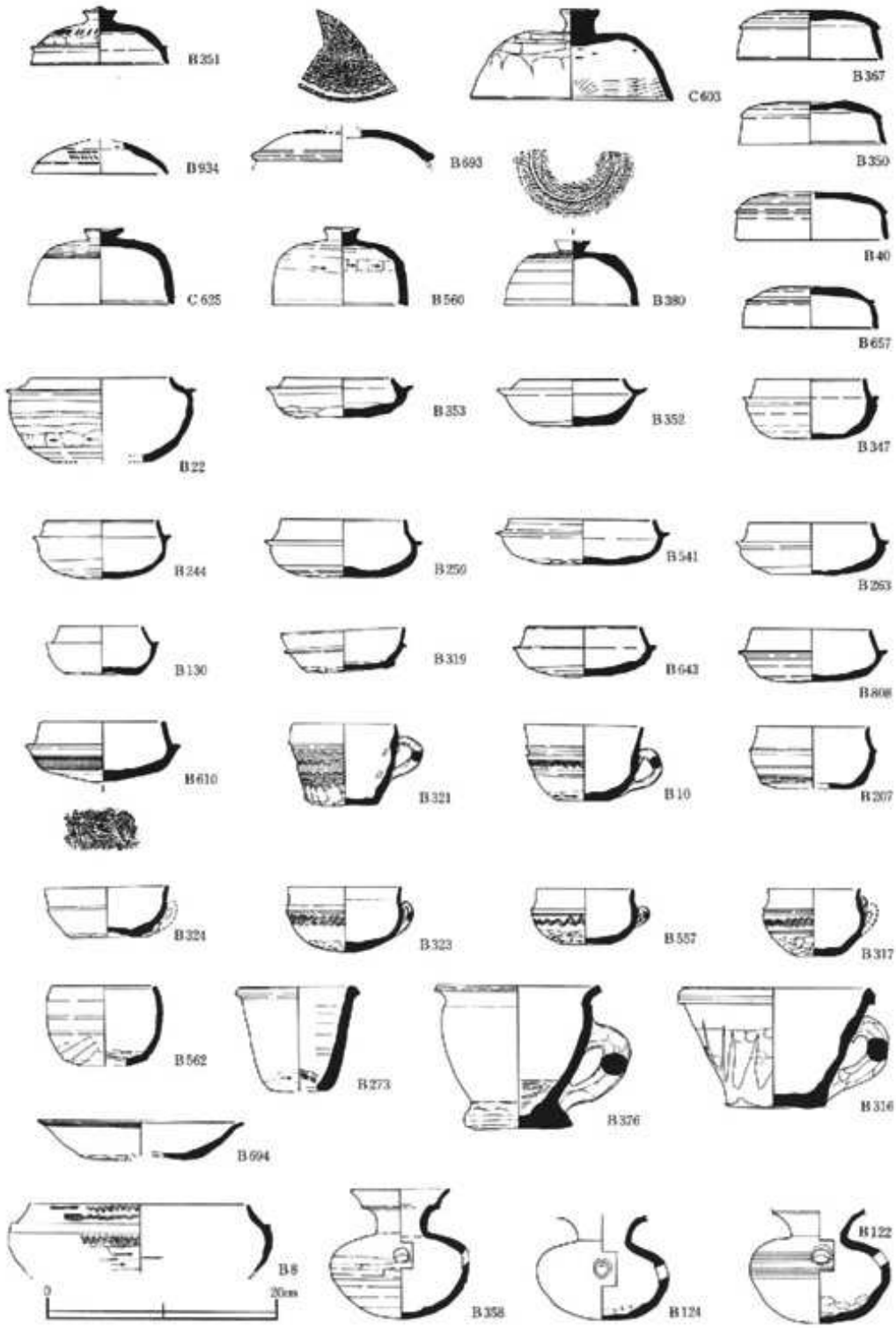
第3期　II型式1段階を前後する時期

第4期　II型式3段階を前後する時期

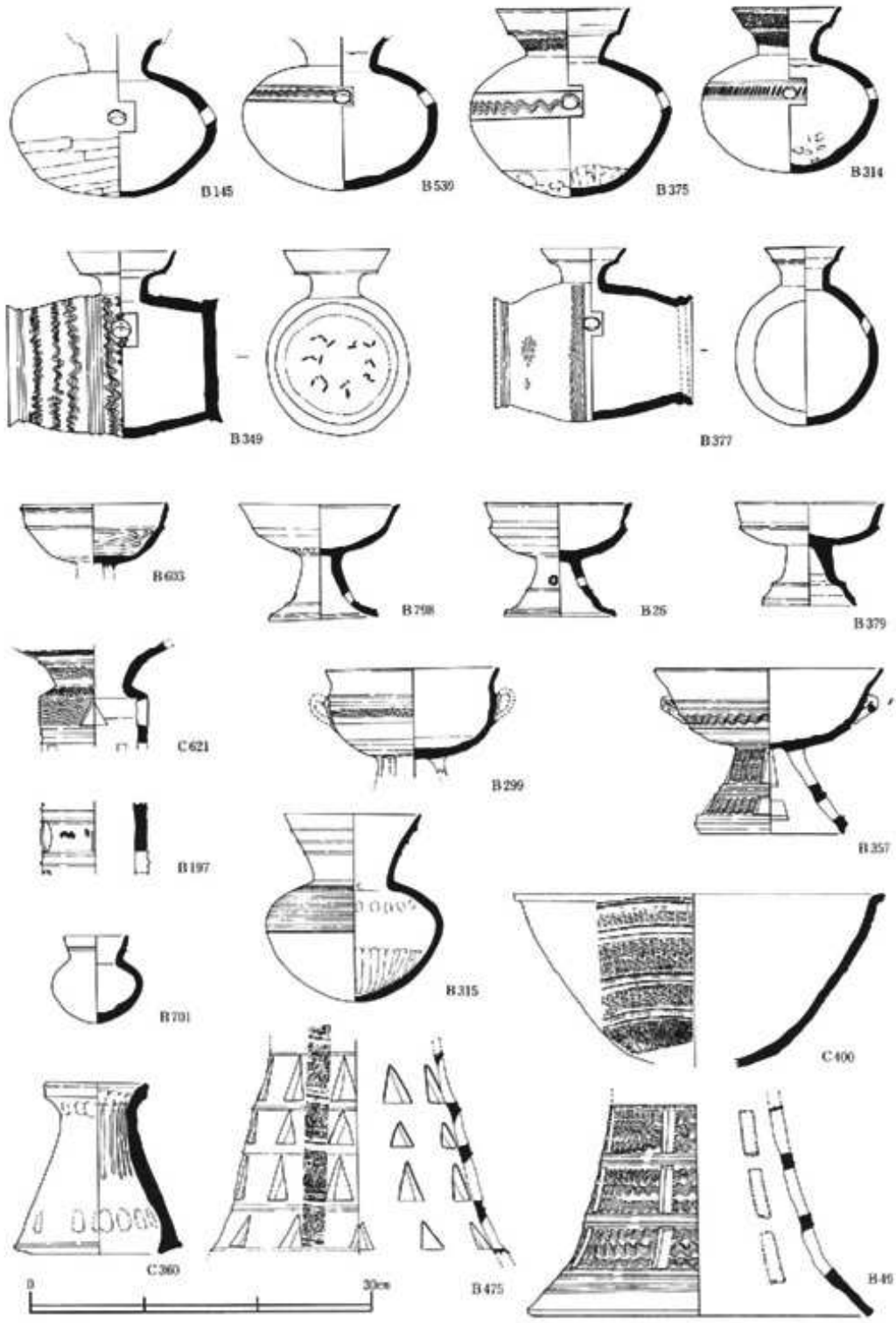
第5期　II型式4～5段階を前後する時期

3期と4期の間には時間的なギャップがある。土層の観察においてもこの間に、約1m前後の無遺物のシルト層が厚く堆積する。第4期の流れはこのシルト層を切り込んで流れていることが判明している。この時期一時的に川の流れが変わりこの地が後背湿地となっていたためと考えられる。また、第5期を最後に川は現在の石津川に近い位置に流れを変えたとみられる。

本稿では、須恵器生産に深く関わりがある初期須恵器、韓式系土器について記述することにした。中には須恵器、陶質土器の区別が困難なものが含まれる。明確な基準によって将来的には判断が可能かもしれないが、とりあえず初期須恵器として扱い、今後の検討課題としたい。いわゆる韓式系土器についても同様で須恵器との区別が困難なものが多々あ



第175図　古墳時代河川（56－ＯＲ）出土遺物１（1/6）



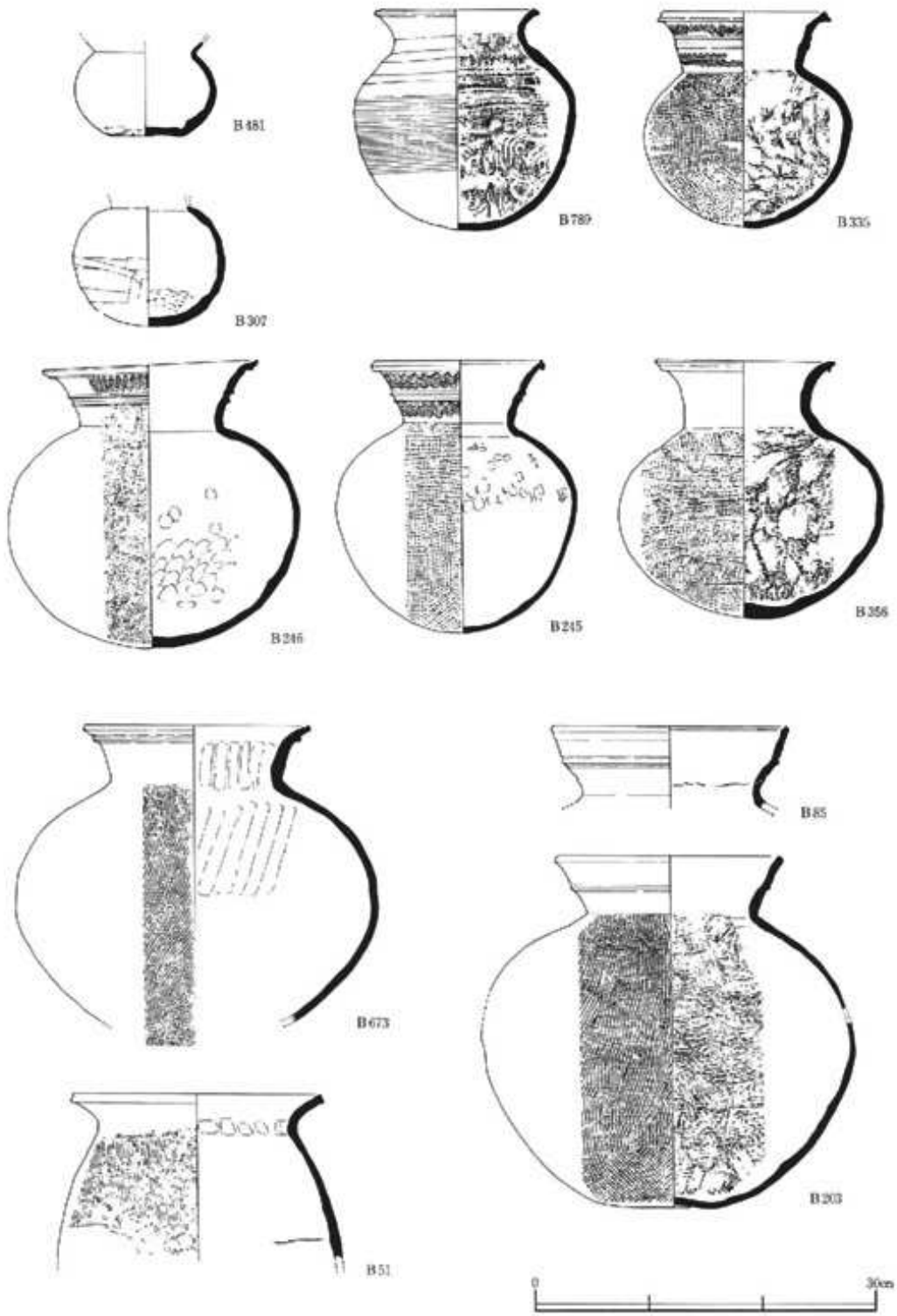
第176図　古墳時代河川（56－ＯＲ）出土遺物２（1/6）

る。一応の分類基準として、形態上で本来須恵器にある器種とない器種によって大きく二者に分け、更に手法・焼成・色調を考えあわせて分類することにした。この場合、須恵器にない器種の基準としたのは布留式土器の中で「小若江北」段階の土師器である[註2]。

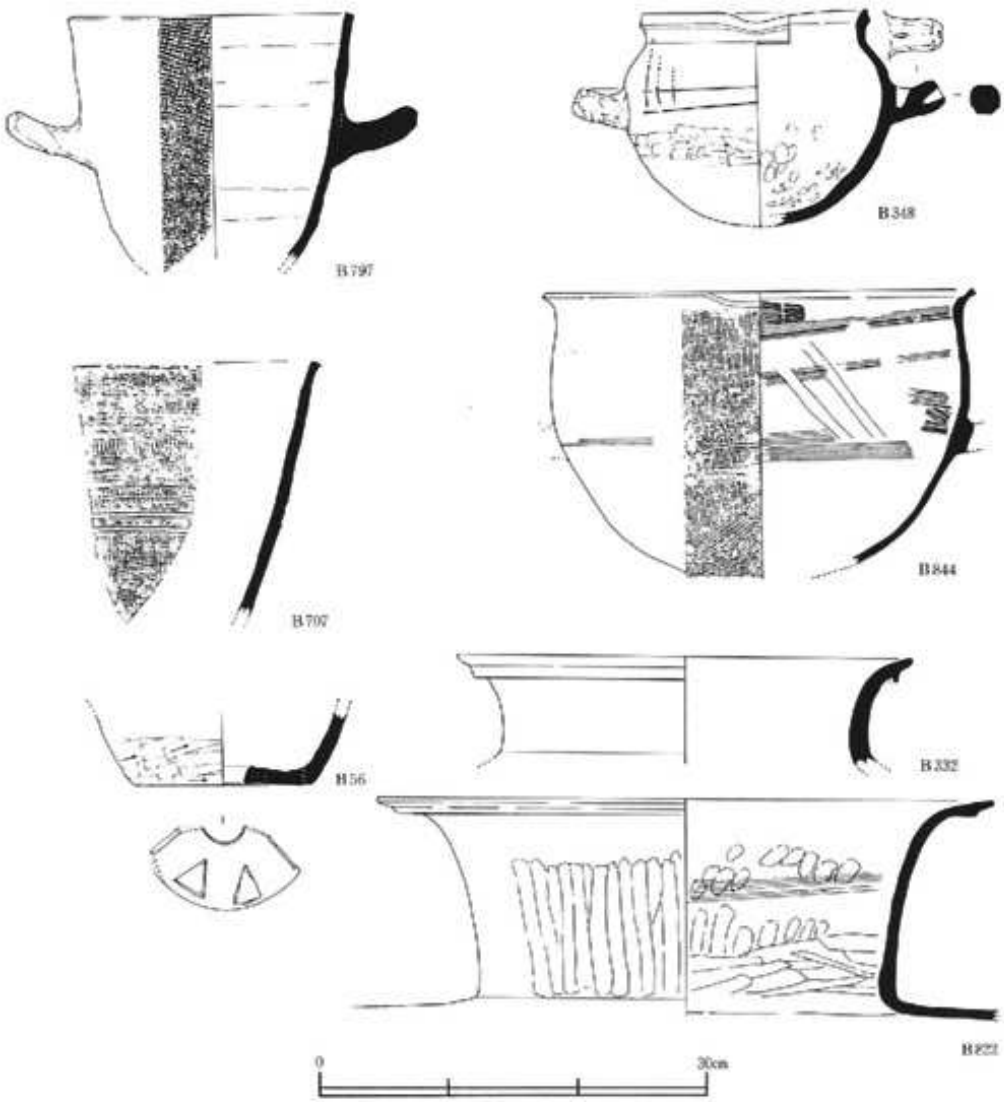
出土した器種は杯蓋・把手付椀・鉢・甑・高杯・器台・壷・甕・鍋・甑の11器種がある。

蓋はその形状からA類（B351・B934・B693・C603)、B類（C603)・C類（B380・B560・C625)、D類（B367・B350・B40・B657)の4タイプに分類できる。A類は天井部に刺突文を施文した装飾性がある蓋である。施文は1段と2段のものがある。B351は比較的丸い天井部に真ん中が高いつまみを持つ。稜は明瞭で口縁端部は丸い。稜の直上には静止ヘラケズリの痕跡が残る。内面は自然釉が全体に認められ、焼成時は逆さの状態であったことを示している。B類は口径17.8cm、器高7.8cmの大型品で背の高いつまみを持つ。仕上げ調整は雑で外面にはケズリ、内面にはタタキが顕著に残る。形態から見れば瓦質土器の有蓋台付直口壷の蓋の系譜と考えられる。C類は口径12cm程度、器高5.6~6.5cmで口径に比べ器高が高く、器高にたいして口縁部の長さの割合は2/3程度を占める。天井部は回転ヘラケズリで調整する。綾杉状の刺突文を施文したのもある。共通していえることはいずれもが焼成が軟質で、重ね焼きの痕跡があることがあげられよう。D類はやや時期が下る杯蓋（蓋）で扁平な天井部をもつ。器高にたいして口縁部の長さの比率は2/3程度を占める。

杯身はその形状からA類（B22)、B類（B353・B352)、C類（B347・B244)、D類（B259・B263・B130)、E類（B541)、F類（B319)、G類（B330・B808・B610)の7タイプに分類でき、個体間の差が大きい。A類は口径12.5cm、器高約7cmの深い体部を持つ大型品である。体部下半は静止ヘラケズリの後、ナデ調整で仕上げられている。底部は平底と見られる。類例としては陶邑古窯址群（以下、陶邑と略す）のTK73号窯の装飾された大型の鉢があげられる。B類は口縁部が内傾し、受部は長く上方向へ延びる。体部は扁平で底部は平底である。体部から底部にかけては静止ヘラケズリで調整されているが、底部外面は未調整に近く、ゲタ痕跡が認められる。器壁は厚く、重厚な感がある。C類は口縁部は内傾し、端部は丸い。受部は短く水平に延び、体部は丸みを持つ深い形状で回転ヘラケズリで調整されている。B347では体部の3/4以上にヘラケズリが及んでいる。D類はC類に形状が近いが底部がやや平底気味である点と口縁部と体部の割り合いが1：1に近い点が異なる。E類は口径12.8cm、器高が3.9cmと口径に比べて器高が低い。口縁部は内傾し、端部は丸い。体部は浅く、下半から底部にかけては静止ヘラケズリと不定方向の



第177図　古墳時代河川（56－ＯＲ）出土遺物３（1/6）



第178図　古墳時代河川（56－ＯＲ）出土遺物４（1/6）

ナデで仕上げている。器壁は薄くシャープな杯といえる。Ｆ類は杯身の中で唯一受部が下降する例である。口縁部は外方向へ底部から直線的に開く。器壁は薄く体部下半は静止ヘラケズリ、内面はナデによって調整されている。底部は平底で未調整である。以上の杯身は極端にいえばそれぞれ形態が異なり、形の定まらない定型化以前の様相を示している。これに対してＧ類は時期的にやや下り、定型化の始まった時期の杯身でＩ型式３段階と考えられる。

把手付椀はＡ類（Ｂ321）、Ｂ類（Ｂ10・Ｂ207・Ｂ324・Ｂ323・Ｂ557・Ｂ317）に分類が

できよう。A類は平底の底部から直線的に口縁部へと立ち上がる体部に大きな把手を持つ。B321は波状文は太く、ゆるやかである。胎土は緻密であるが焼成はやや軟質である。B類は体部がA類に比べて器高が低く丸みを帯び、把手は下方につくか、あるいは小さくなるものが多い。

鉢はA類（B562・B273)、B類（B694)・C類（B８）・D類（B376・B316)に分類できる。A類は小型品で椀状のものと底部から直線的に立ち上がるものがある。いずれも体部下半は静止ヘラケズリで調整されている。B類は皿状でやはり小型品である。C類は口径は大きく有蓋である。口縁部と体部に波状文がある。陶邑深田遺跡[註3]例では脚が付く。D類は大型で大きな把手が付く。器壁は厚く、調整も小型品に比べてシャープさに欠ける。B316の類例は陶邑深田遺跡に見られる。

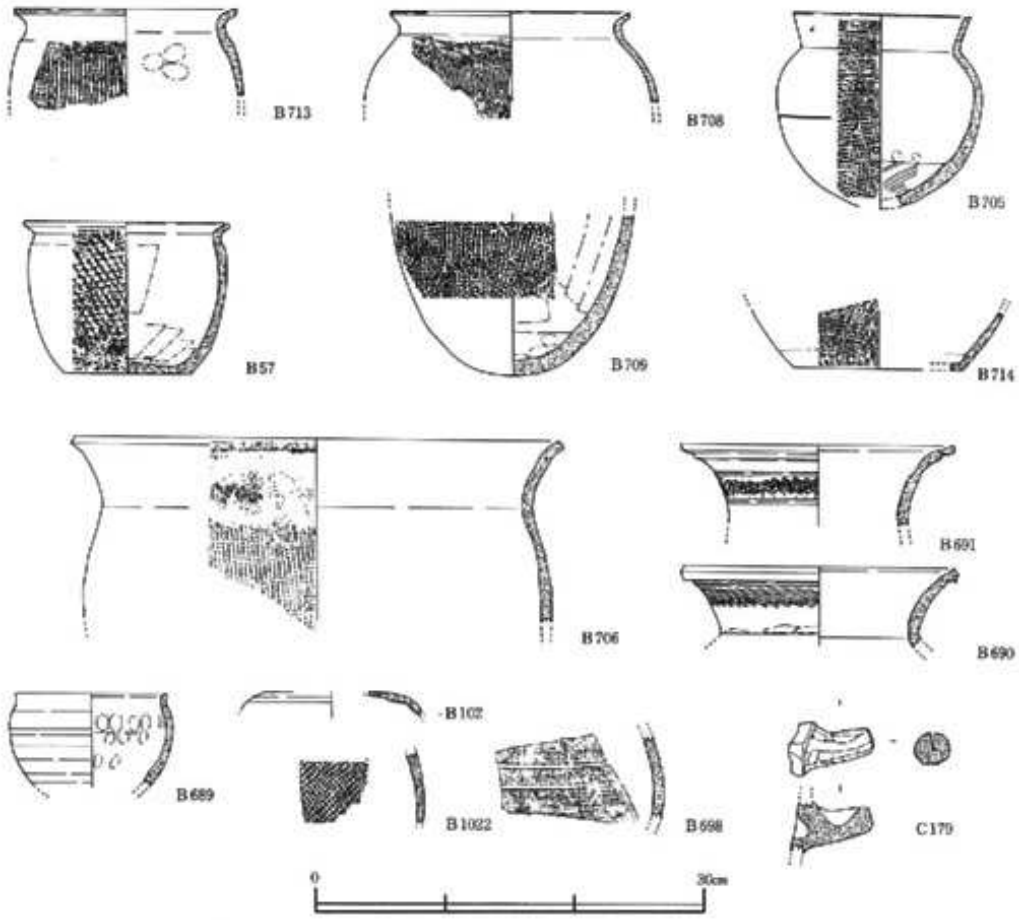
甕はA類（B358)、B類（B124・B122)、C類（B145)、D類（B539・B375・B314)、E類（B349・B377)がある。A類は小型品でB358で見ると頸部は細く体部最大径と円孔は上位にある。装飾は見られない。B類は前者に比べると時期がやや下ると見られる。C類は大型品で扁平な体部に比べて頸部が細く、施文もなく古いタイプである。D類は前者に比べると時期的に新しいと見られ、頸部はやや太く体部も球形に近く口頸部や体部が装飾されている。E類は樽型で体部は細長く古い特徴を持っている。体部に見られる界線は凸線のものと沈線のものがある。胎土は緻密で、焼成も硬質である。

高杯は有蓋のものはなく、すべて無蓋でA類（B603)、B類（B798)、C類（B26・B379)、D類（B299・B357)に分類できよう。A類の高杯は丸い体部に明瞭な２本の凸帯が巡る。外面は丁寧な回転ナデ調整、内面は不定方向のナデ調整で仕上げている。器壁は薄くシャープである。B類は当遺跡の高杯のなかでも多いタイプである。浅い杯部は丁寧に回転ナデ調整されている。脚部裾、裾端部には凸帯を持つ。このタイプは器壁が薄く、胎土は緻密、焼成も硬質である。色調も暗青灰色あるいは暗紫灰色が多い。C類の杯部は蓋を逆にした形状である。脚部の形状は種々あるがB379の脚は古式陶質II段[註4]～III段階の金海礼安里86号墳、同117号墳例の系譜につながると考えられる。D類は装飾性豊かな大型の高杯である。B299は杯部が深く、型式的にはB357に先行するタイプといえる。B357の脚部は長方形と方形の直列２段のスカシを持つ珍しい例である。

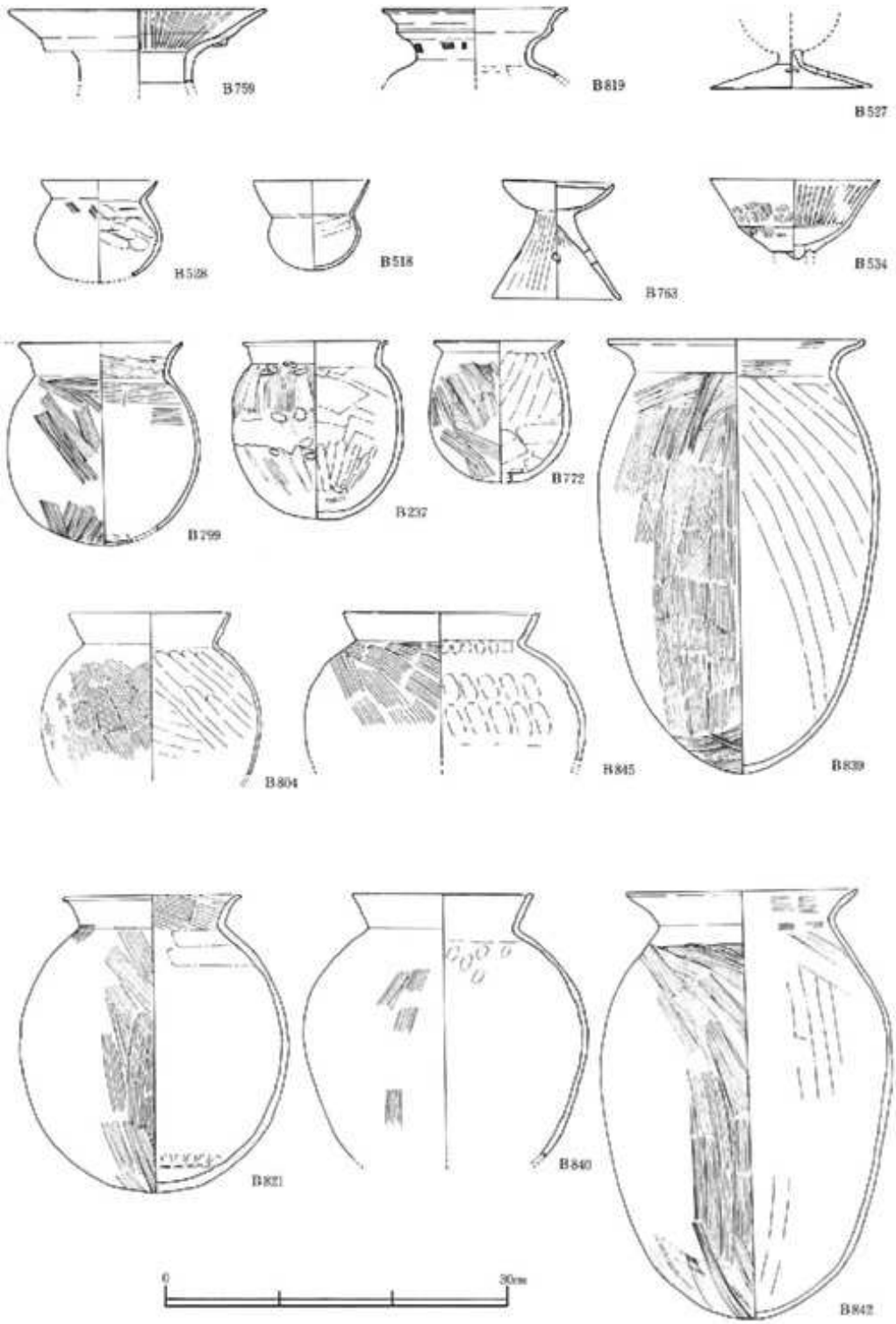
器台はA類（C621・B197)、B類（C400・B475・B49)、C類（C360)に分類できる。A類は筒形の器台で筒部に交互に三角形と長方形のスカシを穿つものと「亀の甲羅」を表現した粘土盤を筒部に貼付けた装飾付器台もある。B類は大型の高杯形の器台で杯部には

太い波状文、体部下半には鋸歯文を施文し、更に下に刺突文が巡る。陶邑内での鋸歯文の出土は稀でこれまでの知見では3例目である[註5]。脚部は三角形、長方形のスカシを上下に直列に配するタイプで、交互に配する例は56—ORからは出土していない。C類は無施文で他の器台に比べやや小さい。胎土は砂粒を多く含み焼成は軟質である。色調は灰白色を呈する。形態から見た場合、九州地方の弥生時代後期～古墳時代前期にかけて多く見られる器台やC360は小型壺B701とセット関係と考えられる。畿内における布留式土器の小型丸底土器と器台のセット関係の系譜で捉えることができるのではなかろうか。

壺はA類（B701）、B類（B315）、C類（B481・B307）、D類（B789）、E類（B335・B246・B245）、F類（B356・B673）、G類（B85・B203）に分類できる。A類は小型品でミニチュアに近く口縁部は二重口縁である。胎土は白色砂粒を多く含み焼成は硬質である。色調は黄橙色をしている。B類は直口壺である。口縁部に3条の凸帯を持つ。波状文



第179図　古墳時代河川（56－OR）出土遺物5（1/6）



第180図　古墳時代河川（56－ＯＲ）出土遺物６（1/6）

の施文はない。体部肩部はカキメとまではいかないが強めの回転ヘラケズリで調整されている。胎土は緻密で焼成も硬質である。C類は同じく小型品であるが口縁部の形状は不明である。底部は平底と丸底の違いはあるが共に胎土は緻密で、焼成も硬質である。D類は体部をカキメで調整し、内面には半スリケシのタタキが残る。形態、調整からみればかなり後出の感もあるが、層位的には他の一群と同様であるので掲載した。E類は中型で口縁部に断面三角形の凸帯を持ち、波状文を施文している。波状文は1段と2段のものがある。体部は細かい平行タタキで調整している。B245は横位のタタキのあと、縦位のタタキで調整され一見格子タタキにみえる。さらに体部には2～3㎝間隔で横方向にナデを施している。胎土は緻密であるが、焼成は軟質に近く色調も灰黄色を呈している。E類に見られる壺の内面はスリケシが通有であるが無文と見られる当て具の痕跡が僅かに残る。F類は無施文で凸帯等もない。体部はE類同様細かい平行タタキで調整され、内面もスリケシてはいるが無文の当て具痕が残る。胎土は緻密で焼成も硬質である。D類は土師器の二重口縁壺を模倣した形態といえる。口縁部の凸帯によって二重口縁を表現している。体部は細かい平行タタキで調整し、内面は半スリケシで当て具痕が僅かに残る。胎土は緻密で焼成は硬質である。

甑はB797のように格子タタキで調整され、焼成は軟質で土師器に近いものとB707のように平行タタキで調整し、硬質のものがある。後者は平行タタキの後丁寧にスリケシ、更に3条の沈線を巡らせている。底部はB56のように中央に円形の孔を穿ち、外側に三角形の孔を配するもの、円孔を穿つもの、長方形の孔を穿つものの3種がある。甑のなかでB707以外は韓式系土器で分類すべきかもしれないが、とりあえず須恵器の焼成不良との認識からこの類に掲載した。

鍋は大小あり口縁部は片口を呈している。把手には切り込みがみられるがB348は先端にも切り込みがみられる。体部は2本の沈線が巡り丁寧なスリケシで調整している。底部には平行タタキが残る。B844は細かいタタキで調整し、体部中央には2条の沈線が巡る。内面はハケメ調整である。

甕はA類（B332）、B類（B822）、C類（B51）に分類できる。A類、B類は口縁部の形状は端部が丸く直下に断面三角形の凸帯が巡る。端部が平で面取りしている例もある。B822は口縁部にヘラケズリの痕跡が顕著である。C類は体部下半が欠落しているが長胴と考えられる。体部は平行タタキで調整し、内面は丁寧にスリケシている。胎土は白色砂粒を多く含み焼成も軟質である。TK73号窯址でも類品の出土が知られる。

韓式系土器は器種別に見ると平底鉢、甕、甑があげられる。平底鉢はB713・B57がある。B713は口縁端部が平で体部が平行タタキの調整である。B57は短く外反する口縁部をもち、体部は粗い斜格子タタキで下方はヘラケズリで調整している。底面は僅かにゲタ痕跡が残っている。胎土には砂粒を含み、焼成は軟質である。色調は灰褐色で煤の付着が顕著である。日常的に煮沸用として使用されていた可能性がある。B708・B709は長胴の甕と見られる。B708は器壁が薄く、体部は平行タタキで調整されているのに対しB709は器壁が厚く格子タタキで調整している。B706は大型の甕で鍋の可能性も考えられるが、隣接する伏尾遺跡[註6]の出土例でみると比較的長胴で底部には脚が付くと見られる。胎土は緻密で須恵器に近く、焼成も硬質である。色調は黄橙色で煤の付着も認められる。B705は小型の甕で体部上半は回転ナデの調整で下半に格子タタキが残る。胎土は緻密で須恵器に近く、焼成も硬質である。色調は黄橙色で煤が付着する。B714は甑の底部か平底鉢の底部かと考えられる。B691・B690・B689・B1021・B1022・B698・C179は瓦質の土器である。胎土は緻密で須恵器に近い。焼成は瓦質で、色調は暗灰色を呈する。断面は灰白色を呈する。甕B691・B690や杯B1021は形態から見た場合、須恵器そのものである。意識的に瓦質としたのか、あるいは単に焼成不良なのかは今後の検討課題といえる[註7]。

土師器は布留式土器の古い段階～須恵器の伴う段階までを抽出して掲載した。この中で須恵器が伴わないと考えられるのはB759・B527・B518・B763である。甕（B804・B845・B821・B840)は柏原市大県遺跡[註8]の竪穴住居址出土例と類似し、土師器編年の標識遺跡の1つである「船橋遺跡O－1[註9]」の近い段階に位置付けられると考えたい。

註釈及び参考文献

註1　「陶邑・大庭寺遺跡」（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第41集　1989

註2　坪井清足「岡山県笠岡市高島遺跡調査報告」　岡山県高島遺跡調査委員会　1956

註3　中村　浩『陶邑・深田』大阪府文化財調査抄報第2輯　1973

註4　申　敬澈「伽耶地域の陶質土器」『陶質土器の国際交流』　大谷女子大学資料館編集　1989

註5　「太平寺遺跡」『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書1』　大阪文化財センター　1984、竹谷俊夫「初期須恵器の新例」『古文化談叢16』　1986

註6　1988年度協会で調査。

註7　橿原考古学研究所中井一夫氏から実際に須恵器を焼く際に火まわりによって瓦質のものができるとの御教示を得た。

註8　『大県遺跡』－堅下小学校屋内運動場に伴う－柏原市文化財概報1988－柏原市教育委員会

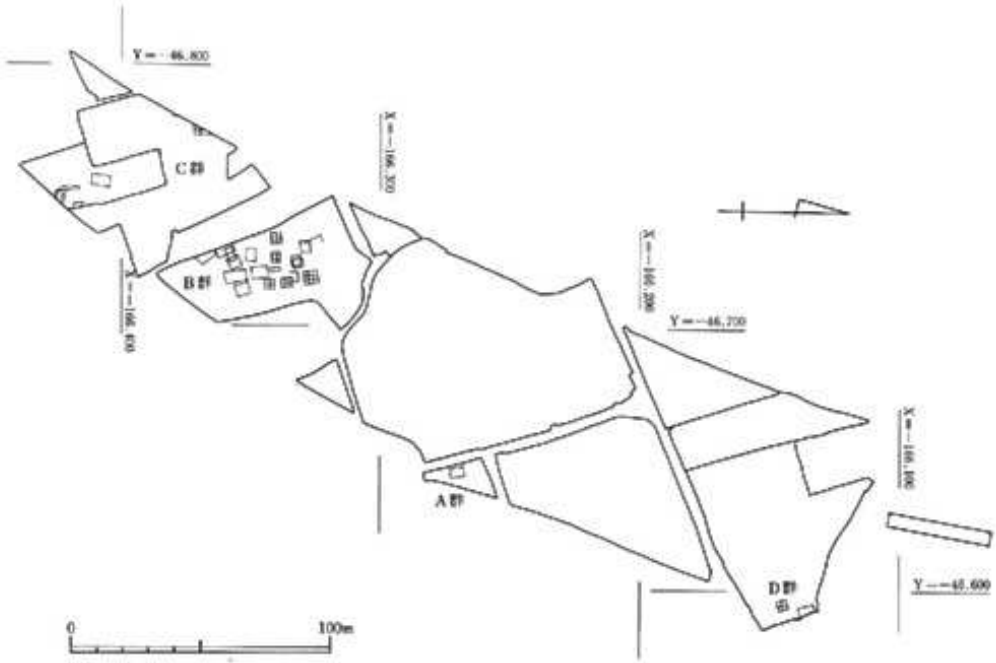
註9　原口正三他『船橋II』　1962

第4節　奈良時代

大庭寺遺跡でこれまでに出土した奈良時代の遺構は大きく4つの群に分かれて見つかっている。Ⅰ区の丘陵上、Ⅱ区の丘陵斜面、1987年度調査区とⅢ区に広がる沖積地上、沖積地で石津川に隣接する建物群（Ⅳ区）などである。今回はこれらの群をそれぞれ、C群、B群、A群、D群としてまとめて報告したい。但し、A群は既に1987年度に中心部分の調査が行われており、今回見つかったのはその周辺部分である。調査の結果、C群で掘立柱建物3棟、溝、土坑、その他柱穴多数を検出した。B群では、掘立柱建物25棟、溝、土坑、柱穴多数を検出した。A群では掘立柱建物1棟、他柱穴多数を検出している。D群は、掘立柱建物2棟、溝、土坑など若干の遺構・遺物がⅣ区B、C区の限られた地域に検出されている。

建物群の規模はA群・B群が大きくまとまったもので、C群・D群は小規模なものである。しかしC群は建物が散在した状態で丘陵上調査区外にさらに広がる可能性がある。

ここでは、丘陵頂部から沖積地の順にC群・B群・A群・D群の順に記述する。なお、単独の柱穴についてはB群の終わりで概要をまとめて報告した。



第181図　奈良時代全体図（1/3000）

C群

丘陵頂上部のⅠ区A・Bに広がる地区である。掘立柱建物3棟、土坑などからなる。建物は1～2棟で散在して見つかった。調査区で分断された建物も見られることから、建物群は調査区の外にさらに広がっていると考えられる。

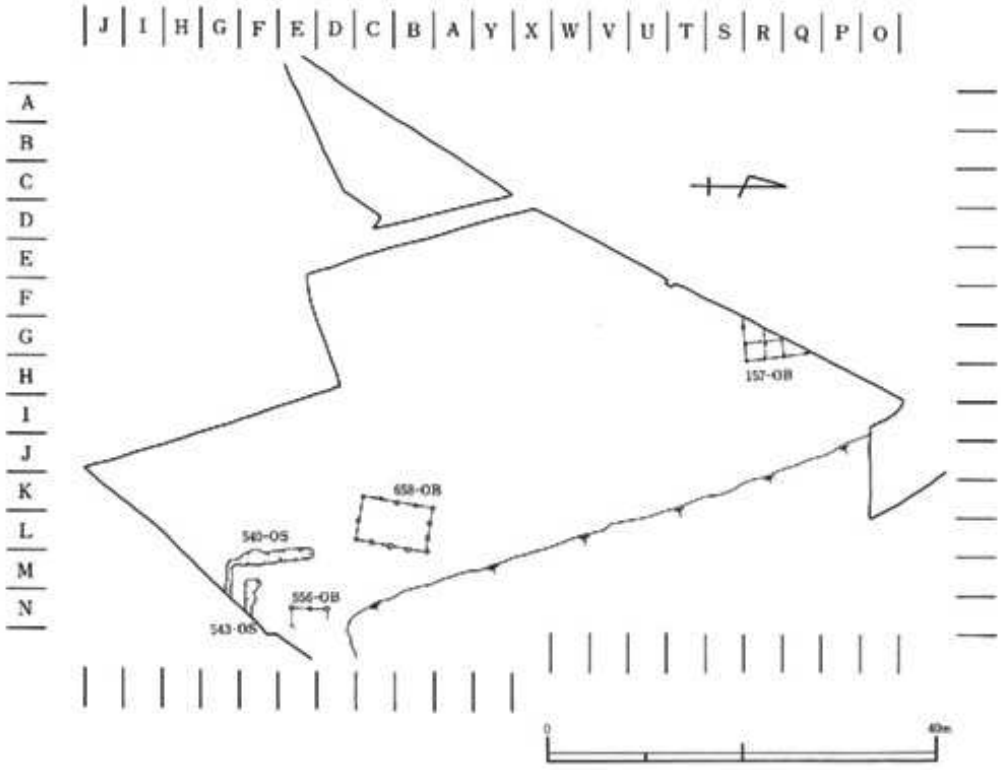
奈良時代の遺物は柱穴や土坑の中から出土している。しかし、古墳時代と同様に後世の水田開発などの影響で包含層は削平され全体の遺物量は少ない。

157－ＯＢ（第182・183・184図、図版113A参照）

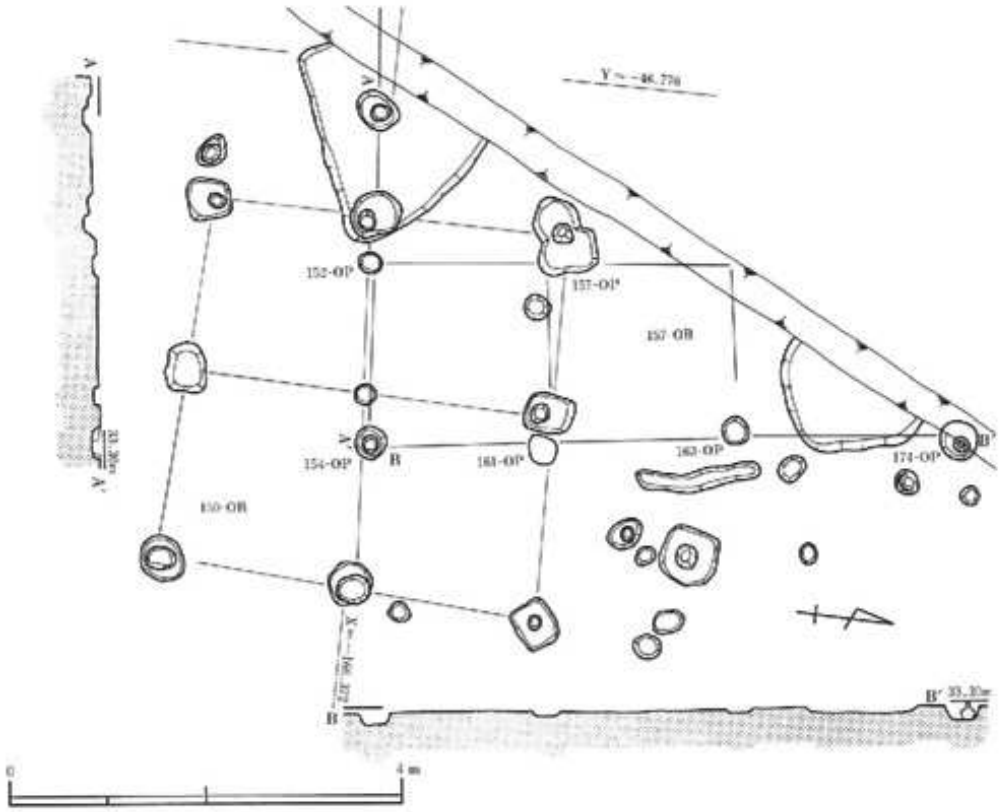
K18QG周辺に位置する。建物は古墳時代の150－ＯＢと重なるもので、3間以上×2間以上（6.10m以上×3.20m以上）の規模を持つ。北側半分が調査区外に延びており全体の規模や、桁行・梁行の方向は不明である。東柱は157－ＯＰが検出されており総柱建物になる可能性がある。建物の主軸はN－7°30′－W（東辺で計測）を示している。

柱穴の検出レベルはT.P.＋33.25mで、柱穴底のレベルはT.P.＋33.10～33.20mである。柱間寸法は南北1.80～2.30m、東西1.30～1.90mを計る。

柱穴の直径は30～40cm程度、深さ5～10cmと小さく浅いものである。後世の削平の影響



第182図　C群遺構配置図（1/800）



第183図　157－ＯＢ平面・断面図（1/80）

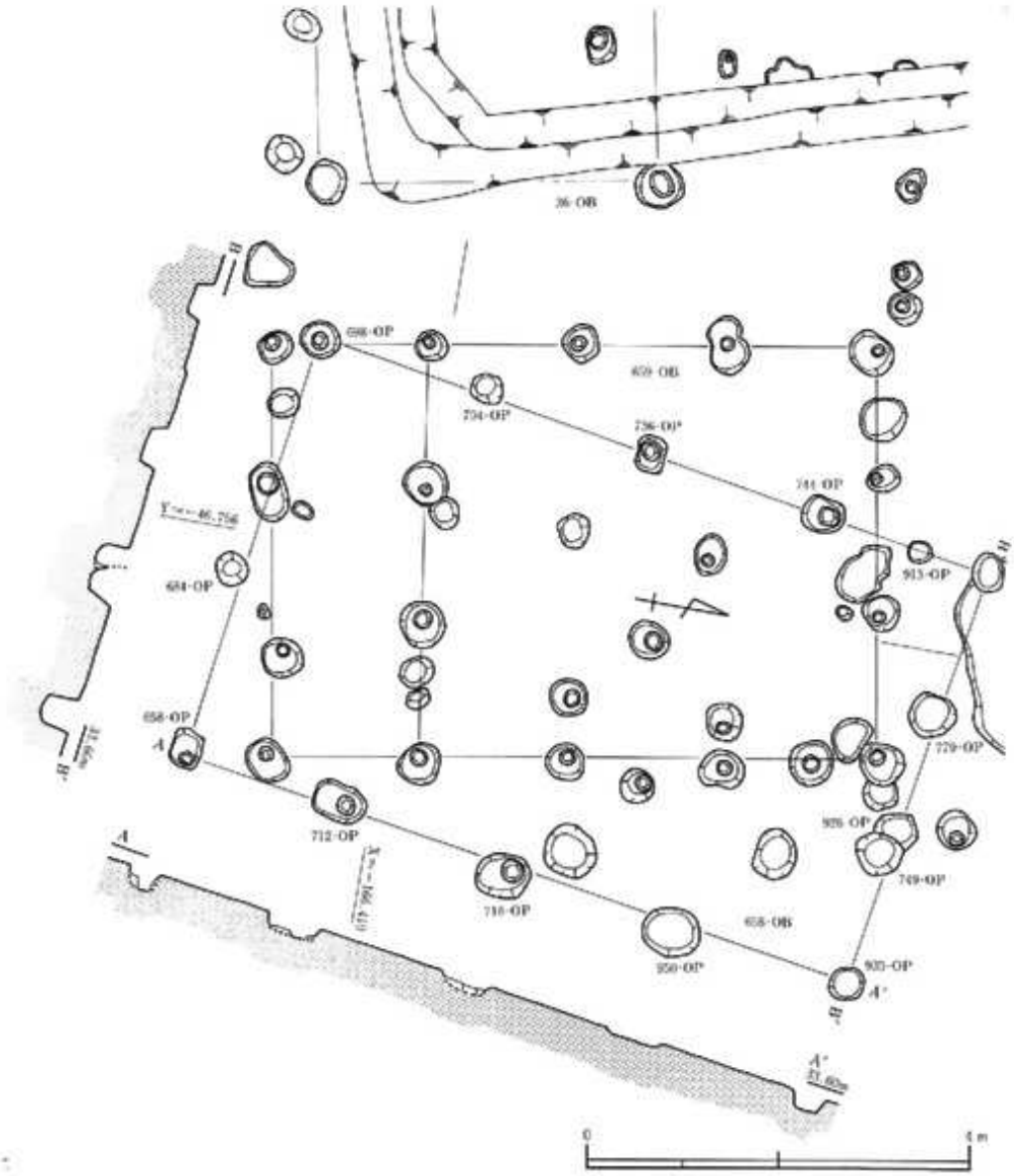
と考えられる。

柱穴の平面は円形を呈するものが多く、北東隅から検出された174－ＯＰには、須恵器 長頸壷Ｎ１が据えられていた。長頸壷は口縁部を上にし、正位置で置かれたもので、柱を抜き取った後に据えられていた。地鎮のために据えられた可能性がある。

遺物はこの須恵器 長頸壷１点で、壷の残存高は18.2㎝、底径10.1㎝、底部の周辺から体部下端に回転ヘラケズリを施す。

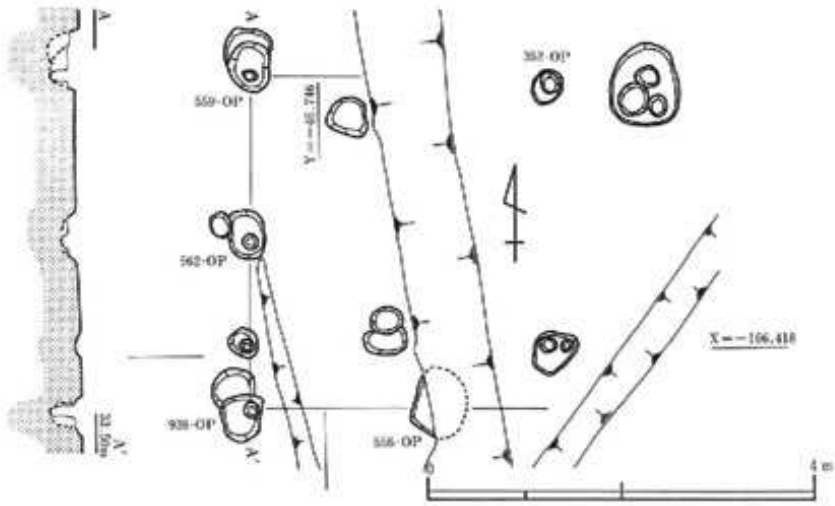
肩部には沈線を持ち、体部から肩部にかけてはやや丸く立ち上がる。口縁部は後世の削平によって欠損している。

第184図　174－ＯＰ出土遺物（1/4）



第185図　658－ＯＢ平面・断面図（1/80）

第186図　658－ＯＢ出土遺物（土器1/4，埦1/3）



第187図　556－ＯＢ平面・断面図（1/80）

658－ＯＢ（第182・185・186、図版113G参照）

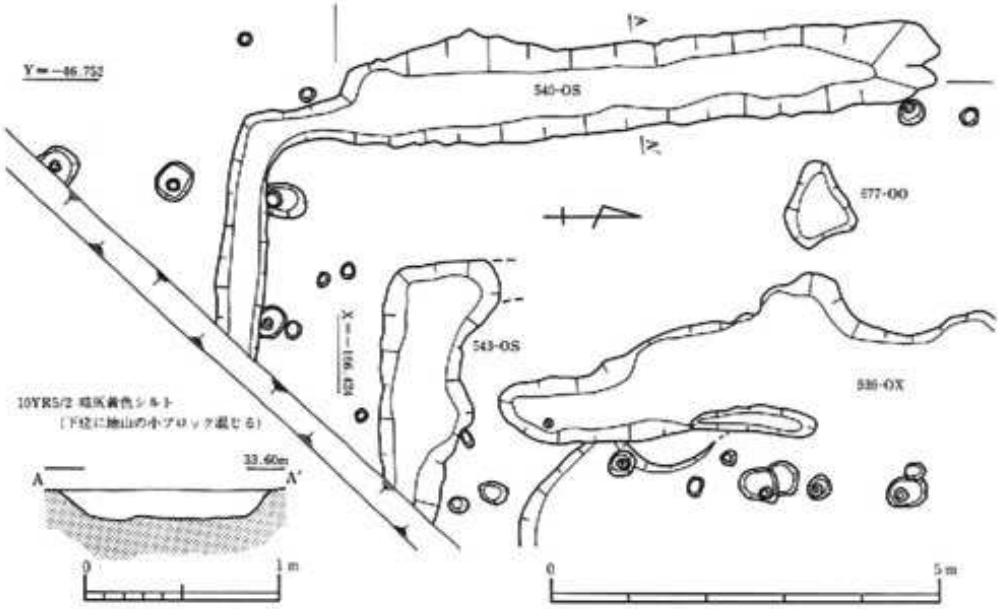
K23ＢＫに位置する。前節（古墳時代Ⅱ期の659－ＯＢ参照）で述べたように、この付近の建物復元は、図示した例とは別の形でも可能である。ここで復元した建物は桁行は4間(7.3m)で、梁行は北妻では3間、南妻では2間（4.57m）である。面積は33.3㎡で、主軸の方位はＮ－10°－Ｅである。建物の検出レベルはT.P.＋33.45mで、柱穴底のレベルはT.P.＋33.10～33.30mである。柱間寸法は桁行1.72～1.97m、梁行は北妻1.45～1.60m、南妻2.05～2.55mである。柱の直径は15～22㎝である。

遺物は土師器片、須恵器などがあるが、図化できるものは少ない。Ｎ2は698－ＯＰ、Ｎ3は684－ＯＰ（柱痕跡）から出土しており、Ｎ3の壺は丘陵斜面上の建物では奈良時代の土器とともに出土しているので、この建物も同じ時期と考えている。

556－ＯＢ（第182・187・188図、図版60上・113H参照）

K23ＤＮに位置するが、Ⅰ区ＡとⅠ区Ｂにまたがり、さらに調査区外にも柱穴の存在が予想されるため、全容は不明である。936－ＯＸを切っており、南北2間×東西1間以上（3.45m×2m以上）の建物である。面積は7.9㎡以上で、仮に352－ＯＰがこの建物を構成するとすれば、東西2間(4.1m)以上、14.1㎡以上となる。主軸の方位は南北の柱列でほぼ真南北のＮ－1°－Ｅである。建物の検出レベルはT.P.＋33.35m前後で、柱穴底のレベルはT.P.＋33.03～33.15mである。柱間寸法は南北柱列1.75～1.83m、東西柱列は2m程度である。柱の

第188図　556－ＯＢ出土遺物(1/4)

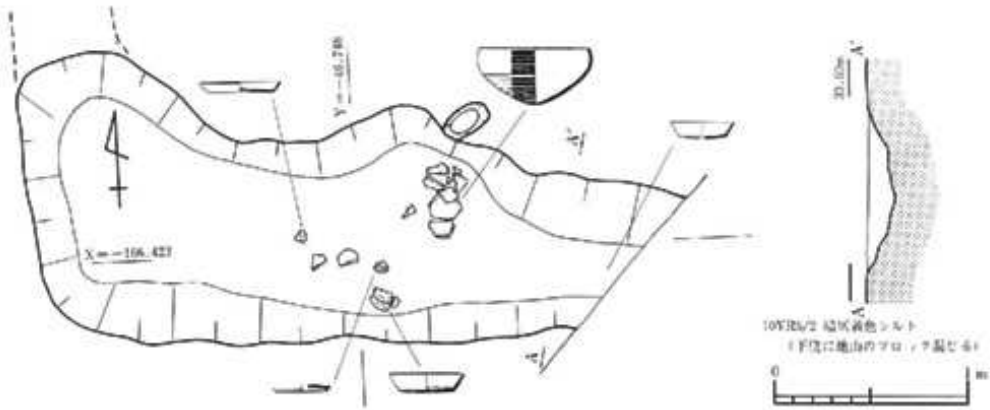


第189図　540・543－ＯＳ平面（1/100）・断面（1/40）図

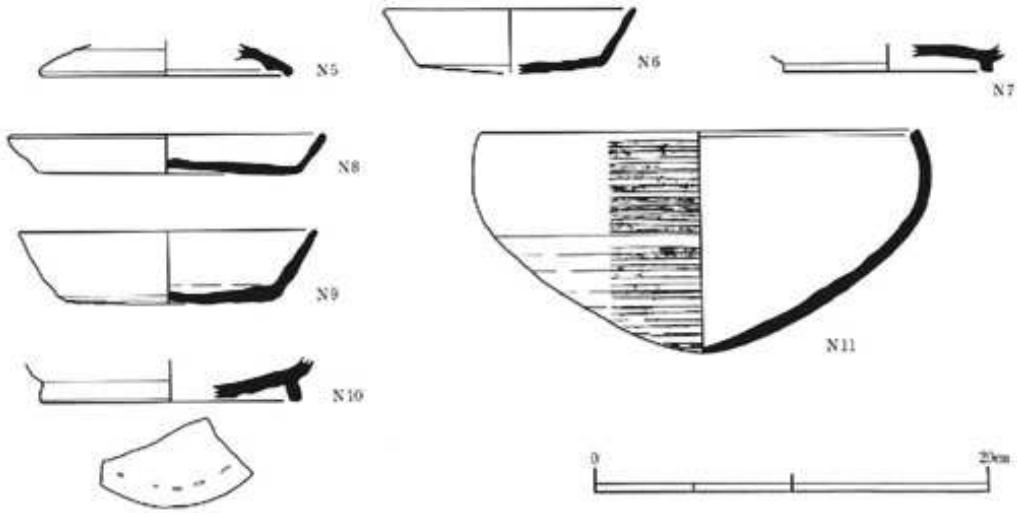
直径は12～13cmである。遺物には土師器、須恵器（初期須恵器を含む）があり、最も新しい土器は938－ＯＰ（掘方）から出土した奈良時代の須恵器 杯身Ｎ４である。

543－ＯＳ（第182・189～191図・図版60・113Ｃ参照）

Ｋ23ＦＭ～Ｋ23ＦＮにかけて検出した東西方向の溝である。西端でわずかに北へ（ほぼ直角に）曲がり、それ以上は失われている。後述の540－ＯＳと平行の溝であったと思われる。検出長は約3.3m、幅0.8～1.2m、深さ約0.15mで、断面は台形ないし傾斜の緩いＶ字形である。埋土は暗灰黄色シルトで、上下に明瞭に地層区分できたわけではないが、下位には地山の小ブロックが混っている。



第190図　543－ＯＳ遺物出土状態（1/40）



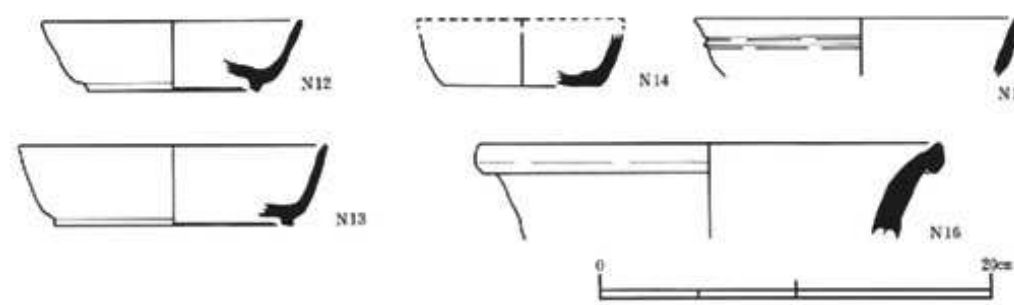
第191図　543－ＯＳ出土遺物（1/4）

出土した遺物は若干の土師器のほか、須恵器にはⅡ型式・Ⅲ型式（Ｎ５）のものもあるが、中心はⅣ型式である。杯Ａ（Ｎ６・Ｎ９）・杯Ｂ（Ｎ７）・皿Ｃ（Ｎ８）・蓋（N10）・鉢Ａ（N11）などがあり、Ｎ８・N11は完形品である。N11は「平城宮Ⅳ」のＳＫ219（『平城宮発掘調査報告書Ⅱ』奈良国立文化財研究所1962年）に類似するものがある。

540－ＯＳ（第182・189・192図、図版60上・113Ｄ参照）

K23ＥＬ～K23ＧＭにかけて検出した溝で、東西および南北方向のＬ字状を呈している。東西方向の部分は543－ＯＳと平行で、両者は一体の遺構であると思われる。東西約3.2m、南北約9.1mを検出しており、南北部分の主軸方位はＮ－6°－Ｗである。幅は東西部分と南北部分の南で0.50～0.65m、南北部分で1.05～1.50mである。深さは南東部が約0.15m、北西部が約0.15～0.2mで、底面は北へ低く傾斜していたと考えられる。断面は台形である。埋土は543－ＯＳと同様であった。

遺物は土師器細片やⅡ型式（N15・N16）・Ⅳ型式（N12～14）の須恵器などがある。



第192図　540－ＯＳ出土遺物（1/4）

B群

B群は標高28.1m～30.1mの丘陵斜面に立地し、大庭寺遺跡で検出された奈良時代の建物群の中では最も大きな群である。掘立柱建物19棟・溝・土坑・柱穴などからなる。しかし、A群のように井戸は伴っていない。

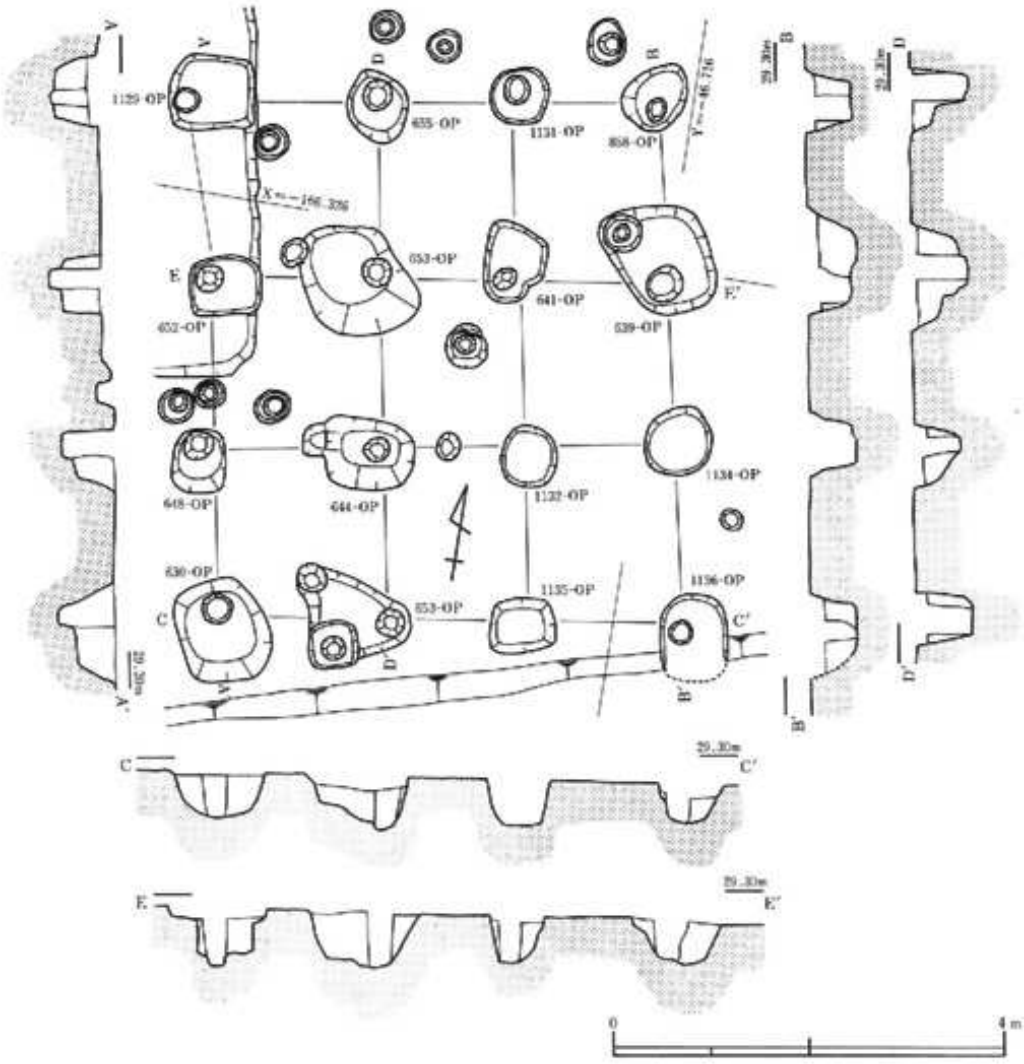
建物が建つのは南北50m、東西20mの範囲に集中している。北側は、630－ＯＢが建物群の北限となる。東は886－ＯＳ・889－ＯＳ・1074－ＯＳなど、建物群に平行して流れる溝が範囲を限る。南側は282－ＯＢまでである。西側は227－ＯＢ・191－ＯＢなどが範囲外に延びる他、やや平坦な地形であることから、範囲はさらに延びると思われる。

630－ＯＢ（第193・194・195図、図版54上参照）

K18G T周辺に位置し、桁行３間×梁行３間(5.4m×4.9m)の南北棟になる総柱建物である。建物面積は25.03㎡で、建物の主軸方位はN－11°－Wを示している。建物の検出レベルはT.P.＋28.95～29.20m、柱穴底でT.P.＋28.50～28.70mである。検出面での高さは西が高く東に下る。しかし、柱穴底のレベルは柱によって深さが異なるものの、一方に傾斜することはない。このことから、建物は水平な地盤の上に建てられたと考えられる。柱通りはＢ群の中では良く揃っている。柱痕跡が確認できた柱穴は13基であった。柱の直径は20㎝前後と考えられる。

柱間寸法は桁行1.75～1.90m、梁行1.45～1.80mである。柱間は桁行方向には一定であ

第193図　Ｂ群遺構配置図（1/800）



第194図　630－ＯＢ平面・断面図（1/80）

第195図　523・609・630－ＯＢ出土遺物（1/4）

るが梁行方向にややばらつきが見られる。

掘方は不定形でそれぞれ特異な形をしており、大小がある。大きいものは長軸径140㎝、深さ60㎝を計るなど、他の建物より大規模である。

630－ＯＢは総柱建物で柱間が短いことなどから倉と考えられる。さらに、３間×３間

という構造や柱穴の規模、柱穴の深さ、そして630－ＯＢの位置がＢ群の北端に置かれ、他の建物とやや離れていることなどから、Ｂ群の中で、重要な位置を占めた倉であると考えられる。

柱穴の埋土は10ＹＲ6/1褐灰色礫混じり土である。柱痕跡とは微妙な色調でしか判別できなかった。建物の柱穴の検出については、検出面上に上層の水田の耕作土から沈澱したと思われる第２酸化鉄（Ｆｅ）が付着したり、他の時期の柱穴が密集したために判別が困難なところがあり、掘方のプランが不正確になった部分もある。

640－ＯＰは639－ＯＰの上に掘り込まれた平安末～鎌倉時代の掘立柱建物638－ＯＢの柱穴である。また、641－ＯＰ上はこの建物の廂に並ぶ柱穴が検出される位置にあったが検出できなかった。

遺物は須恵器 杯Ａ、土師器 甕の細片少量が出土した。図化した遺物はＮ19：653－ＯＰ掘方から出土したもので、須恵器 蓋のつまみである。

468－ＯＢ（第193・196図参照）

Ｋ18ＧＱ周辺に位置する、５間×１間以上（7.05ｍ×2.0ｍ以上）の南北棟である。後世の削平のために建物の大部分は失われ規模は不明である。建物の主軸方位はＮ－28°30′－Ｗを示している。

建物の検出レベルはＴ.Ｐ.＋29.75～30.05ｍ、柱穴底のレベルはＴ.Ｐ.＋29.50～29.70ｍである。柱間寸法は桁行1.15～1.90ｍ、梁行2.0ｍである。柱穴の直径は30㎝前後で平面は円形のものが多い。

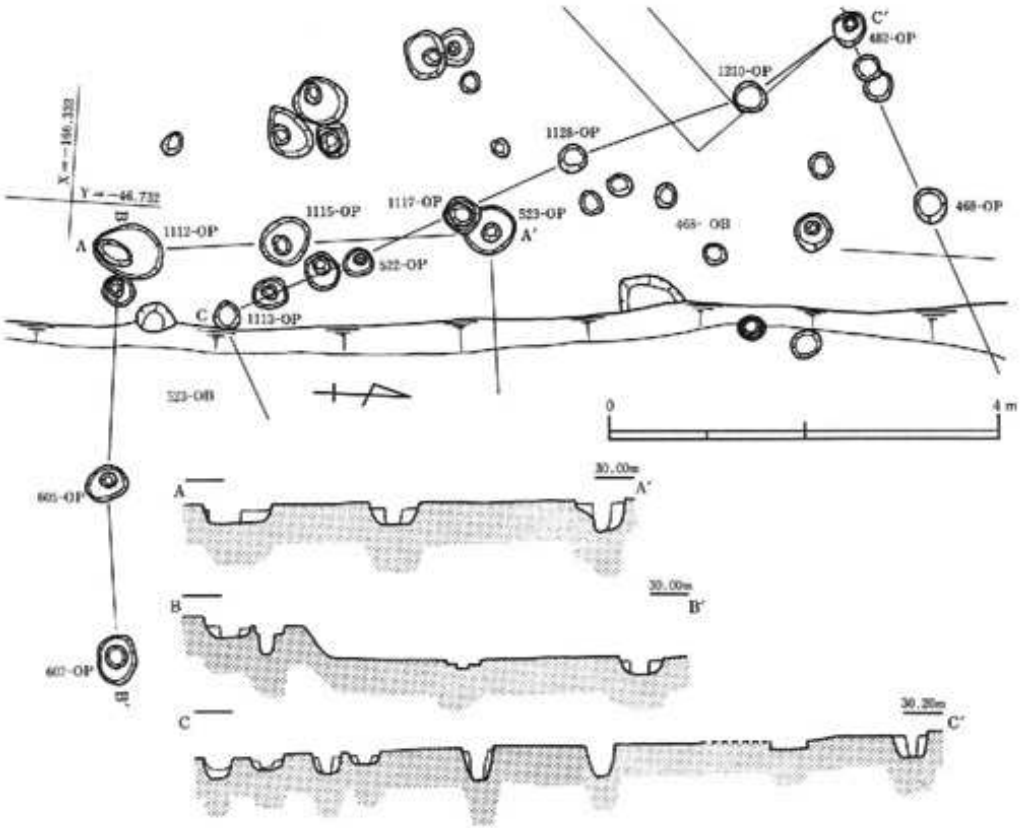
この建物は平安時代の建物475－ＯＢの柱並びと東辺の並びが平行することから、475－ＯＢの建物の一部であることも否定できない。今回は475－ＯＢとの距離が1.5間と半端であること、475－ＯＢとの間にある柱の通りが悪いことなどから別の建物とした。時期は出土遺物から奈良時代として報告した。

遺物は土師器 杯Ａ・甕・瓦塼などが出土したが図化できるものはなかった。

523－ＯＢ（第193・196図参照）

Ｋ18ＧＱ周辺に位置する。南北２間×東西２間（3.85ｍ×4.20ｍ）で468－ＯＢと切り合っている。後世の削平のために建物の大部分は失われている。建物の主軸の方位（南北を主軸として）はＮ－12°－Ｗを示している。

建物の検出レベルはＴ.Ｐ.＋29.35～29.70ｍ、柱穴底のレベルはＴ.Ｐ.＋29.20～29.40ｍである。



第196図　468・523－ＯＢ平面・断面図（1/80）

柱間寸法は南北1.64～2.20m、東西1.8～2.4mである。柱穴の直径は40～50㎝で円形のものが多く、柱痕跡は20㎝前後である。

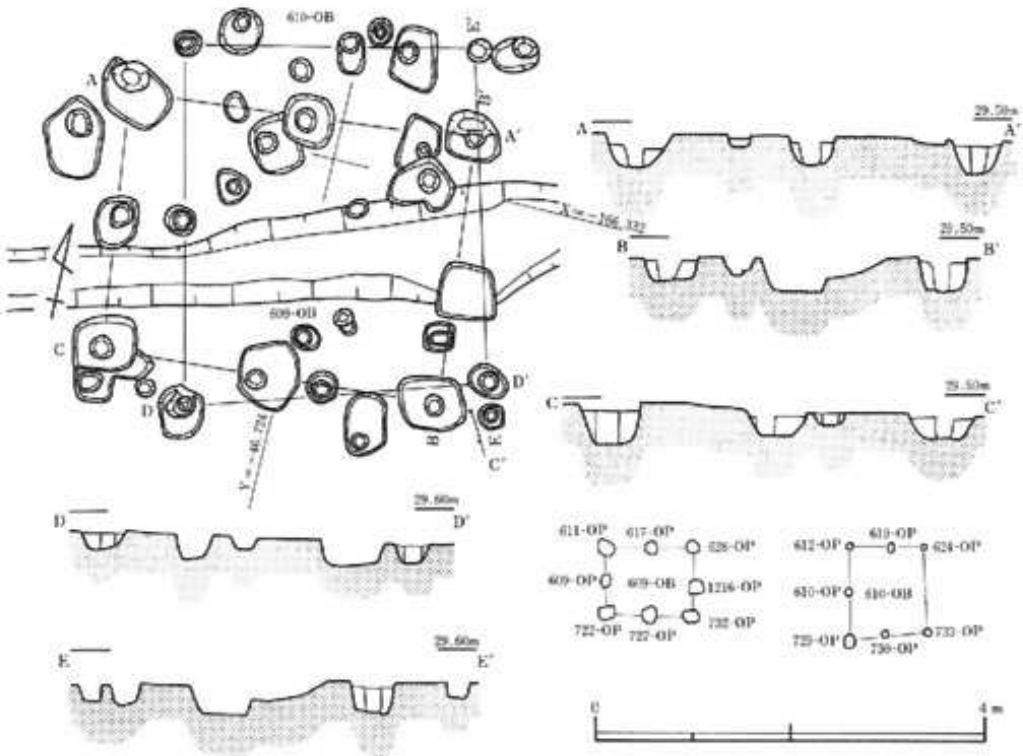
遺物は土師器 杯Ａ・甕などや、須恵器 杯Ａが出土した。図化したものはＮ17：1112－ＯＰ掘方、Ｎ18：607－ＯＰ掘方からそれぞれ出土した。

609－ＯＢ（第193・197図参照）

Ｋ18ＨＳ周辺に位置する。南北２間×東西２間(2.8m×3.6m)の規模を計る。面積は9.8㎡である。建物の主軸はＮ－80°30′－Ｅを示している。建物の検出レベルはＴ.Ｐ.＋29.45～29.30m、柱穴底のレベルはＴ.Ｐ.＋28.90～29.10mである。

柱間寸法は南北1.15～1.55m、東西1.6～1.9mである。建物の平面は東西に長い長方形を呈する。

610－ＯＢと重って検出されたが前後関係は不明である。さらに、建物の中央を現代の用水溝が流れるため、床束の有無は不明である。柱穴は直径50～60㎝程度の大きさで隅丸の方形になるものが多い。その他、628－ＯＰには拳大の根石が据えられていた。



第197図　609・610－ＯＢ平面・断面図（1/80）

遺物は土師器 杯Ａ・甕、須恵器 杯Ａ・杯Ｂ・壺などがある。図化したものはＮ20：609－ＯＰ掘方から出土したもので須恵器 杯Ａの底部である。

610－ＯＢ（第193・197図参照）

Ｋ18ＨＳ周辺に位置する。南北２間×東西２間（3.70m×3.15m）の南北棟である。面積は11.05㎡、建物の主軸方位はＮ－4°30′－Ｗを示している。

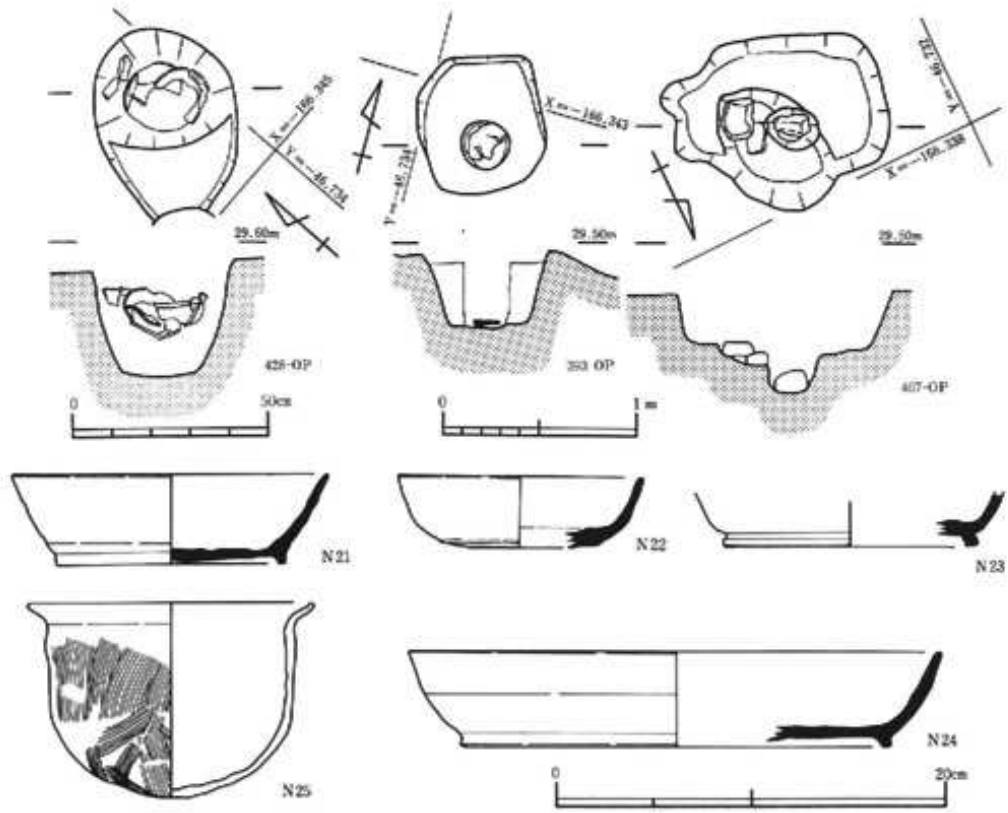
建物の検出レベルはT.P.＋29.45～29.60m、柱穴底のレベルはT.P.＋29.15～29.40mである。柱間寸法は桁行1.6～1.9m、梁行1.30～1.75mである。

やはり、中央に現代の用水溝が掘られたために、床束の有無は判然としない。609－ＯＢに比べ柱穴は小さく、平面は円形ないし楕円形のものが多い。

遺物は土師器 甕の細片が数片出土したのみで、図化できるものはなかった。時期は土師器から奈良時代と考えられる。

393－ＯＢ（第193・198・199図、図版55上・56上参照）

Ｋ18ＪＱ周辺に位置する、桁行３間×梁行２間（4.05m×4.15m）の東西棟で、総柱建物である。面積は16.5㎡を計る。建物主軸方向はＮ－79°－Ｅを示している。235－ＯＳ



第198図　393－ＯＢ出土遺物（1/4），428－ＯＰ（1/20），
393・407－ＯＰ（1/40）平面・断面図

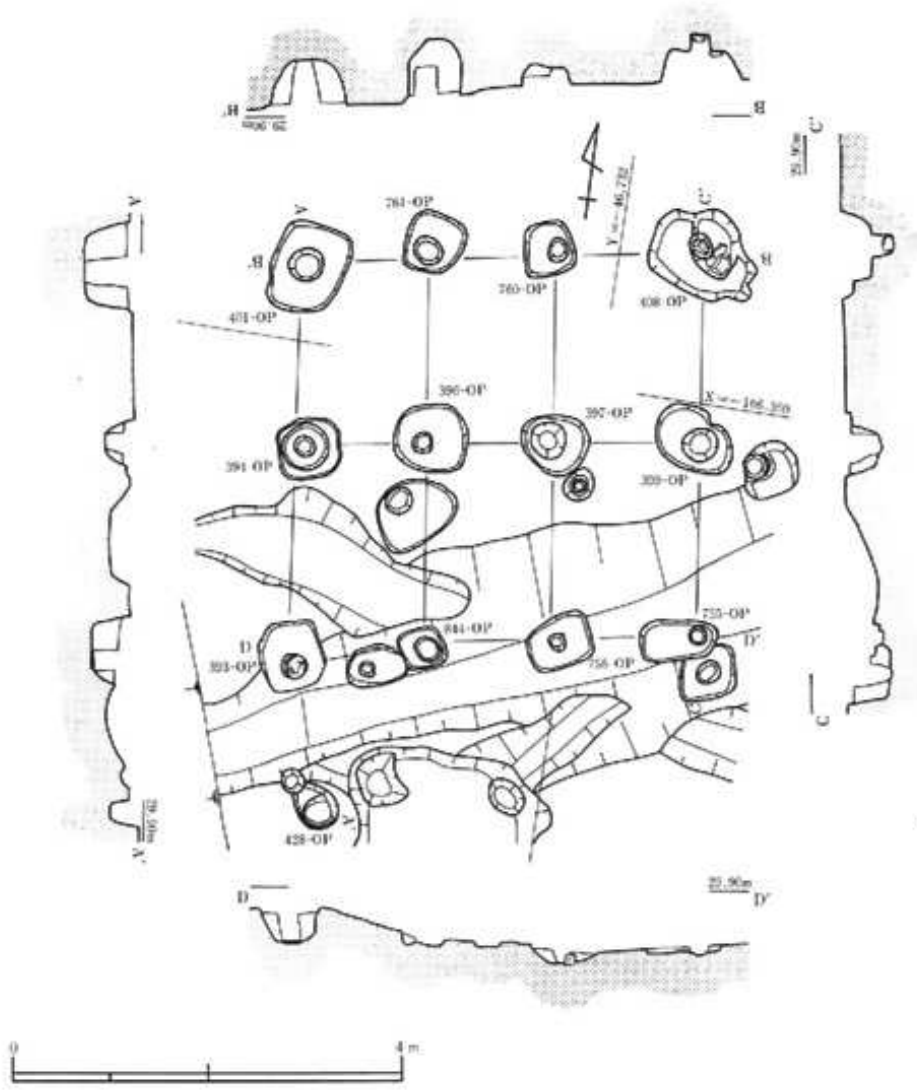
（中世用水溝）に切られ、南面の柱列の残りは良くない。

建物の検出レベルはT.P.＋29.60～29.90m、柱穴底のレベルはT.P.＋29.15～29.35mである。柱間寸法は桁行1.25～1.50m、梁行1.90～2.15mである。柱間が狭いこと、総柱であることから倉と考えられる。

393－ＯＰでは底に瓦塔が、408－ＯＰ・397－ＯＰでは人頭大の河原石が据えられ根石として使用されていた。408－ＯＰは形状が不定形で、根石が深さを違えて２回以上据えられた痕跡が見られた。393－ＯＰ・407－ＯＰは、いずれも隅の柱で、401－ＯＰも根固め石こそないものの規模の大きい柱穴であり、隅の柱が他の柱より頑丈な傾向にある。

床束については側柱と同規模のもので、柱の掘方は直径60～80㎝、深さ30～40㎝程度の規模である。柱は柱痕跡の観察から直径20㎝前後と考えられる。柱痕跡が確認できた柱穴は11基である。

428－ＯＰは建物西側の延長上にくるもので、長軸の長さ40㎝、深さ30㎝で、中には須



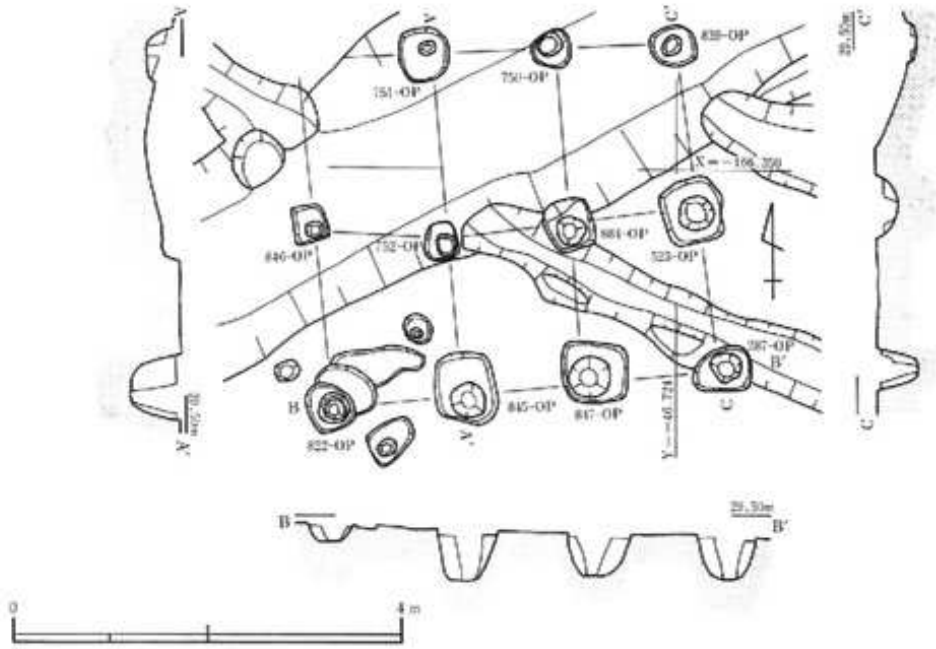
第199図　393－ＯＢ平面・断面図（1/80）

恵器 杯ＢＮ21・土師器 甕Ｎ25が据えられていた。位置から見て、393－ＯＢと関連すると思われるもので、建物の地鎮に関係する遺構の可能性がある。

遺物は土師器 杯Ａ・杯Ｂ・皿・高杯・甕、須恵器 杯Ａ・杯Ｂ・皿・高杯・鉢・壺・甕などがある。図化したものは、Ｎ22：761－ＯＰ掘方、Ｎ23：756－ＯＰ掘方、Ｎ24：394－ＯＰ掘方からの出土である。

387－ＯＢ（第193・200・201図、図版57上参照）

Ｋ18ＪＳ周辺に位置する。桁行３間×梁行２間(4.0m×3.6m)の東西棟で、総柱建物になる。面積は13.83㎡、建物の主軸はＮ－83°30′－Ｅを示している。235－ＯＳ（中世用水



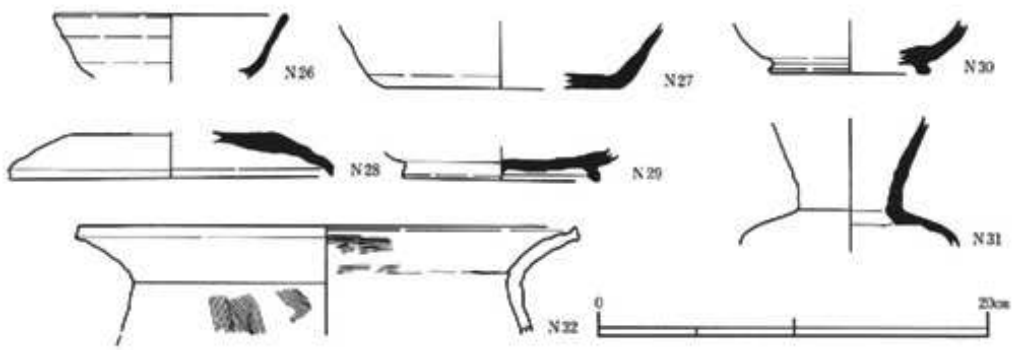
第200図　387－ＯＢ平面・断面図（1/80）

溝）に切られ、北寄りの柱穴の残りは悪く、北西隅の柱穴は検出できなかった。

建物の検出レベルはT.P.＋29.20～29.45m、柱穴底のレベルはT.P.＋29.20～28.80mである。西側の柱列と床束には浅い柱穴が多い。

柱間寸法は桁行1.30～1.35m、梁行1.65～1.80mである。柱間寸法が狭いこと、総柱であることから倉と考えられる。

柱穴の直径は40～70cmで束柱に小規模なものが見られる。平面は隅円方形ないし楕円形を呈するものが多い。柱痕跡は全ての柱穴で確認できた。柱の直径は確実なもので観察すると20cm前後と考えられる。



第201図　387－ＯＢ出土遺物（1/4）

遺物は土師器 甕、須恵器 杯A・杯B・杯蓋・壺などが出土した。図化したものはN26・N27：847－ＯＰ掘方、N28・N29：845－ＯＰ掘方、N30：884－ＯＰ掘方、N31：751－ＯＰ掘方、N32：366－ＯＰ掘方からの出土である。

須恵器はN26・N27が杯A、N29が杯B、N28が杯蓋・N30・N31が壺である。土師器はN32の甕のみである。

389－ＯＢ（第193・202・203図、図版57下参照）

調査区の東端に位置する建物で、K18ＩＵ周辺に位置する。掘立柱建物738－ＯＢと重なって検出された。桁行３間×梁行２間（4.55m×3.65m）の南北棟で、総柱建物になる。面積は15.82㎡で、建物の主軸方位はＮ－８°30′－Ｗを示している。

検出レベルはT.P.＋29.10～28.65m、柱穴底のレベルはT.P.＋28.40～28.67mである。建物は西側が高く東側に低くなっている。柱間寸法は桁行1.4～1.6m、梁行1.7～1.9mである。393－ＯＢ・387－ＯＢ同様、中世溝（用水溝）に切られ北側の柱列は残りが悪い。

掘方の直径は60～70㎝で楕円形のものが多いようである。掘方の深さは30～40㎝程度が検出できたが、束柱は深さ20㎝と浅い。柱痕跡は11基観察できた。推定できる柱の直径は20㎝前後と考えられる。柱間が狭いこと、総柱であることから倉と考えられる。

遺物は土師器 杯A・盤・蓋・甕、須恵器 杯A・杯B・皿・壺・瓦塔などが出土している。

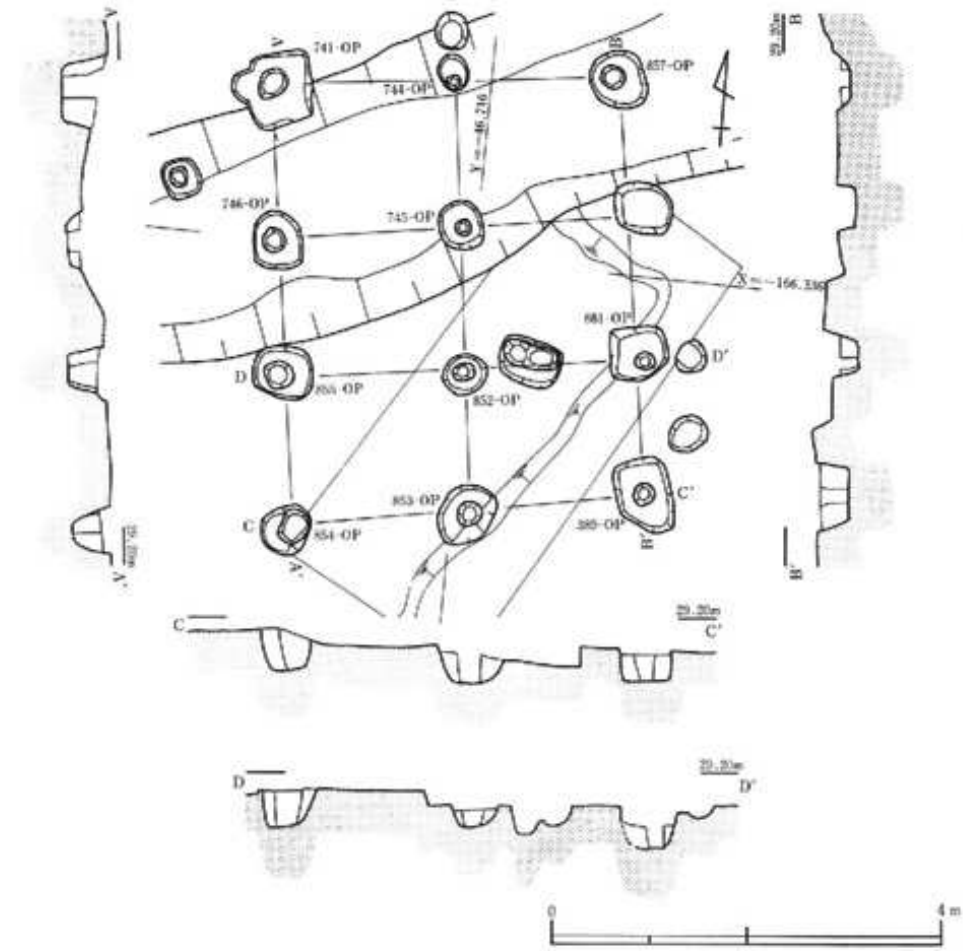
図示したものはN33・N34：853－ＯＰ掘方、N35：389－ＯＰ柱痕跡、N36：881－ＯＰ掘方、N38：746－ＯＰ掘方、N39：855－ＯＰ掘方、N40：854－ＯＰ掘方、N37：741－ＯＰ掘方からの出土である。土師器 杯AN33・N34は外面底部をヘラケズルするもので、内面の暗文は残りが悪く不明である。土師器 高杯N38・N39は内面に暗文を施す。

354－ＯＢ（第193・204・205図、図版58参照）

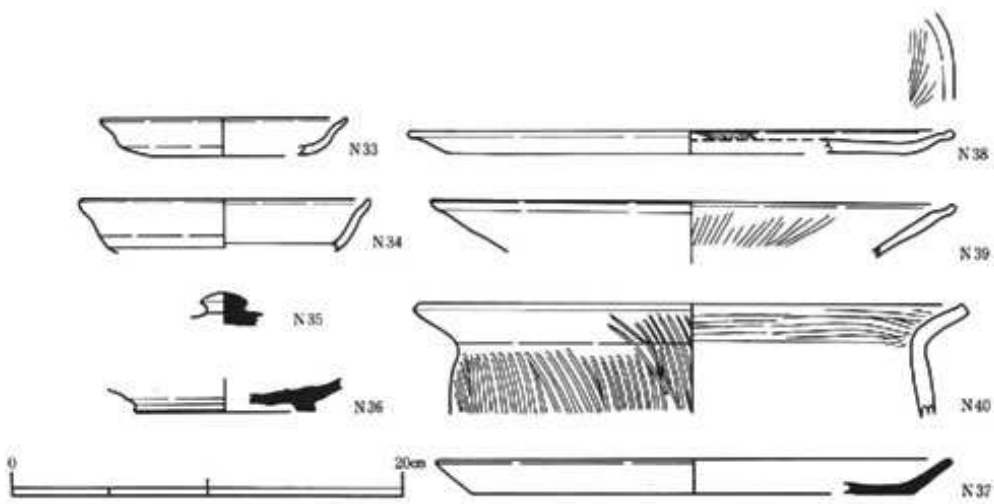
K18ＬＴ周辺に位置する。桁行３間×梁行２間（6.65m×4.40m）の南北棟である。面積は29.2㎡を計る。建物の主軸方位はＮ－９°－Ｗを示している。柱通りは良いほうで、柱間寸法は桁行2.15～2.30m、梁行2.05～2.35mである。柱間は全て２ｍを越えるものでやや広い。総柱でないことや、柱間が広いことから住居と考えられる。

柱穴の埋土は10ＹＲ6/1褐灰色細砂質土で、柱痕跡はやや暗い色になるのみでほぼ同質である。

建物の検出レベルはT.P.＋29.05～29.20m、柱穴底のレベルはT.P.＋28.70～28.80mである。柱底のレベルは西側が高く、東側がやや低い。西から東に傾斜した場所に建てら



第202図　389－ＯＢ平面・断面図（1/80）



第203図　389－ＯＢ出土遺物（1/4）

れたためと考えられる。柱穴は隅円の方形に近いものが多く、大型のもので直径50～70cmを計る。柱痕跡は全ての柱穴で確認できた。柱の直径は15～20cm前後と考えられる。柱穴の中には372－ＯＰ・373－ＯＰのように楕円形を呈するものも見られた。359－ＯＰと373－ＯＰは長軸を建物主軸方向と45°の角度に掘削している。柱間寸法を合わすために行なわれたとも考えられる。

この建物は後述の282－ＯＢと柱列がほぼ一致している。しかし、北から4間のところで建物の梁行の柱間が狭いこと、妻側に間の柱が入ることから別の建物と考えた。

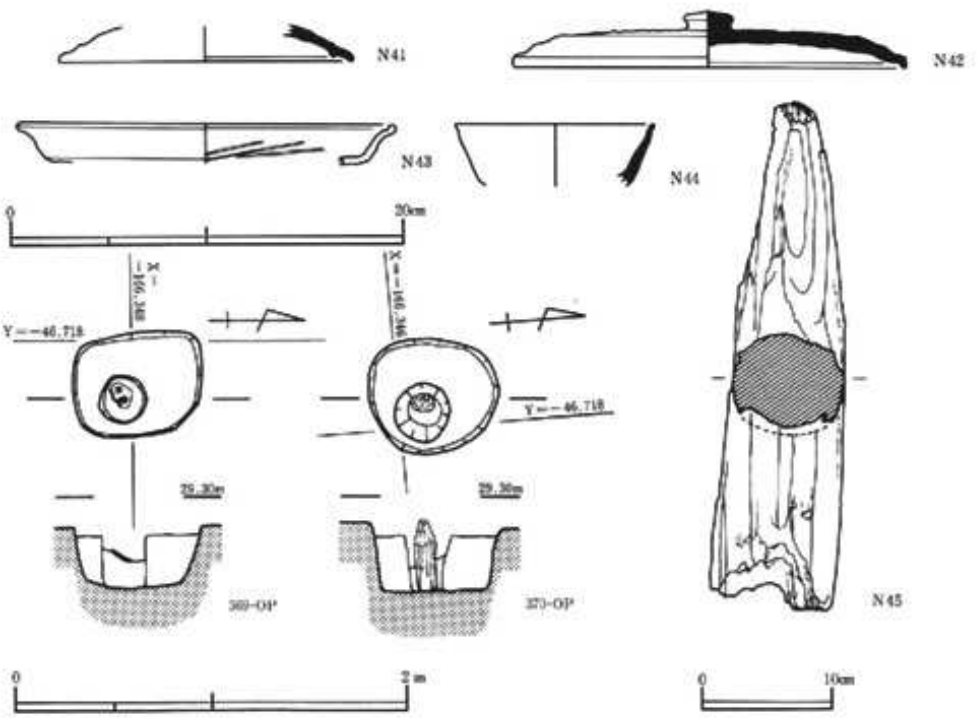
370－ＯＰには柱材が遺存している。369－ＯＰには柱を抜き取った後、土師器 甕の体部片を据えていた。地鎮の可能性がある。

遺物は土師器 杯A・甕、須恵器 杯A・杯蓋・甕が出土した。

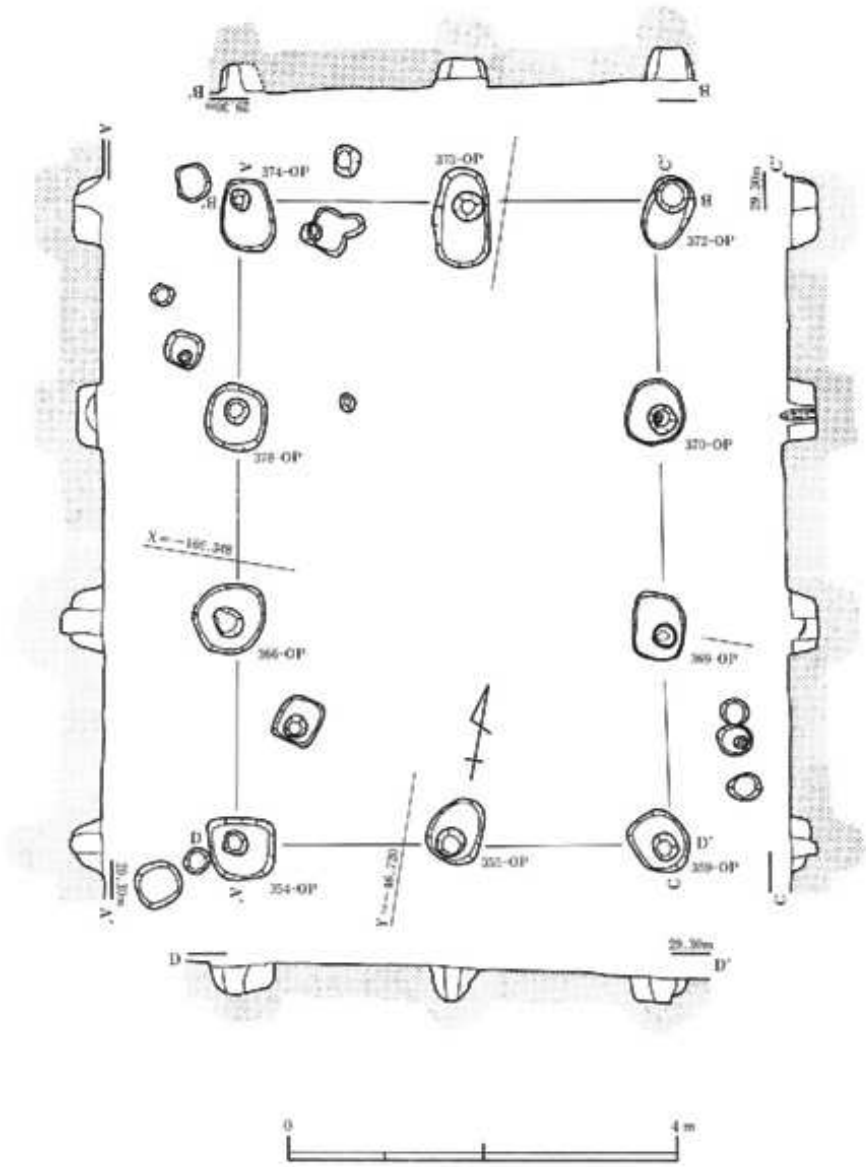
このうち図化したものは、N41：374－ＯＰ柱痕跡、N43：369－ＯＰ柱掘方、N42：359－ＯＰ柱掘方、N44：366－ＯＰ柱掘方である。

282－ＯＢ（第193・206・207図、図版58上・59上参照）

B群の中で最も南にあたる建物で、K18NT周辺に位置する。桁行5間×梁行2間(8.6



第204図　354－ＯＢ出土遺物（土器1/4，柱材1/6）
369・370－ＯＰ平面・断面図（1/20）



第205図　354－ＯＢ平面・断面図（1/80）

m×4.35m)の南北棟である。面積は37.7㎡を測り、B群の住居で検出された建物の面積としては最大である。建物の主軸方位はN－12°－Wを示している。

建物の検出レベルはT.P.＋29.10～29.35m、柱穴底のレベルはT.P.＋28.80～29.00mである。柱底の高さは西が高く東が20㎝低い、当時の地形が西から東に傾斜した場所に建っていたと考えられる。柱の並びは、桁行は長さがほぼ等しく平行になっているが、南側の梁行が歪んで桁行と直角にならないため建物全体はやや歪な印象を与える。

柱間の寸法は桁行1.4～2.0m、梁行2.00～2.35mである。柱間隔は概ね梁行の方が広く、桁行がやや狭い。354－OBと同じくこの群の中では柱間が長い建物である。掘方は直径50～80㎝で円形ないし隅円方形のものが多いようである。柱痕跡が確認できた柱穴は13基である。このうち残りがよく、柱の直径を計れるものを観察すると、柱の直径は15～20㎝程度と考えられる。

遺物は土師器 杯A・杯B・皿・高杯・甕、須恵器 杯A・杯B・皿・高杯・鉢・壺・甕などが出土している。

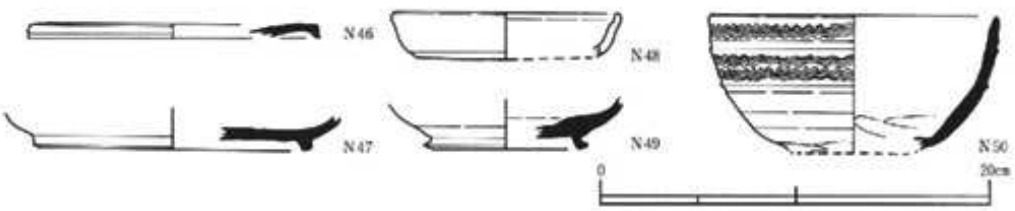
図化したものは、N46・N47：600－OP掘方、N48：352－OP掘方、N49：331－OP掘方、N50：282－OP掘方からの出土である。N46～N49までは奈良時代の遺物、N50は5世紀代の須恵器である。

227－OB（第193・208・210図、図版54下参照）

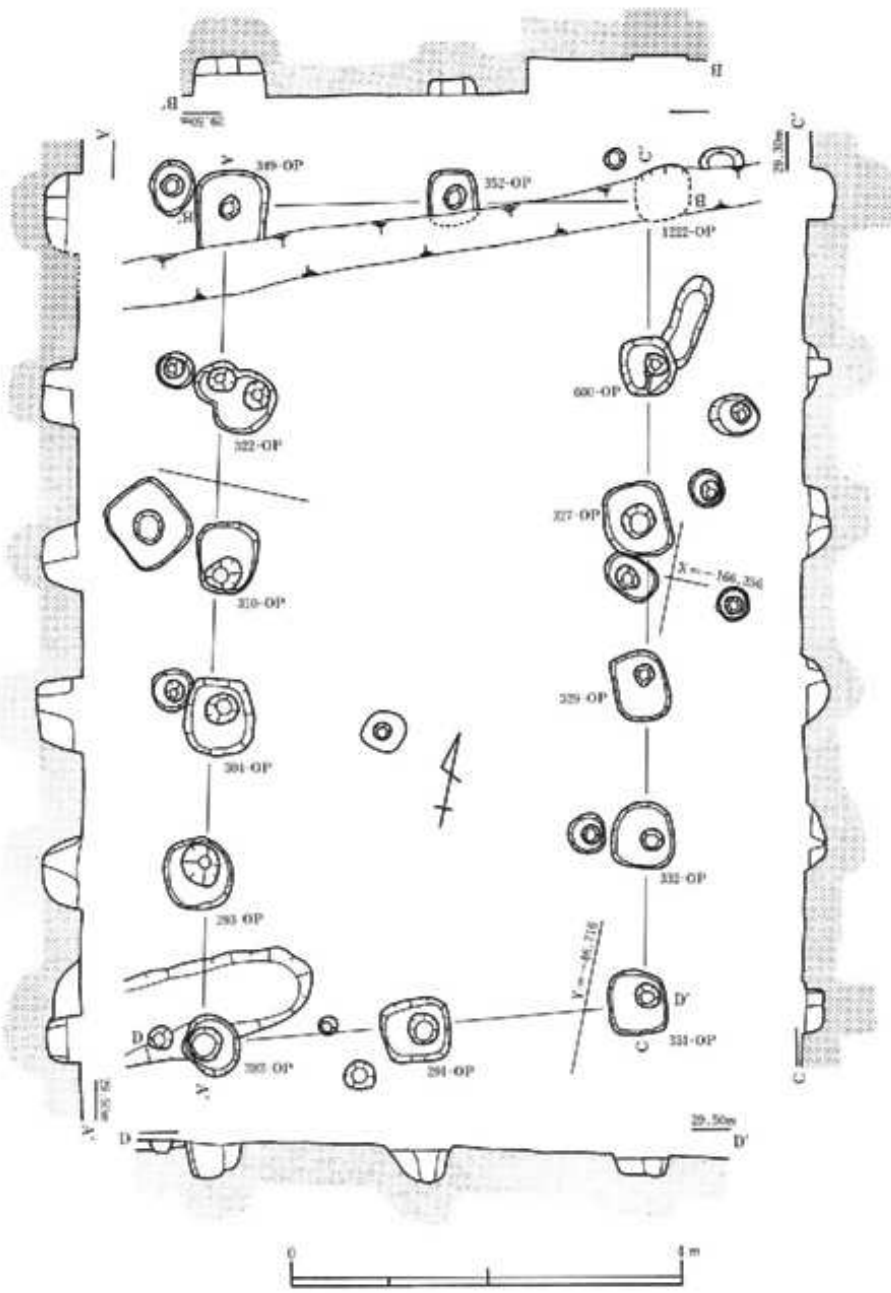
K18OR周辺に位置する。南北3間×東西1間以上（7.45m×2.80m以上）部分が検出された、建物のほとんどは調査区外にあるため、全体の規模は不明である。検出された範囲内では床束は認められなかった。

建物の主軸方位はN－17°30′－W（東辺で計測）を示している。建物の検出レベルはT.P.＋29.45～29.60m、柱穴底のレベルはT.P.＋29.15～29.50mである。柱穴は検出面から30㎝前後が残っていたが、1223－OPなどは深さ5㎝程度しか遺存していなかった。

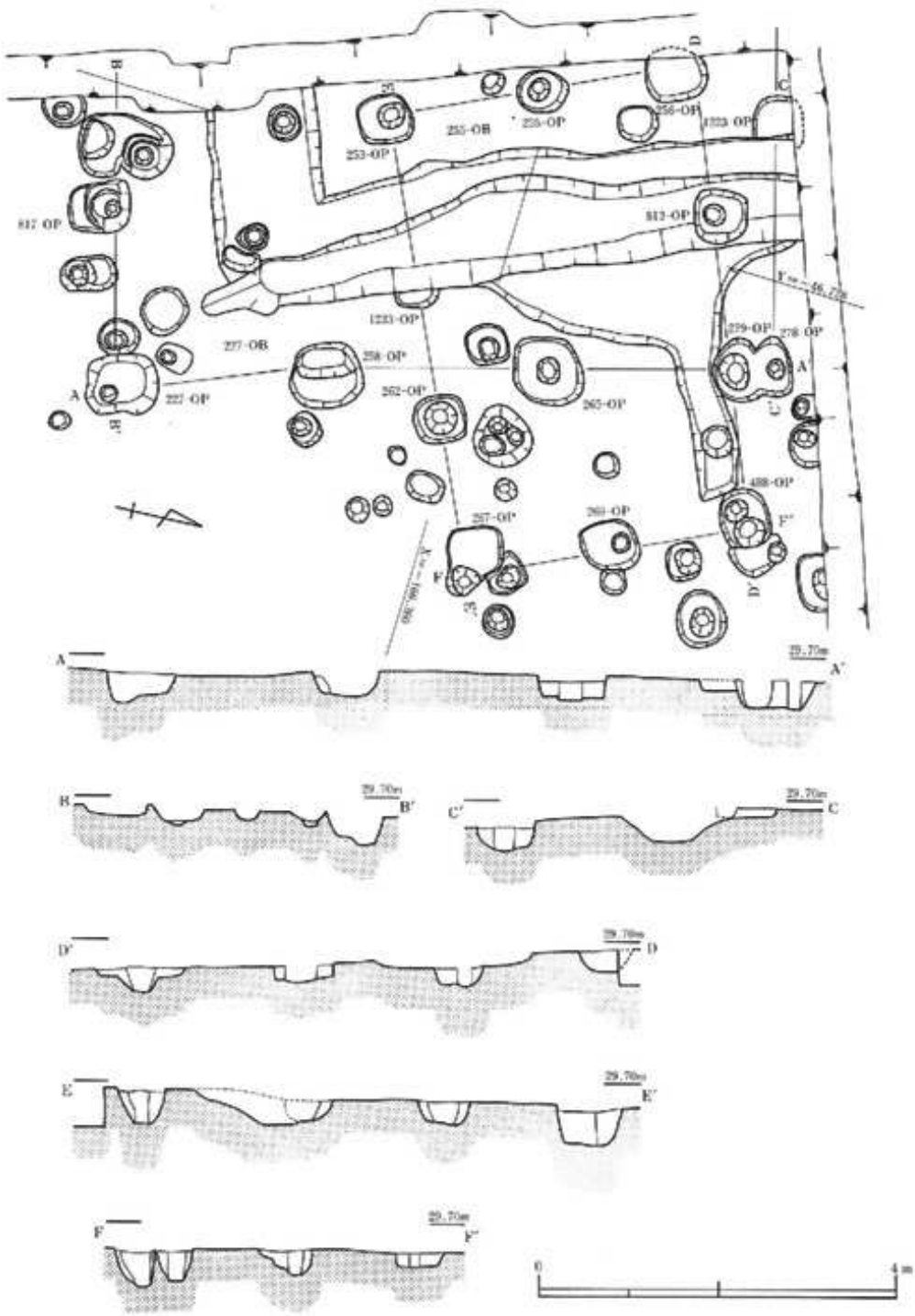
柱間寸法は南北2.8m、東西2.5mである。他の奈良時代の建物に比べ柱間寸法が広く、掘方も直径70～80㎝と大規模なものである。平面は隅円方形である。柱痕跡が確認できた



第206図　282－OB出土遺物（1/4）



第207図　282－ＯＢ平面・断面図（1/80）



第208図　227・255－ＯＢ平面・断面図（1/80）

のは4基で、柱の直径は20㎝前後と考えられる。

全体規模は不明だが、大庭寺遺跡で検出された奈良時代の建物では最も大きい柱間を有しており、最大規模の建物になる可能性がある。方位は西に大きく振るもので、近似した方向の建物はⅡ区では610－ＯＢのみである。西側にこの建物に伴う時期の1群が存在する可能性がある。

遺物は土師器 甕、須恵器 杯Ａが出土している。

図化したものは、N53・N54：258－ＯＰ掘方からの出土である。いずれも奈良時代のものである。

255－ＯＢ（第193・208・210図、図版54下参照）

K18ＰＲ周辺に位置する。桁行3間×梁行2間（5.25m×3.50m）の東西棟である。面積は17.64㎡で、床束は見られない。建物の主軸方位はＮ－64°30′－Ｅを示している。建物の検出レベルはT.P.＋29.40～29.64mで、柱穴底のレベルはT.P.＋29.00～29.35mである。柱底のレベルから観察すると、西から東に傾斜するようである。

古墳時代の257－ＯＳと重なり、同質の埋土であるため、1233－ＯＰは痕跡しか検出できなかった。柱間寸法は桁行1.7～1.8m、梁行1.5～1.8mである。掘方の直径は60～70㎝で、平面は隅円方形ないし楕円形のものが多い。

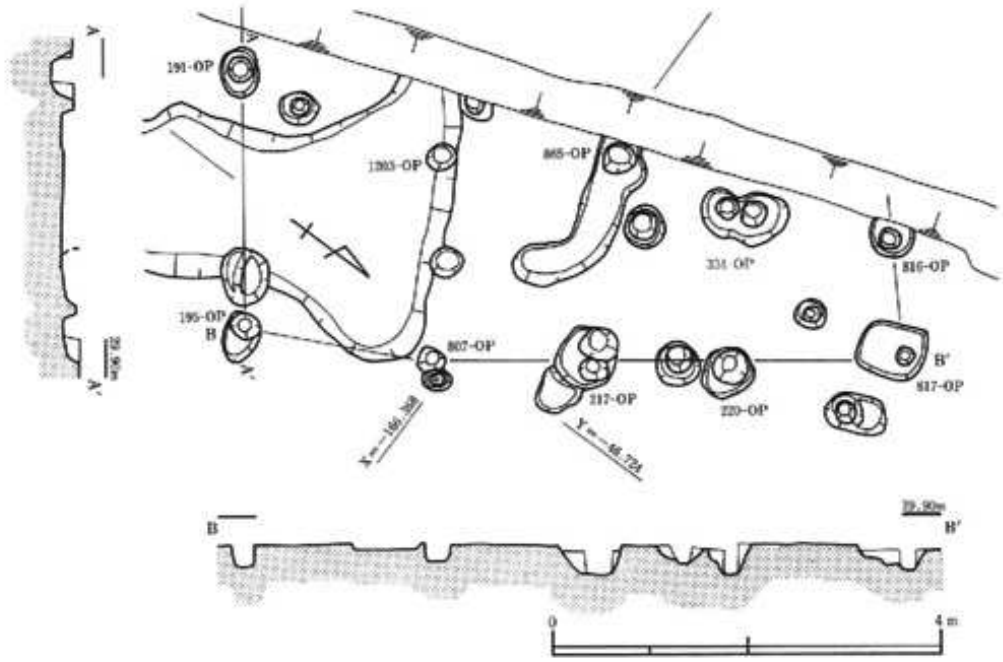
遺物は須恵器 杯Ａ・高杯・杯Ｂ・杯蓋・甕などが出土した。この他、窯体片が出土している。図化したものは、N55：267－ＯＰ掘方、N57：255－ＯＰ掘方、N56：256－ＯＰ掘方からの出土である。

191－ＯＢ（第193・209・210図、図版63上参照）

調査区西端に見つかった建物で、K18ＱＳ周辺に位置する。4間×1間以上(6.8m×2.7m以上）の規模である。建物の半分以上は調査区の西側にあるため、全体の規模は不明である。北端は掘立柱建物227－ＯＢと接している。214－ＯＰ・1203－ＯＰは床束になると思われる。建物の主軸方位はＮ－37°－Ｗ（東辺で計則）を示す。この建物は大きく西に振るもので他の建物の方向とは異なっている。この方位をとる建物は468－ＯＢとこの建物の2棟である。柱穴が小さく奈良時代の中でもやや時期が降る可能性がある。

建物の検出レベルはT.P.＋29.60～29.70m、柱穴底のレベルはT.P.＋29.30～29.40mで、柱間寸法は南北が1.4～2.0mである。柱の並びや柱間は不揃いのものが多い。柱痕跡の直径は20㎝前後で、平面は円形ないし楕円形を呈する。

遺物は土師器 杯Ａ・甕、須恵器 杯Ｂ・甕などが出土した。



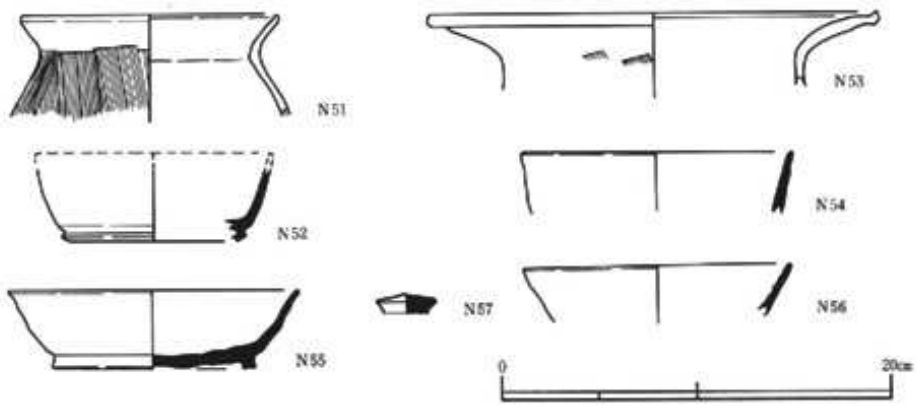
第209図　191－ＯＢ平面・断面図（1/80）

図化したものは、N51：334－ＯＰ柱痕跡、N52：817－ＯＰ柱痕跡から出土したものである。N51は土師器 甕、N52は須恵器 杯Ｂである。

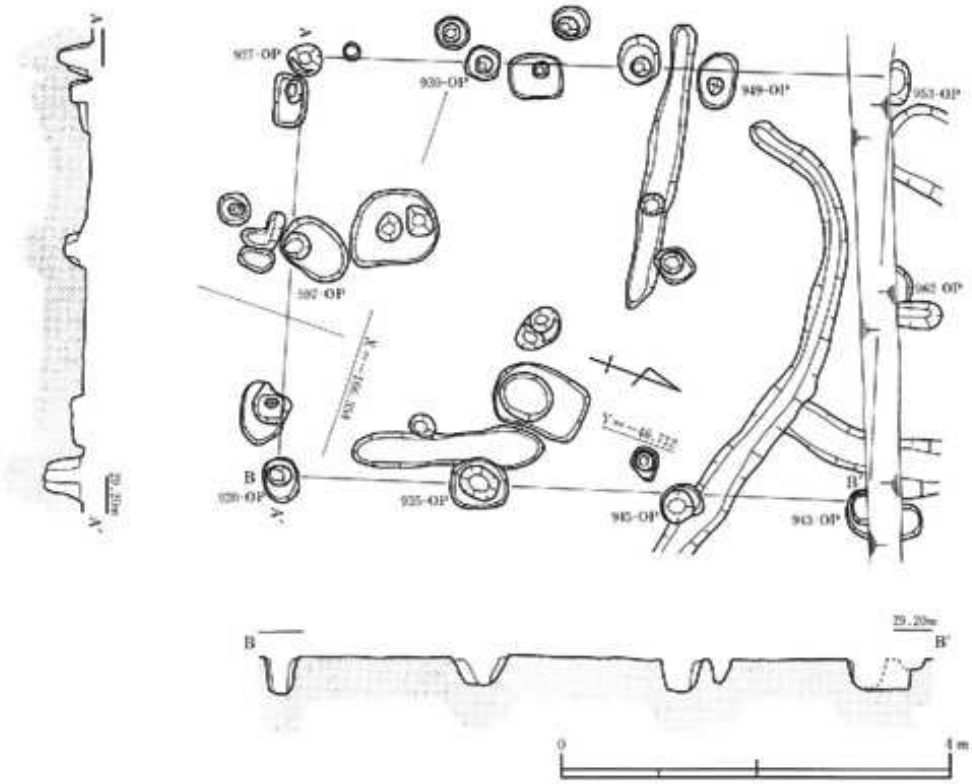
325－ＯＢ（第193・211・212図参照）

K18MU周辺に位置し、282－ＯＢの東に接して建つ建物である。建物規模は桁行３間×梁行２間(6.1m×4.4m)の南北棟で、面積は26.75㎡である。建物の主軸方位はＮ－17°30′－Wを示している。床束は認められなかった。

柱穴の埋土は10Y R5/2灰黄褐色砂質土で、柱痕跡はこれよりやや暗色である。



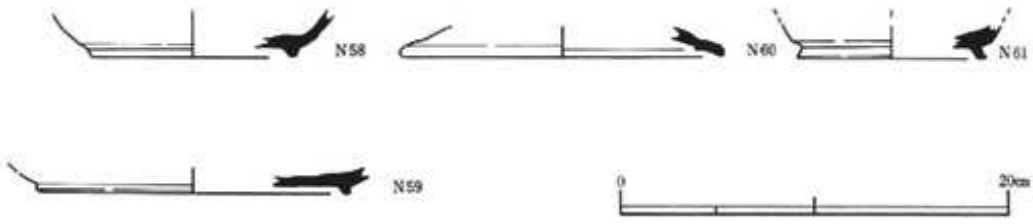
第210図　191・255・227－ＯＢ出土遺物（1/4）



第211図　325－ＯＢ平面・断面図（1/80）

建物の検出レベルはT.P.＋28.95～29.15mで西から東に傾斜している。柱穴底のレベルはT.P.＋28.60～28.80mである。柱間寸法は桁行1.84～2.40m、梁行2.0～2.4mである。柱穴掘方の直径は30～70cmと大きさにかなりの差が見られた。西側柱列の掘方は規模が小さく、浅いものが多く、削平の影響によると思われる。構造的には354－ＯＢに匹敵するものであるが掘方はやや小規模である。

遺物は土師器 杯A・蓋・甕、須恵器 蓋などが出土した。図化した遺物はN58・N59：951－ＯＰ掘方からの出土である。N58・N59は須恵器 杯Ｂの底部の細片である。高台径



第212図　325・371・890－ＯＢ出土遺物（1/4）